

---

# 最弱少年と最強少女

新藤光太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最弱少年と最強少女

### 【Nコード】

N5015U

### 【作者名】

新藤光太

### 【あらすじ】

超能力。

これを聞けば未知の能力だと思っ人が多いだらう。しかし、こんな能力は誰にでも扱えるようになる。とある少年がそうだったように、その機会に恵まれれば扱えるのだ。

だが、それ相応の代償を支払う事になってしまつが……。

とある少年は日常を失つた。それはあまりにも唐突に、もろくも崩れ去つた。

「さあ、始めようか。楽しい、楽しい殺し合いを、な」

「上等じゃねえか。だけど、始めるのは殺し合いじゃねえよ」

不幸にも一つの事件に関わってしまった少年は、これから様々な事件に巻き込まれる。

最強のようで、最弱な能力を持った少年の戦いが、今始まる。

エプリスタとの重複投稿です。

王道ものを書いてみたくて書き始めたものです。主人公の能力は、一巻では明らかにありません。

## プロローグ

新藤鏡夜は命の危機に瀕していた。

目の前には黒い影のようなものが、風が吹くたびに小刻みに揺れている。

なんとも不気味な光景だ。

(なんなんだよ、これは)

そして、その物体を挟んだ向こう側には、冷たい路地裏の地面に夥しい量の間人、犬、猫、鳥が倒れこんでいた。

それらはピクリとも動かない。

鏡夜は原因を知っていた。

目の前にいる化け物共のせいだ。

あいつらが『生きているもの』に触れた途端、まるで糸の切れた操り人形のように倒れてしまったのだ。

なにをしたかなんて分からない。

だけど、一つハッキリしている事がある。

自分もあの人達のように殺されてしまうのだろう。その事実を脳が理解すると同時、全身から嫌な汗が噴き出し、体の震えも、まるで極寒の土地に裸で突っ立ているように激しくなってきた。

鏡夜は少しでも恐怖を取り払おうと、頭をブンブンと振る。彼の頭頂部にあるピヨコンと立っている髪が、一緒に揺れた。

しかし、こんな事をしただけで振り払えるような恐怖じゃない。

黒い物体が近づいてくる。

(一体、どこで間違えた?)

その手がもう少しで彼に触れそうになる。

(俺は日常を過ごしてただけじゃないか。まあ、今日はいつもの二割り増しくらい不幸だったけど、そのラストがこれかよ)

その手が、鏡夜に触れる。



## 崩れ始めた日常

学校の帰り道、鏡夜は大通りに面している歩道を走っていた。シヨーウインドウの中にあるテレビが、近くで起きたバス転落事故を、大きく扱っているのが見えた。

理由は簡単である。今日発売の小説を買いに行くためだ。

人を避けながら、自身の最速の速度で走る鏡夜だったが、彼は不幸な人間だ。

人にぶつかったと思ったら、その人物はスリだった。

財布を盗まれたとすぐに気づいたので、ここでは大して時間を食わなかった。

だが、その後も不幸な事態は続く。

銀行から出てきた強盗に人質にされたり、警察が来て解放された後に長つたらしい話をされたり、すぐ目の前のビルにトラックが突っ込み、救急車を呼んだり、とにかく時間がかかった。

そんなこんなで、鏡夜が目当ての本屋に到着したのは二十一時。

急いで本屋に入り、一番奥の小説コーナーに行った所、幸運な事に一冊だけ残っていた。

「よっしゃー！ 運が向いてきた！」

そう叫びながら本棚に飛び掛るように突撃したのだが、それより数秒早くおばさんに持っていかれたのである。

「あー！ あそこで強盗に捕まってなければー！！」

地面に倒れこんだ鏡夜は、拳を握り締め、わりと本気で床を殴る。ドンドン！ と店の中に音が反響していると、ガードマンらしき人物に外に追い出されてしまった。

「ふ……ふふふふ……。もう叫ぶ気力も出ないや」

本屋から追い出された鏡夜は、ポツポツと街頭の灯りが見える裏道を歩いてた。

ビルが建ち並び人が盛んに行き来する表通りとは異なり、彼が歩いている道は誰もいない。

見える範囲にあるものは、高いビルの裏口と街灯ぐらいのものだ。(あーあ、畜生。今日はいつにもまして不幸だなー。いつもならあんなに事件には巻き込まれないんだけど……)

そんな考え事をしている鏡夜の後ろからカツツ、というハイヒールで地面を歩いてるような音が聞こえてきた。

余りにも唐突に聞こえてきたその音に、鏡夜は少しギョツとしながら振り向く。

だが、後ろには誰もいない。

冷たいコンクリートの塊が見えて、それを照らし出す光があるだけ。

鏡夜は首を傾げながらまた前を向いて歩き出す。

だが、そこでまたカツツという澄んだ音が響いてきた。

彼は勢い良く振り返る。

だが、なにもいない。

(ここここここ、これはもしかしてゆゆゆ幽霊さんですか!?)

ビクビクしながら歩き出した鏡夜を追いかけるように、またあの音が聞こえる。

恐怖のため走りだした鏡夜の背後からは、ずっとあの音が響いてきている。

一体全体なにがどうなっている。

静かな夜の道には誰もいない。

思えば、これもおかしいのだ。

いくら裏道とは言っても、ここは都会の中心部である。

なのに、人っこ一人いないのは明らかにおかしい。

だが、後ろから変な音だけが追ってきているという心霊現象っぽいものを体験している彼には、そんな状況に気づく心のゆとりは存在していない。

息を切らせ、汗を体中から噴出させながら走っている鏡夜の目の

前に曲がり角が見えてきた。

そこを高速で曲がりきろうとした彼に、ドン！ と音を立ててなにかがぶつかった。

「きゃっ」

それは可愛らしい声を上げながら、持っていた補助バッグを冷たい地面に放り投げ、尻もちをつく。

鏡夜が肩に提げていた補助バッグも、ぶつかった衝撃で同じ方向に吹っ飛んでいく。

少女が地面に転んだ際に、有名高校の短いスカートがめくり上がり中身が見えてしまったのだが、鏡夜はそれに気付かず。あまつさえ、

「うわあああつあ！ 人間だ！！」

「はあ？ なにあんた、頭大丈夫かしら？」

ぶつかった事を謝りもせず、自らが捜していた自分以外の人間に出会えた事に感激して叫んでしまう。

目の前で尻もちをついていた茶色い肩まである髪の少女は、そんな鏡夜を不審人物を見るような目で睨みつける。

だが、そんな彼の後ろから例の音が聞こえてきた。

ハッとして、我に返った鏡夜はぶつかった拍子に落としてしまった紺色の補助バッグを急いで拾い上げ、目の前の少女に告げる。

「君も早く逃げたほうがいいぞ！ 変な音が近づいて来ているから！ それじゃ！！」

鏡夜は相手の返事も聞かずに走り去る。その後ろから『あたしのカバンがない！ あっ、ネックレスも！』とか聞こえているが、そんなの気にもしてられない。

とりあえずは暗い裏道よりも、明るい表通りに出ようと、鏡夜は車が頻繁に行き来している道路目掛けて全速で走る。

しかし鏡夜は、いきなりその速度を落とすために靴の底でブレーキをかける。

理由は単純明快。さっきまでは後ろから聞こえてきていたあの音

が、前方から聞こえてきたのだ。

やばいと感じた少年は、周りを見て別の道を探し出し、そこに向かって走っていく。

しばらく走っていると、曲がり角にぶつかった。

最初、右の道を選ぼうとしたのだが、そっちらからはカッーンという軽快な音が響いてきていた。

鏡夜は進路を変更して左の道を走る。

また曲がり角。そして鏡夜が左側に行こうとすれば、そっちらから音が聞こえてくる。

次の所では右に曲がった所、前方から音は聞こえてこず、後ろからだった。

そんな事を何回か繰り返していると、嫌でも気づかされる事がある。

(誘導……されている?)

そんな鏡夜の考えは当たっているように思える。

なぜなら、ドンドン路地の奥にまで走ってしまったからだ。

彼が今走っている場所は、周りを背の高い廃ビルに囲まれている薄暗い道。

廃ビルの表面には生命力の強い蔦が絡まっていたり、壁から雑草が飛び出したりしている。

亀裂の入っているコンクリートの壁を横目に、少年は足を止めた。止めざるをえなかった。

一瞬前まで、そこには絶対にいなかった人達が、急に姿を現したから。

目の前に広がる、人ごみのせいで。

老人、女性、少年、男性、幼い子まで。何十人という人間が、狭くて小さな路地にひしめき合っている。

「な……んだ、この人達」

鏡夜は思わず呟く。

その声に反応したのか、今まで不安そうな顔をして隣の人と話し

ていた人全員が、一斉に彼の方に振り向く。

皆、疲れ果てているように見えた。

「あんたも、変な足音のせいでここまで来ちまったのかい？」

沢山の人を掻き分け、面倒見の良さそうなおばさんが話しかけてくる。

「あんたもって事は、あんた達もか!？」

全員が頷く。

(なんてこった。俺以外にもこんな沢山の人が……)

ここまで考えて、鏡夜は異変に気付いた。

「なんで誰も逃げだそうとしないんだ？」

そう、ここにいる人達全員に言える事なのだが、皆不安そうな表情をしている割には、逃げ出す素振りを見せないのだ。

まるで、逃げられないと分かっているかのように。

鏡夜の疑問を聞いて、おばさんは今彼が走ってきたビルに挟まれている通りを指差す。

「あそこに向かって走ってご覧なさいな」

意味が分からずに鏡夜は眉をひそめたが、一応言われた通りに走ってきた道を引き返してみる。

が。

ドン、と。なにかにぶつかった。

それは固い壁にぶつかったような衝撃だった。

ぶつけた鼻の頭をさすりながら、鏡夜は前を見る。

そこにはなにもなかった。通常通りの薄暗い路地裏が遠くまで見えるだけ。

だが、手を前に押し出してみると、確かになにかに触れる。

彼は首を傾げながら、頭の上に疑問符をいくつも浮かべる。

「わかったかい？ そこにはなにもないのに、確かに壁みたいなのが存在する。だから私達は逃げる事ができないんだよ」

そんなおばさんの言葉を聞きながら、鏡夜は右拳を強く握り締め思い切り目の前の空間を殴るように突き出す。

殴った時の音は薄い壁を殴打したかのように、軽い感じの音が反響した。

しかし、殴った感触は石のようだった。

「痛っ！！」

拳の皮がずりむけていて、血がわずかに滲んできている。

右拳を左手で包みながら、彼は反対側の通路を見る。

そっちは行き止まりだった。

つまり、ここから抜け出すことは出来ないのだ。

どうすればいい。

ここには誘導されて来た。

そして、目の前にいる大勢の人々もそうだと言っていた。

今日の路地裏に人がいなかったのは、こういう理由があったのだろう。

あの足音は誰が出していたのだろうか。

ここまで誘導してきた奴らの目的は？　こんなに大勢の人を集めた理由は？　今からここでなにをしようと思ってるのか。

分からない事づくめだ。

鏡夜は冷たいコンクリートの地面に座り込んだ。

補助バッグを自分の横に置く。

と。そこで気付いた。

ここに来る前にぶつかった少女。

あの少女は音が聞こえていなかったのだろうか。

ぶつかった時もあの音は聞こえていた。

それで自分は逃げた方が良く、あの少女に忠告したはずだ。

なのに、あいつは逃げる所か、バッグやアクセサリーが無い等とほざいていた。

おかしい、と思う。

なんであの少女は音を聞いても逃げなかったのか。

ただ単に、普通の人間が歩いているだけだと思ったのか。

……いや、そうではないと思う。

思い返せば、路地裏といえ都市の中心部にあたる場所に、人がいなかった事を怪しいと思わないはずがない。

なにかが起こっている、そう感じるのが普通である。

あの女。なにかを知っているのではないか。

それにしても、と。鏡夜は別の事を考える。

(この見えない壁のようなものはなんなんだ?)

この路地裏に入る事は出来たのに、出る事は出来ない。

どういう仕組みになっているのか、さっぱり分からない。

地面に座りながら悩んでいる鏡夜だが、目の前にいるおばさんが微かに脅えているような声を出す。

彼は、そのおばさんが見ている視線の先　自分の真上に視線を投げかける。

そこには、一本の黒い手がなにもない空間から飛び出してきていた。

「う、うわあああ！」

その光景に鏡夜は絶叫する。

その声に反応するかのように、黒い手が下へと、鏡夜の頭を掴むかのように移動を始める。

少年は急いで座っている体勢から、前転をするように転がり、それから逃れる。

「な、なんだよ……これ」

ウネウネと。気持ち悪く、軟体動物のように蠢きながら、その手は地面に着いた。

瞬間。

焼けている石に水を垂らしたような音が反響する。

コンクリートの地面が、湯気を出しながら溶けている。

鏡夜は息を呑む。

もしも、あれが自分の頭に当たっていたらと思うと、ゾッとする。

数秒間そのまま動かなかった黒い物体は、唐突になにもないはずの空間へと引っ込む。

「本当になんなんだよ、あれは」

呟いたと同時に。

ニユルリ、と。

また手が出てきた。

なにもない空間から出てきているため、その場に浮かんでいるように見えるそれは、今度は五本に増えている。

手が動き始めた。

まるで骨がないかのように思えるウネウネとした動きを見て、路地裏にいる人々は声を上げる。

絶叫。助けを求める声。母を呼ぶ幼い子供の声。泣き声。怒声。

それら全てがビルとビルに囲まれている狭い路地裏に響き渡る。

鏡夜は耳を塞いだ。

彼自身も叫びたい。

だが、本能が叫んでは駄目だとブレーキをかけている。

鏡夜は耳を塞ぎながら、手が出てきている空間を見つめる。

それが少し、鏡夜達の方に動いた。

腕が出てくる。

次に肩。足。胴体。長い髪の毛。そして、顔。

それらが全て真っ黒で、まるで絵の具で塗りつぶされたかのようにだった。黒いなかには、影のように見えた。

息が荒くなる。鼓動が長距離を走った後のように早鐘を打つ。

息が苦しい。足もガクガクと震え始めてきていた。

情けない。

そう思うのだが、これらの現象は意識で抑えられるものではない。眩暈がする。ふらふらとした足取りで影のような、なにかから離れる。

だが、鏡夜が離れた分を取り戻すかのように、それは歩を進めた。口が勝手に震え始めた。カチカチと歯同士がぶつかりあい、小さな音を発する。

影は風に吹くたびに、幻想のように揺らめく。

いつその事、幻だったらどれだけ良かっただろうか。鏡夜はそんな事を考え始めていた

ゆらゆらと。目の前で揺れるそれらを見つめてみると、胸の辺りに光るなにかを見つけた。

(なんだ……あれ)

ちょうど胸の中央部分。

まるで夜空に輝く星のように、わずかだが強い光がある。

だが、それがなんなのかを考えている時間は無い。

不気味な黒い物体は、すでに鏡夜の目前に迫ってきていた。

一瞬。通常なら目がある場所を彼は見た。そこにはなにも見えなかったのだが、奇怪な生き物は鏡夜に意識が向いていないようだ。

それを証拠とするように、影は少年の横を通り過ぎてしまう。

そして、悲鳴を上げながら逃げ惑う人々に近づいていく。

黒い物体が鏡夜の視界から消える。

そのおかげで、彼はそれまで感じていた恐怖から一時的に逃れられた。

そう、あくまで一時的に。

後方から聞こえてくる断末魔のような叫び声が耳に届くまでは。

一時は治まった足の震えが再開させられた。

心臓が握られているかのように、圧迫感を覚える。

なにが起こったのか。想像するまでもない。

母を呼ぶ幼い叫び声が耳に届く。

鏡夜はそちらを振り返ろうとした。……だが、できない。

後ろを見てしまえば、彼に絶望を与える悲惨な光景が見えるだけ。

どうすればいい。

どうすればこの状況から逃げられる。

どうすれば、この声を聞かないですむ。

呆然と立ち尽くしていた少年の肩に、誰かがぶつかってきた。

「あ、あんた。こんな所でなにをやってるの。早く逃げなきゃ……」

その声は、先ほど話していた人の良さそうなおばさん。

彼を心配してわざわざ声をかけてくれたのか。それとも偶然ぶつかってしまったので、仕方が無く声をかけたのか。

だが、そんな事はどうでもいい。

今、鏡夜の頭に浮かんでいる言葉。『早く逃げなきゃ』。

(どこに逃げ道があるんだよ)

この悲惨な殺戮現場。ここに来るときに通った道は、見えない壁のようなもので阻まれている。

(後ろは行き止まり。もしそっちに逃げ道があったとしても、変な奴らにやられるだけだ)

「は……ははっ」

逃げ道なんてどこにもない。

助けが来る気配なんてどこにもない。

そんな都合よく、ヒーローが助けに来てくれるほど、世界は甘くない。

だが、鏡夜は死にたくないとの心の底から願う。

彼にはやらなければならぬ事がある。それこそ、この命を捨てる事になっても絶対に果たしたい事がある。

もし、死ぬとしても。その時はここじゃない。

目的を果たす時だ。

それを邪魔するものが目の前にいるのなら、生き残るために、彼はなんでもする。

鏡夜は息を大きく吸い込んだ。これから見るであろう惨劇に心を落ち着かせるために。

まずは目だけを動かして横を見る。

そこにはおばさんが立っていた。微かに震えているように見える。また、断末魔の叫びが反響する。脳を直接揺さぶるような大きな

声が耳に届いた瞬間、鏡夜は肩を大きく震わせる。

これから見るであろう絶望。

しかし、鏡夜は過去に一度、絶望を味わった事がある。それと比べれば、まだマシだ。

そう思い込むように、彼は何度も口の中で呟く。

もう一度深呼吸をする。

それから一気に体ごと振り返ようとした……。

だが、躊躇させられる。

耳元で叫び声が炸裂したからだ。

ドサツ、と。重たいなにかが地面に倒れこむ音がする。

横を見る。さっきまでそこにいたおばさんがいない。

いや、おばさんは確かにそこにはいた。『生きていたおばさん』が横にはいないのだ。

おばさんは地面に力無く倒れていた。そして、その正面には、例の黒い影が佇んでいる。

鏡夜は後ずさりをしようとした。が、足が動かない。地面に糸で縫いつけられたように、少しも動かす事が出来ない。

息が苦しい。上手く肺に流し込む事が出来ない。

横に異界の者の気配。

冷たい空気のようなものが流れてくる。

精一杯の勇気を振り絞り、横を見る。

黒いなにかがこつちをみている。……気がする。

「あ……あ」

叫び声を出そうとして、それを本能が止める。叫びたいのに、叫べない。

少年と黒い物体の間を、中年のおじさんが叫び声をあげながら、走って通りすぎていく。

そのすぐ後ろを黒い生き物が追いかけていく。

ゆらゆらと。ロウソクの炎のように揺らめきながら。

黒いなにかが手を前に突き出す。その手がおじさんに触れた途端、

断末魔の叫び声が『黒い物体から』放出される。

おじさんは、触れられた瞬間に、声を上げる事無く、糸の切れた操り人形のように地面に倒れこむ。

「う……うあ」

涙が零れ落ちる。

この恐怖のせいではなく。

なにも出来ない自分に対しての、殺意と怒りのせい。結局自分は、あの時からなんにも変わっていない。

その事に気付き、彼は、自分自身に対して『殺意』を芽生えさせた。

気付けば、この路地裏に立っているのは新藤鏡夜だけになっていた。

さつきまで一緒に震えていた人達、全員が地面に倒れている。

老人、少年、少女、男の子、女の子。見境なしに、全員。

そして、唯一立っている少年のすぐ横には、この惨状を作り出した犯人である、黒い影。

心なしか、胸の中央部分にある光が強くなっている気がする。

鏡夜の目から涙が止めどなく溢れ出し、止まらない。

自分に対する殺意。だが、今この場で自殺するつもりはない。

ならば、その行きよつの無い感情はどうすればいいのか。

答えは簡単。

すぐそこに、この感情をぶつけられる相手がいるではないか。

少年は勢い良く横を向く。一瞬遅れるように、くせつ毛の髪が揺れた。

鏡夜はいつもやる気が無い眼に、力を込めて最大限に見開き、黒い影を睨みつける。

これで状況が変わると思っていない。こいつらが、何者かも分からない。打開策など浮かばない。

だけど、ここで死ぬわけにはいかない。

黒い物体は鏡夜から漏れる殺気に反応したのか、手を伸ばしてき

た。

触れただけで、人間を殺せる。悪魔の手を。

鏡夜は動かない。

なにかを待っているかのよう。

いつの間にか、足の震えが止まっていた。歯も治まった。

体も恐怖から離れたように、いつものように動く。調子は万全。

そして、黒い手が鏡夜に触れる。

その瞬間。

彼が着ている制服の胸ポケットが白い輝きを放ち始める。

いや、胸ポケットが光っているのではない、その中に入っているなにかが輝いているのだ。

薄暗い路地裏に突如出現した眩い光。それは暗闇に慣れていた鏡夜の眼には、とても眩しく、神々しく見えた。

そして。

影の手が徐々に内側から膨れ始める。

空気を入れ続けている風船のようにパンパンに膨張したそれは、

少し小さな亀裂が入ると同時に、内側から弾け飛んだ。

内臓や血などは出てこない。

代わりに大量の空気が中から溢れ出し、周囲に暴風を撒き散らす。

地面に倒れているおばさんや子供の体が、その風圧に耐え切れず

一気に吹き飛ぶ。

しかし。そんな中、少年は平然と立っていた。

吹き荒れる風など、気にもせず。悠々と、楽々と微動だにしない。

影の腕だったものの破片は、風に流されどこかへと消え去っていく。

「うが？」

影がそんな間抜けな言葉を発すると、胸の中央部分にある光が輝きを強め、妙な生き物を包み込む。

光が収まると、腕が元通りに治っていた。

「どうした、化け物。かかってこいよ」

そこに、先ほどまで脅えていたひ弱な少年の姿は無い。  
ただ、勝利を確信している男の姿があるだけだ。  
頭の中に妙なイメージが浮かんでくる。

こいつらを倒すのにはどうしたらいいのか、それが手に取るように分かる。

具体的な感覚としては、体が覚えている。というものに近い。

何年も前にやった事を、脳が忘れていても体が勝手に動くあの感覚だ。

目の前の化け物に恐怖は感じなくなった。それは、恐怖より強い感情　殺意で心の中が満たされているから。

どうやらこの化け物。知能はとても低いようだ。

一度自分の腕が破壊されているのに、またもや少年の肩に触れてきた。さっきはこうやって腕を粉々にされたっていうのに。

「ははっ！」

影の腕が暴風を生み出して吹き飛んでいく。粉々になった破片が薄暗い路地裏から逃れるように、上へと飛んでいく。

地面に落ちていたコンクリートの破片が、その風によりビルの壁にめりこむ。

「なんどやっても無駄だ」

鏡夜は化け物が光に包まれて再生する前に拳を強く握り、頭を狙って放った。

空気を裂くような音が聞こえたと同時に、化け物の頭が粉々に吹き飛んだ。

これまでよりも一段と強い風が、路地裏を襲う。

「やったか？」

そう呟き、目の前の化け物が動かない事に安堵する。

だが、それは一瞬だった。

黒い影。胸の中央部分にある光が強く輝きだす。

薄暗い路地裏を、陽光よりも眩い明かりが照らし出す。

余りに白い閃光に鏡夜は思わず眼を瞑る。それでも、固く閉じたまぶたの裏まで光が入ってきていた。

光が収まる。

嫌な予感を感じながら少しずつ眼を開けると、予想通りの光景が待っていた。

化け物の頭が再生している。

胸の光は少し弱くなっているような印象を受けたが、それ以外は元通りになっていた。

「なんだってんだ、畜生」

畏怖の念を込め、少年は呟く。

やはり異界の物体を完璧に葬る事など出来ないのだろうか。

後ろからハイヒールで地面を歩いたような、軽快な音が響く。

それが両横からも、斜めからも。四方八方から聞こえてきた。

周囲を見渡せば、化け物にねずみ一匹逃げる隙間がないほど、囲まれていた。

全身から冷たい汗が噴き出す。

化け物は少年の体に触れると粉々になるが、その不思議な能力がどれまで保つのか。それが分からない。

限界はすぐそこまできているのかもしれないし、まだまだ遠くなのかもしれない。

(どうする……?)

自分の周囲には完璧な包囲網。逃げ道はない。

助けてくれるような人間はいない。

まさに絶望的。

少年に恐怖を与えて楽しんでいるかのように、化け物は包囲網を少しずつ狭めてくる。

後ろにさがっても化け物。横に動いても化け物。前に行っても化け物。

もう、どうする事も出来ない。

足から力が抜けて、鏡夜は地面に座り込んだ。

(ここで死ぬのかよ……)

まだ、やり残した事がある。

(まだ、あいつを見つけてないつてのに)

死にたくはない。それでもそれはすぐ目の前まで来ている。

「畜生……」

自分の人生はここまでなのか。

「畜生……ッ!!」

希望が無い。明日が閉ざされていく。目の前が真つ暗になっミライていく。

黒い感情が消え去っていく。

代わりに出てきたのは、生きたい、という人間らしいもの。

それでも、それは叶わない。

少年の近く。それこそ目と鼻の先に化け物は近づいてきていた。

一体の化け物が新藤鏡夜の顔に触れる。

それは内側から膨れ上がり、風船が破裂するような音と共に砕け散る。

爆風が吹き荒れ、近くにいた影が後ろに倒れた。

少年は、もう立ち上がる気力を失っていた。

足掻いても、どうしようもない。そう思うと、目の光が失われていく。

が。

突如として、銃の発砲音のようなものが路地裏に響き渡る。

音のした方を、化け物共のわずかな隙間から鏡夜は見る。

そこに、誰かが立っていた。

鏡夜の居る場所からは、人間の足しか見えない。

だが、それだけ分かれば十分だ。

「なにやってんだ！ 早く逃げろ!!」

少年は助けてとは言わない。自分の放った無責任な言葉で、いきなり現れた人間が死んでしまうかもしれないから。

だが、そんな少年の心情などお構いなしに、足だけ見える人物は声を出す。

「あれ？ 美紀の力と似たようなのを感じたから来たのに、今は男の子の声だね。なんでだろ？」

それはこの状況には決して相応しくない、のほほんとした声だった。

まるで、目の前にいる化け物共なんか、眼中にはないような。そんな感じの声。

「まあ、いいや。おゝい、その男の子。助けてあげようか？」

若い女性　もしかすると鏡夜と同年代くらいの声の主は、そんな事を言ってきた。

いきなり現れた希望。彼に助かるかもしれないという考えが浮かんだ。

だが、疑問が一つ。

「助けてくれるなら嬉しい！　だけど、大丈夫なのか……」

新藤鏡夜の言葉が途切れる。

その理由は目の前にいきなり現れた、黒髪ふわふわヘアの少女が原因だ。

膝より少し高い位置にあるスカート。赤と黒のチェック柄の長袖おっとりとした雰囲気合うような、優しい目つき。

「助けに来てあげたよ」

敵陣のど真ん中に現れて、開口一番。少女はそんな事を言う。

「助けにきてあげたよって。どうやってここまで……」

鏡夜はいきなり目の前に現れた、おっとり系少女に驚きながら尋ねたが、少女は首を傾げつつ。

「そんな事聞いている場合かな？　君は周りの状況が分かってる？」

そんなのほほんとした声を出しているお前には言われたくない、と少年は思ったが、ここは黙っておく。

そして周りを確認してみると、先ほどの風圧で倒れた最前線にいる化け物が立ち上がっている所だった。

「どうやって、助けてくれるんだ？」

正直、女の子に助けを求めているのは恥ずかしいと思うのだが、それでも生きるといふ道が現れた以上は、それにすがりたい。

「ん？ そんなの簡単だよ？」

少女は片手を横に広げ、地面と平行にした。そして手のひらを化け物が密集している地帯に合わせると。

「こうやってだよ」

瞬間。

少女の人差し指にはまっている銀の指輪が、黄色と黒の光を放った。

少女が指を鳴らすと、その先から黒い閃光が飛び出す。

指先から飛び出したそれは、まるで蛇のように蠢きながら一体の化け物を貫く。

化け物の体が胸の中央辺りから一気に引き裂かれ、体が二つに分かれる。

鏡夜の時のように爆風は吹き荒れなかったが、かわりに甲高い音が響き渡った。

破壊をもたらした閃光は留まる所を知らずに、その奥に密集していた他のやつらも同じように引き裂く。

「……は？」

あまりの光景にポカンと口を開けて呆けている新藤鏡夜に向けて、目の前の少女は笑顔を見せた。

「凄いでしょ？」

笑顔の少女を、鏡夜は信じられないものを見るような目で見つめていた。

いきなり現れて、訳の分からない稲妻のようなもので敵を一瞬に何体も破壊したのだから、仕方が無い事なのだろうが。

しかしそんな少年を、少女は首を傾げながら「んー」と笑顔から一変。不満そうな表情を向けた。

「君もこういふ『スキル』が使えるんでしょ？　なんでそんな目で

見てくるかな？」

「え？ あ……はあ？」

聞き慣れない単語を耳にしたせいか、鏡夜の思考が一瞬だけ中断する。

やがて、少年は切り出した。

「スキルってなんの事だよ」

鏡夜の質問を受けたふわふわ系少女は、片方の手を顎にあて、もう片方の手で閃光を繰り返して化け物を消滅させながら答えた。

「『スキル』を知らないの？ 今私が使っているような、不思議な能力の事だよ？」

鏡夜は少女の手から発生している黒い光を見つめた。それは一瞬にして数メートル離れた敵を縦真つ二つにすると、ビルの壁に焦げ後を残して消える。

「俺のはそんなのじゃないぞ？」

思い当たる不思議な能力といえば、触れただけで化け物が消滅したあれだけだ。

少女が使っているような、格好良い雷ではない。

「ん。能力は人それぞれだからね。必ずしも私のような能力じゃないんだよ？ 他には炎を出したり、風を操ったり……他にも一杯あるしね？」

のほほんとした声が、化け物を消滅させた時にでる鼓膜を突き破るような音で消されていく。

それでも、鏡夜の耳にはちゃんと届いていた。

目の前の少女は、不思議な力の事を『スキル』と呼んでいた。

炎を出したり、風を操る事も出来ると言っていた。

だが、疑問に思うことがある。

なんで、いきなりこんな力が出てきたんだ？ 今までは喧嘩をしてピンチになっても、こんな力は無かったはずである。

それが今になってなぜ出てくる。

その事を質問しようとした鏡夜だが、少女はそれを封じるように

先に口を開いた。

「質問は後で聞くから、今は目の前のこいつらを倒すのを手伝って  
よ」

「あ、ああ」

それもそうか、と思い、手で近くにいた化け物の腕に触れて消滅させる。

爆風が吹き荒れ、少女のスカートが一瞬めくれあがったが、断じて鏡夜はなにも見ていない。

ピンク色だなんて、絶対に知らないのである。

頭をぶんぶんと振って、網膜から焼きついて離れないあの光景を振り払うと、鏡夜は視線に気付いた。

腕を破壊された化け物が再生していく。光を放ち、すぐに元通りに。

鏡夜は化け物の胸の中心部にある光を狙って拳を突き出す。

すると、相手の体が膨れ上がり、一気に爆発するように弾けた。

ここが弱点なのだろうか。相手はもう再生出来ないほどに粉々になっている。

そして鏡夜は視線を向けてきているおっとりふわふわ系少女を見る。そしてさっきまでとは違う種類の汗をかきながら、

「あわわわ、俺はなにも悪くないからね!? なにも見てないからね! 信じてください信じられない? そりゃあそうですよね? めんなさい!」

少女はなにも言っていないのだが、鏡夜は勝手に自己完結した。

が、少女はそんな少年には興味が無いらしく、見ていたものは虚空だった。いや、厳密に言えば、さっきまで化け物がいた空間だ。

「今の力って……」

少女のそんな呟きが聞こえた。

「は?」

少女の呟きは、絶賛土下座中の鏡夜には届いてなかったなので、間抜けな声を出す。

「ん、いや、なんでもないよ」

少女は化け物を分裂させながら、そんな事を言う。

少年は気を取り直して、次々と影を消滅させていく。

そう言えば、いつの間にか絶望が消えていた。

この少女のおかげか、と鏡夜は思う。

そんなこんなでさつきまでは大量に蠢いていた化け物は少なくなってきた。

鏡夜は最後の一体を消滅させた。どうやらこの化け物、知能と運動能力がとても低いようだ。

ゆつくりとした動作で動くので、簡単に触れられる。

薄暗い路地裏に静寂が訪れた。

少女の方を見ると、黄色と黒に輝いていた指輪の光が収まる所だった。

そこで鏡夜は気付いた。

自分の冬服の制服、紺色のブレザーの胸ポケットから発せられていたあの光。

あれも少女の指輪みたいなものだったのだろうか。

少年は左胸にあるポケットに手を突っ込み、中の物を取り出してみよう。

それは、銀の十字架に蛇が巻き付いているネックレスだった。

「なんだこりゃ？」

それを見て、少年は首を傾げた。

見覚えがないからだ。

首を傾げている少年に、少女は近寄ってきて声を上げる。

「あつ、それ美紀のだよ。どうして君が持つてるの？」

どうして、と言われても鏡夜にだって覚えがない。

大体、その『美紀』という子が誰なのかも分からない。

「なあ、美紀って誰だ？俺は知らないんだけど……」

少年がそう尋ねると、ふわふわ少女は手を口にあてて、うっかりしてた……と呟く。

「うーんとね。今日どこかでさ、茶色い肩まである髪の毛で、目つきが少し悪くて、遊星高校の制服着た女の子見なかった？」

遊星高校というのは、この辺りでは有名なお嬢様学校である。

そんな奴見たっけ？ と考えていた鏡夜だったが。

「……あつ」

そこで思い出す。ここに来る前、変な足音から逃げている最中に、ぶつかった女の子だ。

確かあの後、ネックレスがないとか叫んでいた。

ぶつかった拍子に、あの女の子が持っていたネックレスが偶然にも鏡夜の胸ポケットに入ったのだろう。

その事を伝えると、少女は少し笑った後。

「じゃあ、それは私が返してあげるから、ちょうだい」と、手を出してきた。

ここで別に断る理由が見つからない少年は、素直に銀色の十字架を手渡す。

「ありがとね。じゃあ、私はこれで」

「あつ、ちよつと待って」

歩いてここから立ち去ろうとする少女を、思わず呼び止めてしまった。

ここで別れるのが名残惜しかったから、というのもあるが。今ここで起こっていた不思議な現象を、説明して欲しいという感情の方が強い。

呼び止められた少女は少しだけ間を空けた後、なにかを思い出したように右手を左掌の上に乗せる。

「あつ、そこに倒れている人達なら大丈夫だよ。『シャドウ』を倒したから、もうすぐ意識を取り戻すと思うからね」

「『シャドウ』？」

頭の上に疑問符を浮かべながら首を傾げる鏡夜。

そんな少年をみながら少女は言葉を続ける。

「『シャドウ』ってというのは、さっきの影みたいなの奴らの事ね。あ

いつらはね、人の魂を食料にして生きているの。君も見たでしょ？  
胸の中央部分に、星みたいに光っている場所があるのを」

「ああ」

「あれが、あいつらの生命力。ゲームに例えていうと、HPって所かな。そして、あれが人間の魂だよ」

ふーん、と鏡夜は相槌を打つ。

「まっ、こんな事を君に話しても仕方がないよね。もうこっちの世界には来ないんだし。じゃあ、私はこれで。じゃあね、新藤鏡夜くん」

「え？ おい、なんで俺の名前知ってた……て、もういないし」  
あの少女はなんだったのだから。

嵐のように訪れては、颯爽と帰ってしまった。まあ、あの子に命を救われた事には変わりないのだが。

とりあえず、地面に倒れている人達はその内気付くと言っていたが、一応、救急車を呼ぶ事にした。

それから路地裏から出るために歩き出したのだが、そこで疑問点が。

さっきまで、道を塞いでいた見えない壁のようなものが消えているのだ。

あれはなんだったのだろうか。

「まっ、いつか」

本当は全然、全くもってよくないのだが、混乱している今の頭で考えても答えなんて出るはずが無い。いや、混乱していなくても、答えなんて出るはずが無いのだ。

ここは、今まで自分がいた世界とは全く関係のない世界なのだから。

## 日常

命の危機に遭ってから、二日が過ぎた春晴れの日。

新藤鏡夜は通学路を歩いていて。

全体的にクセツ毛で、そのせいなのか頭頂部にある髪がピヨコンと立っているそれを揺らしながら、少年はため息をつく。

朝の爽やかムードなどお構いなしに吐き出されたそれは、周りの人さえ暗い雰囲気させるものがあつた。

なぜ、鏡夜がこんなにも重苦しい空気をまとっているのか、その理由はとても簡単だ。

(もう一回あの子に会えないかなー……)

あの子。

名前も知らないのだが、二日前に危機に陥ったとき、助けてくれたふわふわ天然系少女の事である。

あの優しそうな笑みが、人を安心させるのに最適なのではないかと思うくらいに和む声が。

寝ている時もご飯を食べている時も、風呂に入ってリラックスしている時も、片時も頭から離れない。

「はあー……」

だが、もう会うことはないだろうという事はなんとなく理解していた。

再びあんな状況に陥れば会える可能性は上がるかもしれないが、あんなのは人生で二度も体験することじゃない。二度とゴメンだ。

そんな事を考えながら歩いていた鏡夜は、いつのまにか学校の前にある校門に到着していた。

気が乗らないまま校門の中に足を踏み入れようとしたその時だった。

前方から鏡夜が通っている、商業高校のセーラー服の少女が走ってきていた。

今は春で、まだ衣替えをしていないために冬服なのだが、白を基調とし、襟の部分とリボンが赤色の上と、赤と白のチェックのスカート。

そして、艶のある黒いふわふわしている髪の毛。穏やかな目つき。どっからどうみても、最近ずっと考えていた少女だった。

しかもその少女。どうやら少年に向かって走ってきている気がしないでもない。

なぜならば、グラウンドを縦断して、こっちに向かって来ているからだ。

少年は、自分の顔が熱くなるのを感じていた。

その少女がだんだん近づいてくる。前方十メートル。五メートル。二メートル。一メートル。

そして横を通り過ぎて行く。

それはもう、『君になんか興味ないよ』とでも言われているかのように。

あっさりと。なにも起きなかった。

ガクウ！ と新藤鏡夜は地面に倒れこむ。

身体的ダメージなどなにもなかったが、いきなりゴボオ！ と吐血し始めた。

身体的ダメージよりも、精神的ダメージの方が辛いものがあると昔の偉い人が言っていたような気がしなくてもない。

鏡夜は少女が走り去っていく後ろ姿を、四つん這いになりながら見ていた。

そこで浮かんできた疑問。

（なんであんなにあの子は急いでるんだ？）

あの少女は自分の顔くらい覚えている（と信じたい）はずだ。

なのになんの挨拶もなしに横を通り抜けていくなんで、前に会ったあの親切な少女からは考えられない。

などと考えていた鏡夜だが、実際には覚えていないだけかもしれないし。

ちよつとしか会っていないし話していないんだから、思い浮かべている性格とは180度違う性格なのかもしれない。

それでも、鏡夜は気になっていた。

大体、今は登校時間でもうすぐ朝のSHRが始まる時間だ。

そんな時に、どこに行こうというのだろうか。

(後をつけてみるか？ いや、でもなあ……)

尾行しているなんて事があの少女にバシて、

『なにしてんのよ、ストーカー変態野郎』

口調は少し変だが、こんな事を言われたら間違いなくあの世に逝ける気がする。

そうならないためには……。

「よし、学校に早く行こう」

こうするしかないのだ。

少年は一步校庭に踏み入れた。

その瞬間に、頭上から鳥の糞が落下してきて、鏡夜の肩にジャストフィット。

「不幸だ」

学校の中に入った鏡夜は、鞆の中に入っていた紺色のジャージに着替えて教室に向かった。

制服は職員室に預けているので、帰りに取りにいかねければならない。

そんな事を考えながら、少年は教室の扉を開き中には入る。

すると、黒のウルフヘアに、細い目、どっかの抗争にでも行ってきた？ とでも言いたくなるような顔つきに、鏡夜が少し見上げる程でかい少年が近づいてきた。

「おーっす鏡夜。いつにも増して、冴えない顔してんなー」

豪快にジャージ姿の少年の肩を叩くのは、鏡夜の友達である神田カンダ翔平。シヨウヘイ

大柄な体からは想像出来ないくらいに、穏やかな性格を持つ少年である。

「なんだ翔平か。悪いけど俺は今、とつてもブルーなんだ。ここはそつとしいてくれ」

「そつか分かった。トリヤアツ!!」

「ゴフツ! て、てめえ……誰がボディーブローをしると……」

「いや、それは構ってくれっていう振りなのかなー、と思つてさ」

「そんな訳ねえだろ!!」

余りの痛さに涙目になり、腹を押さえながら地面に倒れこむ不幸少年。

しかし鏡夜はこういつ時こそ、ガハツ! と血でも吐くべきなのだろうか? などと真剣に悩み始めた。

鏡夜が的確な角度で決められた高度なボディーブローのダメージに悶えていると、朝のSHRを知らせるチャイムが鳴り響く。

この痛みを生み出した元凶である兵士面の少年は、自分は無関係とでも言わんばかりに席に着いてしまった。

鏡夜は痛みでふらつく足を強引に動かし、危ない足取りで窓際にある自分の席に着く。

そしてそこでグダーツとしていると、先生が入ってきて適当に今日の用事を皆に伝え始める。

しかし鏡夜はそんな話などにも聞いていない。

つい先ほどすれ違った、あの少女の事が気になっているからだ。

「えー、最近の話なのだが、この辺で行方不明者が続出しているらしい」

あの少女は一体どこに行くつもりなのだろうか。

「そこで今日の会議で、部活動は一切禁止とし、生徒会活動も放課後一時間までという事になりました」

すれ違う時に一瞬だけ見えたのは、優しそうな笑みではなく、焦っているような表情だった。

「この事から分かるように、皆さんには寄り道などしないで、事件

が解決するまでは明るいうちに家に入る。という事です。なにか質問は？」

なにに焦っていた？ また昨日のような事が起こっているのか？

「おい、新藤鏡夜。先生の話を聞いてたか？」

「はぁ……」

「ほほー。先生に向かって溜め息とは、随分と舐められたものだな。後で職員室に来るように」

結局答えなんて出ないまま、なんか知らない間に先生の反感を買っていたせいで思い切り説教を食らってしまった少年である。

学校からの帰り道。鏡夜は翔平と一緒に住宅街を歩いていた。

「どうしたんだよ鏡夜。今日のお前なんかおかしいぞ？」

今日、先生の説教を食らった後の少年は、体育の授業中、いつもなら余裕で跳び越える八段に突っ込んだり、昼飯の時間では持ってきた弁当箱をひっくり返したりしていた。

いつもとは違う。

いつもの彼なら、自分のミスではなく不幸が重なって、こういう珍事を起こすはずである。

跳び箱なら、跳ぶ寸前に靴紐を踏んでしまいバランスを崩して突っ込むとか。

弁当箱なら、いきなり後ろから誰かに追突されたせいで落としたりするはず。

その辺のおかしさから、翔平は鏡夜になにか異変があったのでは……と思ったのだ。

しかし鏡夜は、

「別に。なんでもねえよ」

心ここにあらず。といった感じの声で答える。

もし、ここで翔平に全てを話したとしよう。

そしたら、横にいる彼はそれを信じてくれるだろうか。

こいつなら「信じる」と言ってくれるかもしれない。しかしそんなの上辺だけだろう。

所詮。人間なんて、自分の常識の範囲外で起こっている出来事なんて、信じる事が出来ない。

しかし、それで普通だろう。

鏡夜だって、当事者じゃなかったら、あんな話を信じるはずがない。

だから彼はなにも言わない。

ここで本当の事を言っても、なにも解決しないのだから。

それに、万が一の事もある。本当の事を話して、翔平が全てを心の底から信じたとする。

そうしたら、この少年は自分にも協力させる。とか言ってくるかもしれない。

もしそうなったら、この優しい傭兵顔の彼を変な事に巻き込んでしまうかもしれないのだ。

もちろん、鏡夜があんな事に巻き込まれる可能性はほとんど無いのだろうが。

それでも、普通の世界に生きている彼を、あんな血みどろの世界を知らせる理由がどこにも存在しない。

「本当に、なんでもないのか？」

神田翔平は、疑っているような目で見てくる。

「ああ、なんでもない。春だからポケットとしてただけだ」

それでも少年は嘘をつく。

あんな世界をわざわざ知らせる理由がどこにもないのだから。

「ふーん」

翔平はなにも言わない。鏡夜が言った事を信じているわけでないのだ。

むしろその逆。

完全に疑っている。だけど少年がなにも言わないので、余程の事だと推察したのだろう。

鏡夜はそんな心遣いに感謝しつつ、今度は自分からボロが出るのを恐れてここからは一人で帰る事にした。

「じゃあな、翔平。また明日」

「おう、またな」

不思議な世界を知っている少年は、なにも知らない一般人に手を振って別れを告げる。

一人になった少年は、周りを家で囲まれている細い通路で歩みを止める。

なにかを感じたわけではない。

なにかを見たわけではない。

なにかを考えているわけでもない。

ただ単に、上空に広がる抜けるような青空を眺めているだけだ。もし。

あの場で自分が死んでいれば、こんな素敵な風景など見れなかっただろう。

所々に絵の具を垂らしたように存在する、水蒸気の塊を見ながら鏡夜は素直に思う。

(本当に。あの子には感謝しなきゃな)

歩くのを再開した少年は、心のどこかに清々しさを感じていた。

自宅に帰ってきた鏡夜は、自分の部屋にあるベッドで横になっていた。

テレビを点けたままその声だけを聞いていた少年に、今朝聞いた言葉が出てきた。

「えー、最近、人が行方不明になる事件が頻繁に起こっているのですが、ここで新たな事件が発生しました」

「ん？ と鏡夜は体を起こして、部屋の隅にある音源に目を向ける。場所は天城市<sup>アマシロ</sup>、天川町。そこで捜索願を出されている子供、大人。そして人間に限らず犬や猫のも急増しています」

そこまでキャスターの人が言うと、横にいる女子アナに話を振る。だが鏡夜はそんなのは既に聞いていなかった。

思い浮かぶのは先日見たあの惨劇。

あそこでは、あの少女が助けに来てくれたおかげで、自分だけではなくあの場にいた全員が助かった。

救急車を呼んだ後は、みんな病院に運ばれて意識を取り戻したよ  
うだが。

もし。

あそこで少女が来なくて、鏡夜もろとも死んでいたら？  
どうなっていた？

もしかして、その結末が今聞いていたニュースなのかもしれない。  
あの化け物に触れられた人達は、全く動かなくなった。

脈を取っていないので、あの時点では死んでいたかどうかは知ら  
ないが、あのまま動いてなかったら？

そしてあの時、退路を閉ざしていた見えない壁のようなものは？  
考えてても分からない事ばかりだ。もう考えるのは止めよう。ど

うせ、自分があんな世界に入る事はもうないのだから

鏡夜は無理やりに結論づけて、目をつぶった。

視界が暗闇に支配され、徐々に意識が遠のいていく。

そう。この時点では、少年はこんな甘い考えを持っていたのだ。  
すでに、自分が暗い闇に飲み込まれ始めている事も知らずに。

ただ、呑気に眠り続ける。

新藤鏡夜の日常という、なによりも大切なものは少しづつ し  
かし確実に崩壊し始めていた。

眠りに落ちた少年が思い描くもの。それは自分の忌々しい過去。

家に帰ってきた鏡夜が見たものは、この世の地獄とも形容できる  
ものだった。

いたる所に血が飛び散り、床は赤い海に支配され、その海には大  
木が浮いていた。

赤い海 血。

大木 人間の体。

そしてその場に立っているのは、鏡夜の他にもう一人。赤く、紅く、朱く。

業火を思わせるような長い髪。

灼熱を連想させるように煌く瞳。

劫火を想像させるような長いコート。

それとは対照的に、絶対零度のような笑み。

名前は知らない。

なんでこの家にいるのかも知らない。

なんで家族を殺したのかも知らない。

分かっている事は一つ。

絶対に復讐をしてやる、という憤怒の炎が体内で渦巻いていると  
いうことだけ。

鏡夜は目を覚ました。

(またあの夢かよ……)

嫌な汗が滲んでいる額を手の甲で拭いながら、布団から起き上がる。

いつの間にか、朝になっていた。

確か、昨日帰ってきたのが夕方の五時ころだったはず。

鏡夜は目覚まし時計を見る。

時刻は朝の七時になっていた。

という事は、帰ってきてから一時間後くらいに寝たので、十三時  
間くらいは寝ていたのかもしれない。

立ち上がった鏡夜は、昨日は閉めっぱなしだった茶色いカーテン  
を開けて、中に陽光を取り込む。

その暖かな光を受けて、またもや眠くなってきた。

幸い、今日は土曜日。

だから、二度寝をしても、遅刻なんて事はないのだ。

(やっぱり、寝よう)

目をシヨボシヨボさせながら、もう一度カーテンを閉めよとした少年の目になにかが飛んで来るのが見えた。

「は？」

それは、人のように見えなくもないのだから、もう呆けた声を出すしかないのだ。

段々と近づいてくる人影。

二階にある鏡夜のアパートの窓目掛けて、凄い勢いで突っ込んでくる。

## 訪問者

なにか人間のようなものが突っ込んでくる。

鏡夜の家はアパートの二階だ。その窓の高さを飛んできていたのだ。

こちらに背中を向けて、茶髪の髪と手足を進行方向とは逆に並びかせながら。

それは、体格から見て少女だった。

なんで少女が白昼堂々、空を飛んでいるのだろうか。

いや、これは飛んでいるのではなく。なにかに吹き飛ばされたのだろう。

そこまで鏡夜が考えた時、今までアパートとは逆方向を見ていた少女が、少しだけ首を捻り、横目でこつちを見てきた。

すると目を大きく見開き、背中を丸くする。

まるでボールのようになった飛行少女は、そのまま窓ガラスに激突。

ガラスに一筋の亀裂が入り、それが一気に蜘蛛の巣状に広がった。窓ガラスが割れる轟音と共に、鏡夜の部屋に鋭利な雨が降り注ぎ、少女が狭い部屋の床を滑る。

「はあああああ!？」

いきなり窓を破壊され、変な少女が侵入してきた。

このいきなりの出来事に、頭の対処が追いつかず、少年は頭を抱えて叫ぶだけに留まった。

狭いリビングの床に置いてある机やらゲームやらいけない本やらを吹き飛ばしながら滑っている少女。

そいつは、窓とは反対側にある壁にぶつかると、ようやくその動きを止めた。

「な、なん、なななんだお前は!？」

ようやく頭の処理が追いついてきた鏡夜だったが、その慌てっぷ

りからまだまだ完全とは言い難いようだ。

しかし、少年の部屋を嵐が過ぎ去った後のように破壊し尽した当の本人は。

「あんたがこんな場所に住んでいるからいけないのよ!!」  
と。全く反省の色無しだ。

その言い方に対して鏡夜の頭に血が上りそうになったが、そこはなんとか我慢して、少女の姿を見てみる。

この辺では有名な進学校、遊星高校の制服である茶色いブレザーに、赤いリボン。黒いプリーツスカートという出で立ち。

茶色い肩まである柔らかそうな髪に、少し吊り目な少女である。

ここまで姿を確認してから、少年は思う所があった。

「あれ？ お前って、この間路地裏で会ったよな？」

「はあ!？ あんたなに言ってるのよ!! こんな時にナンパとか止めてくれない!？」

「誰がお前みたいなのをナンパするか！ ほら、あれだよ。なんかお前、俺とぶつかった後、ネックレスが無いとか叫んでただろ？」

そこで少女は、面倒臭そうに鏡夜の顔を横目で確認する。

すると、一気に目が見開かれ口をパクパクと開閉させ始めた。

「泥棒男!!」

「人聞きの悪い事いうな!!」

鏡夜は一度、溜息を吐く。

「だいたいお前は……」

「しっ！ 少し黙って!!」

鏡夜が反省の色を見せない少女に少し説教でもしてやるうかと思つたその時、彼女が自分の口に手を当てて怒鳴る。

それから前方を凝視し始めた。

少女が前方を見たまま動かないので、不審に思った少年も外を見てみると。

「は？」

本日二度目となる、間抜けな声をだしてしまふ。

その理由は。

さっきの少女のように、この部屋に向かって突っ込んでくるシルエットが見えたからだ。

しかし、なにかおかしい。

鏡夜のアパートは大通りに面した場所にあるのだが、地上からなにも声が聞こえてこないのだ。

そんな事を少年が考えている最中にも、影はドンドン迫ってきてその顔がはつきりと分かるようになった。

まるでスーパーマンが飛んでいるような体勢のシルエットは、男だった。

金髪のオールバックで、所々に黒のメッシュが入っている。

眉毛が太く、目がかなり小さいのでかなりアンバランスな顔立ちになっている。

肌は元々なのかどうかは知らないが、黒かった。黒人よりも黒く見えてしまうかもしれない。

そんな金髪色黒男は、猛スピードでこの部屋目掛けて来ている。

「ちっ、もう来ちゃったの……」

鏡夜の横にいた少女が忌々しげに呟く。

「来たって……あいつ、一体何者なんだよ」

少女が自分だけ分かっているような発言をしたため、鏡夜は聞いてみた。

しかしショートカット少女は、少年の疑問には答える事無くただ前を向いているだけ。

代わりに、こんな事を言ってきた。

「なに、あなたにはあれが見えてるわけ？」

「あれって……なんか飛んできてるおっさんだよな。見えてて当然だよ」

鏡夜がそう返すと、少女はわずかに少年の方を見て一人で納得したような表情を浮かべる。

その顔を見た鏡夜がまた質問をしようとした所、

「質問は後！　まずはあいつをなんとかしなきゃ、殺されるわよ！」  
「こ、殺される！？　はあ！？　なに言ってるんだお前。頭大丈夫……」

「信じないならそれでいいわ。死んでも文句いわないですよ！」  
少女が今までより一際大きな声で叫んだ瞬間、金髪オールバックの男がご丁寧にも壊れていないほうの窓ガラスを粉々にしながら部屋に侵入してきた。

「なんでえー！？」

不幸な少年の悲痛な叫びは、ガラスが割れる音でかきけされる。部屋に侵入してきた男は地面に両膝を着け、手で摩擦を起こして滑る勢いを殺していた。

完全に動きが止まると、男はすつくと立ち上がる。

ニメートルはあるうかという身長に、黒いロングコートの男。

「ふむ。こんなところにいたのか……よく吹き飛んだものだ」

その大男は、口を豪快に開けて下品な笑い声を上げる。

「ふん。さつきは体制を整えるためにわざと吹き飛ばされたのよ。見なさい。怪我らしいものは無いでしょう？」

少女は制服の袖をまくり、白い腕を相手に見せ付けた。

それを見た第二の侵入者は、目を皿のように丸くした。

「ほほー。確かに。それで？　ここでどういう風に体制を整えるんだ？」

黒いコートの男は、馬鹿にするような笑みを浮かべた後、鏡夜の狭いリビングを見渡す。

「見たところ、まるで台風が過ぎ去った後のようにグチャグチャだが、なにか隠しているのか？」

その言葉に、少女は言葉を詰まらせたように小さく唇を噛んだ。

「はーはっははは！　全く、嘘をつくのもいい加減にしたまえ、狂人の炎！」  
マードーフレイム

狂人の炎。そう呼ばれた少女は忌々しげに舌打ちをする。

「その通り名で呼ぶなっつってんでしょ！」

激昂に共鳴するかのように、少女の胸元が輝きだす。

セーラー服の内側から漏れ出すように輝いているそれは、赤い光だった。

一瞬にして、夕暮れ時のように朱く部屋の中を染め上げる。少女が手のひらを天井に向け、軽く指を曲げる。

すると、次の瞬間。

手のひらの真上に、渦を巻くように出来上がっていく一つの輝く球が。

それはまるで、ニュースの天気予報図に出てくる台風のように、紅い色の帯が台風の目に向かうよう回転しながら中心に集まってく。

少女の手の上に形成されていくオレンジ色の球体。

それは、空気を巻きこむような轟！ という音とともに巨大化していく。

「ほう……」

サッカーボール程の大きさになったそれを見て、大男は興味深げに小さい目を細める。

鏡夜の頭の中は混乱していた。

いきなり自分の部屋を破壊され、訳の分からない男も侵入してきた、さらには少女がもの凄い熱気を放っている塊を作り出した。

（なんなんだよ、こいつら）

呆然と立ち尽くしながら、目の前の光景を必死に処理しようと脳みそをフル回転させる。

しかし、結論にたどり着くまでの時間は無かった。

狂人の炎と呼ばれていた少女が、まるで雪球を投げるかのような気軽さで、作り出したものを前方に放ったからだ。

轟！ という音がした。

それは炎が一直線上にいた大男に衝突し、熱波と暴風を生み出したもの。

地面に落ちていた本が、ゲームが、ガラスの破片が。爆心地とは

逆方向に向かつて吹き飛ばされる。

本はまるで石のようになり、ゲームは雪崩のように、ガラスは雨のようになって鏡夜に襲い掛かってくる。

「うぁ……うぁぁぁぁ！」

目前に迫ってくる飛来物を見て、思わず叫び声を上げる。

このままじゃ自分に全てが突き刺さり、面白くないグロテスクなオブジェが出来上がるだろう。

両腕を顔の前で交差させ、急所は守ろうとする。こんな中でも、やらないよりはマシだろう。

目の前に迫ってくる大量の凶器を見る事に耐え切れなくなった鏡夜は、反射的に目をつぶってしまう。

あと数瞬の間に、突き刺さる事間違いない。

はずだった。

一秒経つても、二秒経つても。少年の体には傷一つつかない。

なにが起こったのか。目を開ける事を躊躇していたが、確認する必要が出てきた。

鏡夜は、右目だけそっと開く。

そこには轟と音を立てているオレンジ色の壁が、少年を守るように地面から生えていた。

「この程度で、いちいち叫び声出してるんじゃないわよ！ この馬

鹿！！！」

横からそんな罵声が飛んでくる。どうやら、この壁は狂人の炎が

マードーフレイム

作り出したものらしい。

「この程度って……」

鏡夜からしたら命の危機だったのに、この少女にはこの程度で済まされるものらしい。

「ほら！ 早く立ちなさい！！ そしてこの部屋から出て行って。

あんた、邪魔なのよ！！！」

少女は、正面を向いたまま横目でこっちを見てきていた。あれだけの炎を大男に食らわしたのに、まだ不安なのだろうか。

鏡夜は、後ろを見た。そっちの方角には玄関があり、逃げ出す事が出来る。

しかし、本当にそれでいいのだろうか……。

今度は前を見た。  
オレンジ色の炎で作られた壁。その向こうには、突然の訪問者がいるはず。

鏡夜は迷う。

後ろは天国。

前方は地獄。

どっちを取るか迷っていた。

しかし、そんな迷いなど、最初から意味がない。

だって、決める方向は決まっているのだから。

鏡夜は汗ばむ右手を握り、決意を固める。

そして、走り出した。

自ら地獄に向かって。

ではなく。

天国に向かってだ。

この少年は普通の、どこにでもいる男子高校生なのだ。

それが、ちよつと不可思議な現象を体験したくらいで、自ら進んで命の危機に突撃するなんて事は絶対に有り得ない。

「それでいいのよ」

少女の安心したような声が聞こえてくる。足手まといが消えようとしているのだから、当たり前なのだろう。

「……ごめん」

鏡夜はそう呟き、靴のかかとを踏んだ状態で玄関の扉を開ける。

「別に、謝る事じゃない。それが当たり前行動よ」

少女の、声が聞こえる。それは本当に当たり前だと言わんばかりに平坦だった。

そんな言葉を背中に受けながら、鏡夜は玄関を後ろ手に閉める。それから自分の部屋を一瞥し、なにかを振り切るように全速力で

走り出した。

逃げ出した少年の部屋に残っていた少女は、それまで形成していた火の壁を消す。

天井まで届くかと思われるほどのそれは、上から徐々に空気に溶けるように消えていき、最後には綺麗さっぱりなくなった。

オレンジ色の壁が出てきていた地面には、あの少年を攻撃したゲームや本の灰などがばらばらと落ちる。

しかし、それらを灰に出来るほどの火力を持っていたものが生えていたフローリングの床には焦げ後しかない。

あれほどのものだから、地面など簡単に燃やしつくせるだろう。しかしそれがない。

少女はそれに驚く事は無く、さっさと前方を見る。

そこには地面と同じように焦げ後がない服を着た大男が平然と立っていた。

「やっぱり、この程度じゃ駄目よね」

少女 前原<sup>マエハラ</sup> 美紀<sup>ミキ</sup>は驚かない。今のが効かないと分かっていたからこそ、一度体制を整えるためにわざと吹っ飛ばされたのだから。しかしあのクセツ毛頭の少年。なんで自分の存在を感じ取れたのだろうか。

前原がそこまで思考した時、目の前の男が小さな目を見開き、おかしそうに下品な笑い声を上げる。

「ぎやはははは！ あんな男を逃げさせてどうするんだよ！ どうせ『俺達の攻撃は効かないんだから』！」「うるさいわね」

そんな笑い声に対して少女は耳に指を突っ込んでうるさいとアピール。

それに、目の前の馬鹿が言う通りじゃない事は自分が分かっている。

あの少年が、あの子から聞いた通りの奴なら。自分達の攻撃は当たってしまうのだから。

それに、あの少年を逃がした理由なら別にある。それは心の底からそいつは逃がした方が良いという直感にも似たなにかが、そう告げたからだ。

理由なんて分からないが、今までこの直感が間違っていた事はほとんどない。

どんなに窮地に追い詰められても、その言葉に従っていれば、難を逃れられたのだ。

それに今回も従ったまでの事。

それがなければ、あの少年に逃げるようには勧めなかっただろう。だって、逃がした方が危険度が上がってしまうのだから。

「さて、あんたの名前を聞いてなかったわね。……私は狂人の炎。マダーフレイム

ご存知だろうけど、一応言っとくわ」

美紀の自己紹介を聞いた太眉大男は軽く微笑んだ後、

「黒炎の破壊者……とでも言えば分かるか？」  
ブラックフレイカー

黒炎の破壊者。その言葉を耳に入れた少女は、少し身を強張らせる。

その通り名は、出来れば会いたくない敵のものだった。

あまりにも相性が悪すぎる相手なのだから。

相手の能力はその名の通り、黒炎。対して美紀のはオレンジ色の炎。

炎にはいくつかの性質がある。黒炎は破壊力に特化している。しかしスピードが遅い。

美紀の炎はバランス型。なににも秀でるものはなく、かといって悪い場所も無い。

それが、優劣をつける決定的な差になるのだ。

相手の炎は破壊力に優れるが、スピードが無い。ならば、相手にないものでここは攻撃を仕掛けるべき。

そう、速度だ。

どんなに破壊力があっても、当たらなければなんら意味が無い。  
一撃で相手が死ぬような攻撃でも、自分より素早く動き回る敵には当たらない。

黒炎の破壊者と狂人の炎。

二人には破壊力には決定的な差があっても、速度ではそこまでの差はない。

数値で表すなら、黒炎の破壊者の炎スピードが約四十。狂人の炎が約六十といった所か。

そこまで思考した前原美紀の額に、嫌な汗が浮かぶ。

こういつ時こそ直感が働いてくれればいいのだが、そんな気配が無い。

そこまで絶望的状况ではないのかもしれない。

だけど、どうすればいい？

どうすればここを乗り切れる？

「どうした、どうしたんだ、どうしたんですかあ？ 黙っちゃってなにかあったのかー？ ぎゃはははは！！」

小さな目を見開き、天井を仰ぎながら男は笑う。

「うるさいって、言ってるのよ！！」

狭い部屋に反響する笑い声に負けなくらいの怒声を喉から発生させる。

そこで、下品な笑い声が不意に止まる。

目の前にいる男の顔つきが、真剣なものに変わった。

「来ないっていうんなら、俺から行くぜえ？」

黒炎の破壊者の足元から、四方八方へと蛇のようにつねりながら黒炎が噴き出す。

黒炎の破壊者から噴き出した炎。それはゆっくりと地面を這いながら前原美紀に近づいてくる。

いくら速度が遅い黒炎とはいえ、さすがにこれは遅すぎる。

わざと速度を抑えて、一気に増すつもりなのだろう。

これは炎にも、男にも注意を割かなければならなくなる。

なんとも面倒臭い戦い方をする男だ。

(ごういう戦い方の相手って嫌いなよね。もっと豪快にかかってきなさいよ、馬鹿)

狂人の炎は心の中で悪態づく。

徐々に迫ってくる黒い蛇。それはゆらゆらと原型を留めず、陽炎のようだ。

少女は一步だけ後ろに退がる。

相手の威圧に萎縮したわけではない。

相手の炎にビクついている訳でもない。

これは、自分が攻勢に移るための過程だ。

彼女の炎は朱炎。先ほども述べた通り、なにに秀でている訳では無く、なにに劣っている訳でもない。

といつても、全てがバランス良く整っている訳でもないのだが。

「ッ！！」

攻撃をしようと少し前屈みになった所に、いきなり黒炎で出来た蛇が針のようにとがり、銃弾のような速度で襲い掛かってくる。

少女は右足を地面から少しだけ離し、左膝を軽く曲げる。

それから軸足を支点として、勢い良く一回転してそれを回避する。少しだけ服をかすつたため、制服が燃える。ではなく、切れ目が入り白い肌が露出する。

回っている最中の彼女は、右手を振りかぶる。胸元が赤い光を放つ。

前原の右手に、渦を巻きながら朱炎が出来上がる。

それを回転しながら、さっきまで男が居た場所目掛けて投げようとしたのだが、

「えっ!？」

あの黒炎の破壊者の姿はそこにはなかった。

しかし、居場所を見つける必要は無い。

なぜなら、前原のすぐ目の前でしゃがみ込んでいるからだ。

大男は左膝を曲げ、右足を後ろに引いている。回転している最中

の彼女には、この動きにとっさの反応が出来ない。  
そして。

風を切り裂く音が響く。

それは男が曲げていた膝を一気に伸ばし、引いていた右足を真下から上へと振り上げた音だった。

蹴りを放つ前の膝を伸ばす動作。あれが、この蹴りの威力を倍増させている事は言うまでもない。

目前に迫ってくる革靴のつま先。回っている最中の不安定な体勢で下を見ている狂人の炎。

やがて。ゴツ！ という音が室内に木霊する。

その音と共に、前原の顎が跳ね上がり、上体をのけ反らせて両足が地面から離れる。

少女はアクション映画のように吹き飛ばす。

しかしここは狭い室内だ。すぐに背の高い本棚に激突。中心の板を破壊し、中に入った本をぐちゃぐちゃにしてからその動きが止まる。

「あ……うあ……」

潤いのある唇が裂け、血が滲んでいた。蹴られた顎の先は赤くなっている。

前原は、目の前に落ちてくる本や塵を挟んだ向こう側にいる敵を霞む視界で捉える。

そいつは、床に落ちていたガラスの破片を踏み割りながら近づいてくる。

顔に余裕の笑みを浮かべながら。この程度か、とでも言いたそうな顔になりながら。

黒炎の破壊者は、本棚を破壊してその中に埋まっている彼女の前に来ると、おもむろに両手を地面と平行にする。

そして、唇の端を不気味に吊り上げながら、

「ぎゃはははあ！ この程度なのかよ、噂に聞いた狂人の炎とやマイダーフレイム

らはー！」

顔を天井に向けながら、それでも目だけは前原の顔から逸らさない。

彼女は体の上に乗っている本を手で払い落とし、ゆっくりと立ち上がる。

そして、その笑い声にイラついた前原は舌打ちをする。

「だから、その笑い方はやめなさいよ！」

床に落ちていた漫画を足で踏みつける。すると、それは一瞬にして炎の塊へと変貌し、赤い軌跡を残しながら敵へと突っ込んでいく。轟！！ という音がした。

それは、炎があいつにぶつかり。

そして。

粉々に砕け散った音だった。

「なんだなんだ？ やっぱり、この程度なのかよ」

見下したような笑みを、再び向けてくる。

新藤鏡夜は朝の陽射しを浴びながら、街中を走っていた。

通り過ぎて行く人々が、なにか変なものを見るような視線を送ってくる。

鏡夜はそれに気付かぬ振りをしながらも、溢れ出てくる涙を袖で拭いていた。

その涙の理由。それは分かっている。

悔しいのだ。

同じような年代の女の子一人をあんな場所に残して、逃げ回っている自分自身に腹が立ち、それを上回る悔しさで涙がこみ上げてくる。

(本当に逃げてよかったのだろうか)

考えるのはその事ばかり。

なんでだろう。

なんで、自分はあそこで逃げてしまったのだ。

恐怖から。

得体のしれない奴が現れたから。

変な能力を使っていたから。

いきなり飛び込んできたから。

理由は、ある。

しかし、そのどれもが言い訳にしかすぎないのだ。

鏡夜だってその辺にいるような一般的男子高校生だ。

しかしそれでも、あそこで逃げて良かったのか？ その考えが浮

かんでは消え、浮かんでは消え、浮かんでは消え……。

そして、涙がとめどなく溢れてくる。

なんで、自分は臆病なのだ。前にも思ったが、全く成長していな

い。あの時から。

家族が殺されていたあの時から全く。

いつの間にか、足が止まっていた。

心臓が早鐘を打つ。

だが、それがどうした。

こんな場所で逃げていたら、あいつに会った時なにもする事がな

いじゃないか。

逃げるな。背を向けるな。目を背けるな。立ち向かえ。

自分はなにも出来なかったあの頃の子供ではない。

成長しているはずだ。

(だから、逃げるな！！ 逃げちゃ駄目だ！ それに、あの能力。

なにかあいつに関係あるかもしれない)

やっと掴みかけた糸口を、自ら手放すところだった。

「俺は逃げない！」

顔を上空に向け、気合を入れるために鏡夜は人目もはばからず腹

の底から大声を出す。

周囲にいた通行人が驚いたような表情を浮かべ、変態を見るよな

視線を送ってくる。

しかし少年には、そんな些細な事は視界に入らない。

右足を少し後ろに下げ、そのまま回転する。

視線の先にあるものは、自分が住んでいるアパート。あそこでさっきの少女はまだ戦っているのだろうか。

そして少年は目に浮かんでいた最後の一滴を指で弾き、目的地に向けて走り出した。

新藤鏡夜は、自らの意思で。何者かの干渉など全くなく。死地へと赴く。

住宅街を走っていた鏡夜の前に、住んでいるボロアパートが見えてきた。

息を切らせながらも、ラストスパートをかけるために足に力を入れる。

そしてその力を解き放とうとした瞬間。

ゴバツ！ という音が辺りに響き渡り、少年の目の前にあるアパートの窓から赤い炎が噴き出した。

それはどこまでも赤く、どこまでも恐ろしい業火のようなものだった。

「な、なにが起こってるんだ……？」

その光景に少しの間、呆然としてしまう鏡夜の耳にさっきの音が再び響く。

今度は木製の古めかしい玄関扉から噴き出す。

それは一直線上に進み、落下防止の手すりをすり抜け、空気中で四散した。

だが。

「なんでだ？」

金属製の錆びた手すりはおろか、木製の扉すら焼け跡一つない。

それを見て、またもや思考が途切れる。

走っていた足もいつの間にか止まっていて、あそこに行く事を拒み始める。

あそこになにかいるのか？

『赤』という色に良い思い出はない。それが心理に影響を及ぼし、

拒絶しているという可能性もある。

だけどあそこに行かずにとどまる。自分はなんのために戻ってきたんだ。

そう考え、動きたくないと言えかける足を無理やり動かし、走ろうとする。

だが、ここで。先ほど炎が噴き出した窓から、一人の男が飛び出していくのを見た。

その男を見た鏡夜の脳裏に、部屋の中で起こった出来事が蘇ってきた。

二メートルは超えるであろう大男。あいつは確か、部屋に侵入してきたやつだ。

そいつが逃げたのか？ では、あの少女は勝ったのだろうか。思考を再び働かせて色々考えめぐねていたが、とりあえず部屋に入ってみようという結論にたどり着いた。

あの男がいないのなら、今部屋にいるのは守ってくれた少女だけだろう。

それならば、部屋に戻っても全く危険がないはず。

そう思い、足を動かして鉄製の外階段を上っていく。

カンカンという軽快な音を鳴らしながら上りきった鏡夜は、右側にある部屋の扉の様子を探る。

やはり、焦げ後がない。いや、厳密に言えばあるのだが、それはとても小さなものだった。

直径一センチにも満たないだろう。

不思議に思いながらも、少年はドアノブを握って扉を開けた。

自分の部屋を見た鏡夜は驚く。

床には散乱している本やガラスの破片が見え、それに囲まれるように、あの少女の体が沈んでいたからだ。

思わず鏡夜は少女に近寄り、体をゆすり始めた。

「おい、大丈夫か？」

少女の制服である茶色いブレザーの背中の辺りに手をかけ、激し

く揺する。

もしかしたら脳震盪を起こしている可能性があるのですが、勢い良く揺さぶるのは危険なのだが、今の鏡夜にはそういう思考が欠如していた。

「おい！ 生きてるのか！？」

手を横に移動させるたびに彼女の髪が揺れ、顔を覆い隠す。

反応が無い。

何回揺すっても、揺すっても、揺すっても。顔をしかめる事すらない。

「……まさか」

最悪の状況が頭の中に思い浮かんだが、頭を振ってそれを吹き飛ばす。

(そうだ、息をしているかどうか確認すれば)

少年は早速、少女の髪を耳にかけて口の近くに手をかざす。

微かにだが、息はしている。

「良かったー」

安心したせいか、盛大に溜め息を吐き、地面に倒れこむように転がった。

この少女は死んでいない。しかし安心するのは早い。救急車を呼ばなくては。

倒れこんだ体勢のまま、地面を這って自分の携帯を探す。

見つからない。

この少女とさっきの男は派手に暴れていたようだから、その時に壊されてしまったのかもしれない。

だとしたら固定電話を使えばいいと思い、リビングの端に置いてあるはずのものを見た。

しかしそれは、粉々に壊れていた。

鏡夜は迷った。固定電話が壊れていて、携帯電話は見つからないこの状況では、外に助けを呼びに行くしかない。

しかし、大丈夫なのか？

この少女には大した傷は無い。なぜ気を失っているのかは謎だが、もしあの男が戻ってきたら、一撃で殺されるかもしれない。そう思うと、この場所から動けなくなる。

仮にあの男が来ても、鏡夜にはなにも出来ないだろう。それどころか、自分の前でこの少女は殺されるかもしれない。

そんなものは出来るだけ見たくないし、想像したくもない。

しばらく悩んでいると、外の階段を上ってくる音が聞こえてきた。  
(さっきの奴が戻ってきたのか?)

少年は身を強張らせて、身構える。もしあいつが戻ってきたのなら、せめて一発でも殴ってから殺されてやる。

そんな覚悟を胸に、自分の部屋の前で止まった足音の主が入ってくるのを待っていた。

しかし、ピンポンというチャイムが鳴った。あの男が来たとしたら、わざわざチャイムを鳴らす必要性は皆無だ。

そのまま扉を破壊してくればいいのかから。

じゃあ、誰が?

「どちら様ですか?」

少し疑問に思いながら、鏡夜は扉の前にいる人間に話しかける。

このリビングから玄関は、直線上にありよく見る事が出来る。

あの男の可能性もゼロではないので、少年は近くにあった箒を持つた。

こんなでもないよりはマシだ。

まだ鳴り続けているチャイムを止めさせるために、鏡夜は箒を持つたまま玄関に近づく。

そして、扉に付いている覗き穴から外の様子を窺ってみると。

「え?」

ガラス越しに見えたその姿に、鏡夜は驚く。

扉の向こうにいる人物は、あの少女だった。

腰近くまで伸びている黒いふわふわヘアに、細い眉。優しそうな瞳をしたあの少女。

何日か前に、鏡夜を助けてくれたあの子。  
どうしてここに？

そんな疑問は浮かんだが、あの姿に鏡夜は安心しきってしまった。  
いた。

自分の命を助けてくれたのだから、今度もそうしてくれるのかも  
しれない。

そんな希望を込めながら、少年は扉を押し開ける。

扉のすぐ前方にいた少女は、開けた隙間から顔だけを覗かせた。

そして、鏡夜の顔を見ると、

「あれ？ 君はこの間、助けた男の子だね。元気だった？」

と、前にも増してのほほんとした雰囲気を感じさせながら笑顔で  
問いかけてくる。

そのひまわりのような笑顔に、鏡夜は数瞬の間、見惚れていた。

「あれ？ 聞こえてる？」

動きを見せない鏡夜を心配に思ったのか、少女は扉に隠れて見え  
ていなかった体を移動させて玄関の扉を開いた。

そして少年の前に到着すると

手を鏡夜の目の前に持っていき、軽く左右に振った。

良い匂いにする香水みたいな香りが鼻をくすぐり、意識がボンヤ  
リとしてくる。

「あれあれ？ 大丈夫なのかな？」

首を傾げて心配そうに鏡夜を見始める少女。

「あつ、そうだ。美紀はここにいる？」

思い出したように右の拳を左手のひらに打ちつけ、さっきよりも  
焦っているのか、若干だが早口で訊いてくる。

「美紀？」

聞きなれない人の名前に鏡夜は反芻した。

少女は軽く頷く。

美紀。それは明らかに女の子の名前。そして、自分の部屋を見た。  
女の子が倒れている。

「あああああ！」

今更だが、思い出した。早くあの少女を病院に連れて行かなくては。

「ごめん！ 俺は病院に行かなければいけないんだ。だからまた後でね！」

そう言っつて鏡夜は体を反転させて破壊し尽されている部屋に戻った。

地面に倒れこんでいる美紀と呼ばれた少女の腕を自分の肩に回し、ゆっくりと立ち上がらせる。

歩き出そうと前を見た瞬間、さっきまでは玄関に居たはずの少女が、土足のまま入ってきている事に気付いた。

「その子、病院に連れて行っても、意味がないよ？」

「え？」

鏡夜は思わず聞き返していた。

「なんで、病院に連れて行く必要がないんだ？」

「それはね」

少女は少年の疑問を解消するためなのか、美紀と呼ばれていた子を指差した。

「ほぼ無傷だつていうのも一つの理由だけど、一番の理由は病院で診てもらっても全く治療出来ないってことだね」

「治療出来ないって………どういう事だよ。こいつは人間じゃないのか？」

鏡夜は少女を担ぎ直す。その存在を確かめるためと、人間だという事を確認するために。

確かに温かい。人間の温かみだ。そして、軽い。これは少女の重さだろう。

鏡夜の疑問に、少女は首を横に振った。「そういう事じゃないよ」と前置きしてから、

「『シヤドウ』との戦いで出来た傷は、通常の病院で治す事が出来ないんだよね」

シャドウ。

その単語は、前にこの少女と会った時に聞いた覚えがある。確か、あれは黒い影のようなものを指していたのではないか？

鏡夜はそんな考えを頭の中で転がしていたが、そんな事を知ってから知らずか少女はのほほんとした調子の声で言う。

「とにかくさ、美紀を降ろしてあげて？ 今から君の疑問には答えてあげるから」

少女に言われたので、鏡夜はどこに降ろそうかと部屋の中を見る。ガラスの破片がいたる所に散らばっており、フローリングの床にはなにか黒いものがあつた。

こんな場所に気絶している女の子を置く訳にはいかない。

そう考えた鏡夜は、とりあえず自分のベッドに乗っているガラスを払いのけ、そこに彼女を置く。

規則的に呼吸しているのを再確認してから、少年は背後の女の子に振り向く。

穏やかな笑みを携えながら、彼女は眠る少女を見つめていた。

それは、とても温かく、そして人を安心させるかのようなもの。

それが自分には向けられてはいないと分かっていたが、それでも胸の鼓動が早まるのを感じる。

少女は数秒の後、笑顔を保ったまま、しかし真面目な声で告げてくる。

「まずは自己紹介だね。私は東川<sup>ヒガンカワ</sup> 璃子<sup>リコ</sup>よろしくね、新藤鏡夜くん」  
ニッコリと無邪気な笑みを浮かべる。

ああ、よろしく。と鏡夜は言い掛けたが、それはある疑問によって飲み込んだ。

代わりにこの質問を試してみる。

「なんで俺の名前を知ってるんだ？ 確か最初に会った時も、名前を言ってからどっか行ったよな？」

そう。なぜだか、この東川という彼女は鏡夜の名前を知っていた。彼自身は、昨日同じ学校だと気づいたばかりだというのに。

この少年の疑問に、しかし彼女はクスクスと笑いながら、

「私達の学校で、君の事を知らない方がどうかしてるよ〜？」

まるで鏡夜を品定めするかのように、頭からつま先へと視線を動かす。

「でも、さつき玄関で会った時にさ、俺の事知らない風に振る舞ってたじゃないか」

少年はさつきのやり取りを思い出しながら訊いてみた。

どんな答えが返ってくるかを想像していが、それが来ることはなかった。

東川がそっぽを向いて無視していたからだ。

この少女がこんな対応を取ってくるとは思ってなかったので、彼は少しだけ言葉に詰まる。

やがて少女はか細い声で言う。

「別に。気にしないで」

なにか言いたくない理由でもあるのだろうか。それなら無理に聞き出すような行為はしたくない。

だって、嫌われたくないのだから。

「あ、ああ。分かった」

だから鏡夜はこう言うしかなかった。

「それで、話の本題に入ってもいいかな？」

さつきの小さな声はどうしたのか、今は元気に話しかけてくる。

鏡夜は頷きかけて、その動作を止めた。なぜなら、破壊された窓から冷たい春の風が吹き込んできて、寒いのだ。

そしてもう一つの理由。こんなにも破壊されているのに、なぜ騒ぎになっていないのだろうか。

少年が反応しないのを不思議に思ったのか、東川は首を傾げて頭の上に疑問符を浮かべる。

「どうかしたの？」

その問いに、鏡夜は窓を指差す。

少女は差された方向を見て、「あっ」と声を上げる。

「ごめんね。この窓は、後で直しておくから、それで許して？」  
両の掌を合わせ、それを目の前に持って行きながら東川璃子は謝った。

「直せるのか？ いや、まあ、それはいいとして。俺が言いたいの  
はさ、こんな破壊されて、炎とかも噴き出してたのに、なんで通  
行人はなにも行動しないんだ？」

鏡夜の当然といえば当然の疑問に、少女はクスリと笑うと、

「ああ、それなら気にしないでいいよ。今、この部屋で起こった事  
は、一般の人には見えてないし、感じてもないだろうから」

え？ と鏡夜は言葉を失う。あんなにも派手に炎が噴き出し、ガ  
ラスも破壊されていたのに、誰も気付いてない？ どういうことな  
のだろうか。

「み……見えてないってどういう事だ？」

あまりの事に頭が混乱して上手く働かないながらも、鏡夜はなん  
とか言葉を吐き出す。

東川は「うーん」と少し唸ってから、

「見えてないってのは少しおかしかったかも。目に見えてるけど気  
にしてないって言う方がいいかもしれないね」

目に見えてるけど気にしてない。それはどういう事なのか。鏡夜  
の疑問に答えるように、少女は言葉を続ける。

「キミはさ、路上に転がっている小石を気にする？ もしくは、草  
原に生い茂っている草一本を気にする？ しないよね。今ここで起  
こった事も、そういう雑草とか小石みたいなものなんだよ」

首を傾げて訊いてくる彼女の目を見ながら、鏡夜の脳内はさらに  
混乱する。

ガラスが轟音をたてて割れたのに、雑草と同レベル。部屋からい  
きなり炎が噴き出したのに、小石と同じ扱い。

日常を生きていれば、そんなのはありえない。平和な世界で生活  
している人達が、こんなのに耐性を持つているとは思えない。

なぜこんなにも非日常的な事が起きたのに、一般人は騒がない。

なんで興味を示そうともしない。

なぜ素通りしていくのだ。

自分が今まで体験しなかっただけで、他の人全員が不思議な体験をしているのかと考えたが、それは有り得ない。

「あははは。いきなりこんな話されても、意味分からないよね。うーん、そうだな……」

東川は鏡夜の前から、部屋の隅。壊れた本棚がある場所まで移動して、棚を指差す。

「ここから」

そう言っただけでまた動く。地面を足の先でこすり、線を書くような仕草。床に散らばっているガラスの破片などをどかしながら、今度は壊れた棚の反対側にある壁際に移動した。

「ここまで」

彼女が書いた架空の線は、鏡夜と少女を二つに分けていた。

少年は線を挟んだ向かい側にいる少女に話しかける。

「この線はなんか意味あるのか？」

鏡夜の質問に、東川は少し悩むように頬をポリポリとかく。上手く説明出来るかどうか不安なのだろうか。

「分かりにくかったら言っただけ？ 私、こういうの慣れてないんだ。照れくさそうに笑いながら、少女は説明を始める。

「キミと私を分けているこの線。キミのいる方が一般の世界。つまりは平和な日常ってところかな。そして、私がいるこっちの世界。これはね、非日常ってところ。ここまで分かる？」

「ああ、なんとか」

「そして、キミのいる世界では、私達の世界を見ても、別に何も感じない。この理由はね、私側の人間が、キミ達にそういう細工」というか、私達の存在感を極限まで無くしてるの」

存在感をなくしている？ そんな事は本当に可能なのだろうか。

「存在感をなくすっていうのは、極端に目立たなくなる、っていう事だから、目に見えているけど、見えない。気にしない。なにも感じ

ない。小石と同じ。草一本と同じ。分かった？」

東川璃子は、自分で書いた線をピヨンと飛び越え、鏡夜の近くまで歩いてくる。

うつすらと笑いながらも、それでも不安そうな表情は隠せないでいた。ちゃんと伝わっているのかどうかを、とても気にしているのだろう。

そんな彼女の顔を見ていた少年は、少し天井を見上げながら思考した後「じゃあ、なんで」と切り返す。

「炎とかそういうのも感じないんだ？ さっきの話を聴いていると、人の存在感だけをなくすもんじゃないのかなー、て思っちゃったんだけど」

その鏡夜の疑問に、東川は少し間を空けた後に答える。

「それなら問題ないよ。存在感を失っている状態の私達が行った事、使った能力、それら全てにさっきの条件はあてはまるんだ」

（便利な能力だな……）

そんな事を考え、そしてまだ残っている疑問を訊いてみる。

「じゃあさ、なんでその能力で作り出された炎が、この部屋の扉とかを突き抜けたのに、壊れたり焼かれたりしてないんだ？」

さつき見た光景を思い浮かべる。確かにこの目で見た。

赤い炎が扉を突き抜けていく所を。玄関や手すりには焦げ後がなかった事を。

「ああ、それ？ それはね、私達の能力って、使いようによっては人を死なせてしまう事があるんだよね。だからそういう不幸な事故を失くすために造られたのが、これ」

そう言っつて、東川は指にはまっついている指輪を見せてきた。

金色に光っているそれは、なんの装飾も無いただのリング。特になにか細工をしているようには見えない。

「それがどうかしたのか？」

この鏡夜の疑問に、彼女は右手をパチンと鳴らす。嵌まっていた指輪が輝き始めると同時に、指先から閃光が飛び出す。

「なにやって」

いきなりの破壊行動に少年は抗議の声を上げようとした。しかしそれは中断させられる。

少女の指先から飛び出した雷のようなものは、部屋の壁にぶつかり、少しの焦げ後を残し、なにもなかったかのように消えうせた。

「？　なんでだ。確かにいまあそこに当たったのに」

首を傾げ、思考を始めた鏡夜の耳に、東川の声が届く。

「分かったかな。この道具を身に着けていると、現世の物には殆ど傷がつかない。これは人間にも言える事だよ？　どう？　凄いでしょ」

偉そうに胸を張って、今起こったことを自慢する彼女。

確かに今、この目で見た。いやだがしかし。鏡夜は別の例も見ている。

彼女がさつき説明してくれた理由だと、その疑問が解消されないのだ。

だから彼は訊ねる。

「でもさ、俺を助けようとして、あの美紀って子が炎を出したとき、本とか巻き込んでたけど……あれはどういうふうに説明するんだ？」

東川璃子は人指し指でこめかみの辺りをつつきながら、言葉を選んでるように悩み始めた。

「うーん、そうだね。色々理由はあるけど、この道具を身につけていてもその時の心理状態がおかしいと、能力が暴走しちゃって、制御できなくなることがあるんだ」

「へえ、その道具は便利そうに思えるけど、本当はそうでもないんだな。他にはなにかあるのか？」

ちよつとした興味から訊いてみた事だが、少女は深刻そうな顔になり、暗い声で告げてくる。

「この道具はね、私達の能力の暴走を最大限、食い止めてるんだよね。あまり使いすぎると私達の力は制御が利かなくなっって、勝手に能力が暴走して。身を壊す事があるんだ。私は、そのせいで死んじ

やった能力者を何人も知っているよ」

つまりは、あの指輪が彼女の生命線なのだろう。だったら、あれなしでは能力を使わない方が良いのかもしれない。

「そ、そうか。なんかゴメン」

誰だって自分が死ぬような場面や、誰かが死んだ所を想像したくないし、思い出したくないだろう。

だから、彼は謝った。

「あ、ううん。別に謝る事じゃないよ。能力が暴走したのは、彼らが悪いんだから」

そう言った東川の顔はとても悲しそうで、寂しそうで、しかしどこか怒っているような複雑なものだった。

その表情が気になっていたが、許してもらえた後なので深く追求しない事にする。

「え」と後は……」

人差し指を顎に当て、なにを言うか考えている彼女だったが、結局、今日はこれ以上聞く事は出来なかった。

その理由は。

壁際のベッドで寝ていた美紀とかいう女の子が、目を覚ましたからだ。

彼女は、

「う、ううん……」

と眠そつな声を出しながら、上に掛けられていた布団をどけてゆつくりと起き上がる。

「あれ？　ここはどこだっけ？」

鏡夜を助けてくれたときは正反対のブーツとした眼差しで部屋の中を見渡していたが、やがてあの鋭い眼光が瞳に宿り、一気に跳ね起きた。

「あつ、美紀。大丈夫かな？　大丈夫だよ。あんまり怪我とかしてない力の波動を感じてたもん」

ニコニコと笑いながら、東川は彼女に近づいていく。

「あれ？ 璃子？　なんでここに？　ていつかさっきの男はどこに行ったのよ」

訳が分からないとでも言いたげな感じの彼女は、一人佇んでいる鏡夜を見つけると、

「あつ、あんた。なに戻ってきてんのよ！」  
と、怒鳴ってきた。

なんで戻って来たかと怒鳴られても、戻ってきたからとしか言いようがない。

それを伝えようと思いい口を開きかけた鏡夜は、しかしすぐに閉口した。

理由はさつき美紀とかいう少女が言った言葉が原因だ。

『さっきの男はどこに行ったのよ』

どういう意味なのだろうか。彼女が赤い炎を出して撃退したのではないのか。

「……いや、違う」  
思わず呟いてしまう。

能力というものはイマイチ分からないが、さつき少女が出していた炎の色はオレンジ色だと思う。

何種類もの色を出せるのなら別段不思議じゃないが、それではなにか納得いかない。

「鏡夜くん、どうかしたの？」

彼が呟い後、なにも動かないのを不思議に思ったのであろう東川が、首を傾げながら訊いてくる。

分からない事を考えていても仕方がない。ならば、事情を理解していそうな人に訊ねるのが手っ取り早いだろう。

「なあ、能力に色つてものは何種類くらいあるんだ？　それと、何種類までなら使う事が出来る？」

話を振られた東川はその質問を受け、鏡夜に訝しんだ視線を送っていたが、数秒後には答えるために口を開いた。

「能力の色については未確認だよ。現在分かっているだけで十種類

以上あるね。もう一つの質問の答えだけど、一人が使える能力は、ある例外を除いて一種類だけだね。なんでこんな事を聞いたのかな？」

今度は彼女から質問されてしまったが、それに返答する余裕がない。

鏡夜は今聞いた話を頭の中で何回も転がし、整理していく。

そしてすぐに思い当たる。

(じゃあ、あの赤い炎は誰のだ?)

美紀 敵には狂人の炎マダーフレイムと呼ばれていた彼女。炎の色はオレンジ色、朱色など、そういった系統の色だった。

一人につき能力の種類は一種類だけ。ならば、色も一色なのではないか。

じゃあ、あの赤い炎は誰だ?

美紀と襲来者である男。あの時、このボロボロの部屋にいたのは、その二人だけだったはず。

なのに、第三者である能力が出てきた。誰か彼女を助けに来たのだろうか。

いや、それは考えられない。それだとしたら、部屋から出て行く所を鏡夜が目撃しているはずだ。

じゃあ、一体、誰が?

あの大男だろうか。いや、それだとしたら、自分の能力であいつは逃げ出した事になる。これも違うのだろうか。

残されているのは美紀とかいう少女だが、やはりこの可能性もない。

「ん?」

ヒントを掴むためにさっきの話を思いだそうとした所で、気になる箇所を見つけた。

たしか東川は例外もある、みたいな事を言っていたはずだ。ならばそこに、この疑問を解決するなにかがあるはず。

それを訊こうとして前を見ると、先に東川が口を開いた。

「うーんとね、少し言いづらいんだけど。私達はこれから行く場所があるんだ。だから、今日の所はここまででいいかな？」

本当に申し訳なさそうに、東川は目を伏せる。それに対して、美紀とかいう少女はふんっ、と鼻を鳴らしていた。

「邪魔するようなら、ふっ飛ばしてでも行くけどね」

「……お前、少しはお礼とか言ってくれてもいいんじゃないか？」

そのベッドだって、俺が寝かしてやったんだからな」

彼女は、肩にかかっていた髪の毛を払い除けながら、

「へえ。お礼言えがいいのね。分かった。ボロボロのベッドで寝かせてくれてありがとうございます。これでいいかしら？」

(可愛くねえ。すっげえ、ム力つく)

この時、鏡夜の中で、美紀の評価は最低まで下がった。

鏡夜がイラついている事が思い切り顔にでていたので、それを見た東川が慌てて仲裁に入る。

「ほら、美紀。そんな事言っちゃ駄目だよ？　なんで君は初体験の男の子には冷たいのかな」

「は、初体験じゃなくて、初対面でしょ！！　璃子はなんでそんなに天然なの！？」

「え〜。私、天然なんかじゃないよ！　もう、変な事言わないでくれるかな」

頬を膨らませて、あからさまに怒っているという意思表示をしている東川。なんだか、鏡夜と会話していた時とは、印象が少し違う。さつきまでの少し頼りになる感じの彼女はどうしたのだろうか。

その事に頭を悩ませ、「うーん」と少年が唸っていると、生意気少女が口を開く。

「それじゃ、私たちはこれで。あんたはその辺で敬っていないさい」

「誰をだよ！　少なくともお前を敬うなんて無理だからな！」

「あら、助けてあげたのに。なんなのかしら、その態度」

「ぐっ」

それを言われると弱い。

確かにこの少女は生意気で性格ブスで乱暴で、しかし顔だけは意外に整っているという残念な性格をした奴ではあるが、それでも命の恩人であることは変わりない。

「ふふっ」

今のやり取りを見ていた東川が、思わずといった感じで笑い始める。

「美紀が私以外の人とまともな会話してるの久しぶりにみたかも」

「これのどこがまともなんだよ。明らかに嫌味しか言われてないぞ」  
鏡夜は頭を抱え、静かに嘆息する。

まだクスクスと笑っていた東川だが、そこで鏡夜の部屋に飾られている時計を見て、焦ったようにオロオロし始めた。

「美紀、早く行かなくちゃ。怒られちゃうよ」。私あの人に怒鳴られるの好きじゃないんだよ？」

「あたしだって好きじゃないわよ。まあ、確かに急いだ方が良さそうね」

美紀は東川の狼狽する姿を一瞥すると、玄関の方角に向かって歩き始めた。

鏡夜の前を通ってもまるで無関心。そこには誰も居ないような感覚なのだろうか。それほどまでに嫌われてしまったのだろうか。どつちでもいいのだが。

鏡夜はそんな生意気少女の行動に気を悪くするでもなく、呆れるでもなくただその姿を見送っていた。

やがて東川も美紀に着いて行くように、彼女のいる出口へと向かう最中、

「ごめんね、鏡夜君。家の中ぐちゃぐちゃにしちゃって。でも、もう少して修理に来る人達がいるから。あっ、もちろんお金はかからないからね」

それだけを言うと、彼女はすぐに玄関の方に行き、靴は履いたままだったのでそのまま扉を開けて外に出ていた。

先に出て待っていた美紀と、東川は談笑しながら去っていく。

鏡夜は一人残された破壊され尽くした部屋の中で佇んでいた。

なんだか頭痛がしてきた。一気に非日常的なものを聞いてしまったせいで、脳の許容範囲でもオーバーしてしまったのか。

「……はあー」

溜め息を吐き出す。なんだかもう、自分は日常には戻れない、そんな感じがした。

東川が言っていた通り、彼女達が部屋から出て行って数分後に変な男二人組みが来た。

そいつらは雰囲気から仕草、身長、服装までもまったく一緒に見える。赤いロングコートを纏い、フードで顔を覆い隠している。

どちら様ですか。鏡夜がそう問う前に、そいつらは勝手に土足で入ってくる。しかし、なぜか靴跡がつかない。不思議な連中だ。

赤いコートの男達は、一言も喋らずに部屋の奥。つまり、大破しているガラス戸の前に行く。

こいつらが靴のまま入ってきたのは、床に散らばっている破片を踏み碎き風が吹き込んでくる原型を留めていない戸の前に着く。

鏡夜には聞こえないようにしているのか、二人組みは顔を寄せ合って小さな声で話し出す。

やがてなにか決定したのか知らないが、部屋の主の前に来ると、感情もなにも感じない平坦な声で左側にいる男が話します。

「この部屋を修理する。だから出て行け」  
上から視線だが、直してくれるのならそれに従うまでだ。

鏡夜は頬をぽりぽりと掻きながら踵を返し、これからはなにが行われるのかを想像しながら玄関から出て行く。

「……………」

部屋の中の様子をなんとか把握しようと思い、鏡夜は耳を扉に押し付ける。もうすでに、陽は高くなってきた。

扉に耳をくつつけて中の様子を探っている、第三者から見たらただの変質者な鏡夜だが、部屋の中でなにが行われているのか分からない。

まるで人間なんていないように、静まり返っている室内。なにがどうなっているのだろうか。

いや、それよりもあの二人を本当に信用しても良かったのだろうか。

東川が、もう少しで来ると言っていたので、あいつらがそうだと勝手に思い込んでしまった。

あの二人組みは、もしかしたら襲撃者の仲間で、あの部屋でなにかしているのかもしれないではないか。

(いや、それはないか)

ぶんぶん頭を振って、その考えを脳みそから弾き出す。

もしあいつらが敵だったのなら、今、自分は既に殺されているかもしれない。

鏡夜が生きている事自体が、怪しい二人組みが東川の仲間だと裏付けているのではないか。

そうだ、そうに違いない。

そう結論づけ、鏡夜は耳を木の板から離れた。完璧にこっち側の人間だと信じた訳ではないが、自分には害が及ばないだろう。

鏡夜はアパートの古ぼけた手すりに体を預けながら、春の暖かい陽光を全身に浴びる。

風がクセのある髪を弄び、頭頂部からピョコンとはねている一房を揺らしていく。

そうやって待つこと数分。いつもはサビついた嫌な音を発生させながら開く扉が音もなく口を開けた。

そしてやはり無音で例の二人組が出てきた。

そいつらは軽く鏡夜に会釈すると、片方の男がやはり感情もなにも感じられない平坦な声で言った。

「修正完了。我々はこれで帰らせてもらう。なにか不備があったら東川にでも伝えてくれ」

「え……ああ、ありがとうございます」

どこをどうやって直したのかを教えてください。彼らに、鏡夜は少し戸惑いながらも答えた。

そんな歯切れの悪い解答に、しかし二人組は気を悪く（感情があるのかどうかは怪しいが）するでもなく、足早に階段へと向かい、それを使って地面に足を着けるとさっさとどこかに行ってしまった。

「ちゃんと直してくれたのか、あいつら」

その疑問を持ち、少年は恐る恐る部屋へと続く扉を開いた。

結論から言えば、元には戻っている。粉々になっていたガラス窓は、接合の跡がまったく見つかからず、まるで新品のようだった。

他にも壊れていた家具などはほとんど元通り。

そう、ほとんどだ。

少し違う場所と叫びたら、その色だろうか。なぜかピンクやら黄色やら赤などに様変わりしている。

「なんで……？」

そう呟かすにはいられない鏡夜だった。

## 対抗本部へ

二日後。鏡夜は眠い目をこすりながら通学路を歩いていた。

先日の事が起こってから、なんだか寝ても寝たり無い感じで、体が凄くだるい。

本当は今日、学校を休みたかったのだが、今から休みすぎて単位が足りなくなったらまずいとのお考えから渋々登校している次第である。

「はぁー……」

自然と漏れる溜め息。爽やかな朝の象徴でもある暖かな陽光が煩わしい。普段なら和むはずであるう小鳥のさえずりは、うるさいバンドの音にしか聞こえなかった。

ここいらで一つ、なにか疲れても吹き飛ばのような面白い出来事でも起こってくれないかと周りを見てみたが、それは考え直すしかない。

なぜならこの少年はとてつもなく不幸なのだ。

面白くない事が日常的に起こっても、面白い事が発生するなんて事は一年に一回あればいいほうだ。

(誰か……幸運を俺に分けてくれ)

そんな到底無理な事を考えながら歩を進め、重たい足がようやく校門の中へと進入する。

この前はこの辺で東川とすれ違うという体験をしたのだが、今日はそんな事もなく血を吐くことも無かった。

実に平和だ。平和すぎて不気味思うくらい世界はなんの問題もなく回っている。

今この登校ルートを無傷で、しかもなにも変な事に巻き込まれていないという事自体が、なんだか凄く嫌だ。

この後に、とんでもない、どうしようもない程の馬鹿な事件に自ら入り込みそうな気さえしてしまうほどだ。

特になにも起こることなく、鏡夜は自分の教室にたどり着く。  
すると、他のクラスメイトは既に全員揃っていて、不幸少年の席  
近くにてたむろしていた。

(なんだ……?)

訝しがりながらも、鏡夜は自分の席に近づいていく。

すると、神田翔平がいの一番に近寄ってきて、その傭兵みたいな  
顔を最大限に近づけてくる。

そして真剣な表情を作ると、

「お前、東川璃子とはどういう関係なんだ？」

「は？」

いきなりこんな事を聞かれたら、間抜けな声を出すしかない。鏡  
夜が質問の意図を掴めずに狼狽していると、神田は大きく嘆息しな  
がら後を続ける。

「お前の家から東川と、もう一人誰か知らないけど可愛い女の子が  
出てくるのを見たって言っている奴がいるんだ。なあ、どうなんだ。  
どういう関係なんだ!？」

なんか取り乱している抗争帰りみたいな顔の少年は、鏡夜の肩を  
ガツチリと掴み何度も揺すってくる。

少年は揺れる視界の中、ああ、これが来るから今日の朝は平穏だ  
ったのか……と日常の大切さを噛みしめていた。

「で? 一体どういう関係なんだ?」

「そんな事言われてもな……」

現在、鏡夜は廊下側最後尾の自分の席に座らされ、その周りを取  
り囲むように存在している男子に圧倒されていた。

「正直に言ええい!!」

「なんで!?! なんでそんなにテンション高いのお前!?!」

翔平がおかしい。いつもの冷静さを宇宙の彼方に光速でふっ飛ば  
してきたかのようにだった。

周りを見てみても、なんだか全員目が血走っている。いつも通り  
なのは女子だけか。

というか、なんだか人口密度がおかしい気がする。自分のクラスにこんなに男子はいないはず。女子と男子の比率でいったら女子の方が圧倒的に多いはずなのだが、今、鏡夜の周りを囲んでいる狂った男達はそれを完全に超えていた。

なにがなんだか分からない。そんなに東川は人気なのだろうか。

……彼女の事を可愛いと言うのはなんら不思議ではないが、美紀とかいう性悪少女の事を可愛いと言うのは、なんだか目が腐っているとしかいえない。

「黙ってたら分かんねえだろうが！！　なんとかいえこの裏切り者！！！」

「俺がいつ翔平を裏切った？」

「約束したじゃないか！　二人で魔法使いになるって！！！」

「してねえよそんな気持ち悪い約束！！　とりあえずお前は目を覚ませ！！！」

鏡夜は立ち上がり、古いテレビを直すような的確な角度で翔平の頭にチョップを加える。

「はううう……」

なんだか少しだけ気持ち悪い声を出しながら、翔平は頭を押さえ、てうずくまった。

「これで元に戻ったか？」

鏡夜は今ので直ったらこいつはテレビか、という思いと、少しばかりの期待を込めて少年を見下ろした。

しかし。

「鏡夜ー！　なにしゃがる！　東川を彼女にしたからって調子こくなよ！？」

「まだ直ってねえ　！！！」

再び肩を掴まれ、激しく前後に揺すられる不幸少年は教室の窓を震わせるほどの大声を出す。

そしておかしいのは彼だけじゃない。

鏡夜を取り囲んでいる男共全員が一気に少年の双肩を砕かんばか

りの力で掴み、それぞれ好き勝手な方向に揺すり始める。

「なにお前！ くせつ毛の癖にム力つくんですけど！」

「返せよ！ 俺たちの東川を返せよ！」

「死ねー！ 本当に死んでしまええー！」

「なにになになになに！ なんで俺がここまで言われなきゃいけないの!？」

「というか死んでたまるかあー！ と鏡夜は叫ぶと、自分を掴んでいた手をはがしにかかる。

しかし外しても外しても次々と襲い来る無数の手。これで周りが暗かったらホラーになっているだろう。

「落ち着いてええええ！ 昨日あった事全て話すから！」

鏡夜の悲痛な叫び声が教室中に響き、それを合図に男共の動きが止まる。

さつきまでとは対照的な程に静まり返った室内。聞こえてくるのは、女子がひそひそとこちらを見ながら話している声ぐらいか。

「さあ、鏡夜。ちゃんと説明してもらおうか」

言ったのは神田翔平。彼は机をばんばんと叩きながら続きを促す。

鏡夜は静かに嘆息してから、

「別にやましい事はしていない。ただ」

「嘘つけ!!」

「最後まで話を聞けえい!! あれはちょっと事情があつて、東川が来てくれたんだよ」

流石に死にそうになったり、変な能力を使っている男が襲ってきたりしていた事は話せない。

もし言ったとしても、夢扱いされるか、頭の痛い子として見られるか罵倒されるか。それぐらいだろう。

しかし、こんな曖昧な説明じゃ納得しないであろう奴らが目の前にいる。

しかしこれ以上は言えないし、もうどうしたらいいか分からない。  
(あー、もう！ 誰か助けてくれ……)

そんな少年の心の叫びが通じたのか、鏡夜の席のすぐ近くにある教室後ろ側の扉が開いた。

そこから顔を出したのは。

「あ、いたいた。鏡夜くん。ちょっといいかな」

この騒動の原因になった東川璃子がそこにいた。

周囲から発せられていた敵意が、完全なる殺意へと変わるのを鏡夜は肌で感じていた。

額に冷や汗を浮かべながら、それでもぎこちない笑みで東川を見る。

「な、なにか用か？」

昨日までとはまた違った理由で緊張しながら言葉を発する。

しかし彼女は、鏡夜の周りを囲っている男達と、そんな少年の態度に気付いてないのか、とても明るい声で、

「え？ うん……大した用事じゃないんだけどね。その……今日の放課後さ、校門の前で待っていてくれないかな？ ちょっと話したい事があるんだよね」

なぜか頬を赤らめてもじもじし始めた彼女の、不幸少年を私刑にしようとしていた男数人が、鼻血を出して地面に倒れ付す。

「うわっ、男子汚ーい」

「汚したら自分で拭いてよー」

そんな事を言いながら、女子達は鏡夜達とは反対側の窓付近に固まり始めた。

しかし少年には、そんな情景を把握出来る脳みそがない。今それは活動停止中だ。

なにを言われたのか分からない。一緒に帰ろう的な意味が込められているのか、それともいきなり『秘密を知られたからには生かしてはおけぬ』とか言われるのか。

前者はまずありえないとして、後者は絶対に嫌だ。だとしたら、あら不思議。選択肢がなくなってしまうた。

「あれ？ おーい鏡夜くん聞こえてる？ おーい。おーい。……あ

れ？」

新藤鏡夜が今の言葉の真意を探り、思考の旅に出ていると、反応がない事を心配した東川が少年の顔を覗き込んでくる。

「鏡夜くん？ 聞いてる？ 大丈夫？」

その間近から漏れてくる甘い吐息。思考旅行から帰ってきた鏡夜だったが、今度はそれで頭がくらくらしてきた。

「えっと……私……無視されてる？」

なんか凄く悲しそうな声になった。その事に異様な反応を見せたのが怒り狂った男共だ。

彼らはいまだにくらくらしている鏡夜を立ち上がらせ、制服の胸倉を掴んで教室の窓側に連行していく。

東川は廊下側の扉にいたので、ちょうど反対側に位置していた。そこで少年がされた事は。

「てめえ、このタコ。東川にあんな反応させていいと思ってるのか！ ああ！？」

「ちょっと仲良くなったからって次は無視か！ ツンデレ方式でイチコロですかー、コノヤロー！！」

「お前、本当に一回でいいから地獄見て来い。いや、マジで」  
「鏡夜には愕然とした」

少年を囲んでいる輪から、マシンガンのような言葉が次々と発せられる。

次々と浴びせられる罵倒の嵐。しかしこんな事をされていても、少年が正気に戻ったのは数分後の事だった。

そんなこんなで放課後である。あの後、意識を取り戻した鏡夜に、東川は校門で待っていると言いつ残して去って行った。

半分浮かれ気分。半分悲しい気分を味わっていた鏡夜だったが、その複雑な気持ちがあつと終わりを告げる。

「東川になにかしたら八つ裂きにした後、魚の餌にしてやるからな」  
悲しい気分を存分に味わらせてくれたクラスメイト。その中でも、主犯格だと思われる男に対して鏡夜は言う。

「いい加減やめてくれ翔平。お前はなにか、こういう話題に関して  
は中二のノリですかあ、この野郎」

「お前が悪い。全面的にお前が悪い。社会的にお前が悪いと言われ  
なくても、このクラス いや学校全体でいえば、お前は悪魔だ。  
鬼だ。閻魔様だ」

「そこまで言うか、ちくしょおお！」

鞆を肩に引っ掛けて、鏡夜は猛スピードで走り去る。開けっ放し  
になっていた扉から廊下へと飛び出し、怒号や罵声の嵐の中、涙を  
こらえて玄関にたどりついた。

「なんで俺がこんな目に……」

今までは中心的存在ではなかったが、それでもある程度みんなと  
は仲が良かった。

しかし、女性が絡むとすぐにこれか。

暗いオーラを身に纏い、靴を履き替えて東川が待っていると  
言っていた校門の前に到着する。

どうやら、彼女はまだ来てないらしい。なにやら、黒塗りの怪し  
い車なら停まっているが、いきなり銃を持ったゴツイ兄ちゃんが出  
てくる事はないだろう。

そう信じたい。

本当に怪しい人物が出てこないかと何度も車をチラ見していた鏡  
夜だったが、それは意味のない行為だった。

東川が玄関から出て来るのが見えたからだ。

彼女はふわふわな髪を風になびかせながら、こちらに向かってゆ  
っくり歩いてくる。

(少しは走ってくれないかな……)

別に東川のゆっくりとした歩調にイラついているわけではない。  
少しでも早く、この味方がいない空間から出て行きたいのだ。

東川を待っているこの時間。このわずかな瞬間でも油断は出来な  
い。

いつ、どこから、なんらかの方法で攻撃されるかもしれない。

東川が家にいたという噂（真実なのだが）が流れただけで、あんな目に遭ったのだ。

これがもし、一緒に帰っている場所を奴らに目撃されたら、なにをされるか分からないの。

深刻なイジメが始まるかもしれないし、完全犯罪を企む知能犯が出てくるかもしれない。

そんなあまりにも有り得ない想像を繰り広げ、最後には山に埋められた所で、ようやく彼女がきた。

「ごめんね、鏡夜くん。待ってたよね。じゃあ、すぐに行こ？」

さつきまでの落ち着いていた雰囲気はどこに行ったのか、今の東川はどこか焦っていた。「行くつてどこに？」

こんな質問をした鏡夜に返答もせず、彼女は手を取って歩き始める。

「どこに行くんだよ」

東川に手を握られながら先導されている鏡夜は、内心少しドギマギしながらもそれを表に出さないように気をつけながら訊ねる。

しかし東川はニッコリとした笑みを鏡夜に浴びせかけると、

「すぐに分かるよ」

とだけ言つて、また前を向いてしまった。

仕方なく少年は手を引かれるまま歩いていく。

「……」

心なしか、なんだか黒塗りの怪しい車に近づいていつているような気がしてきた。

いや、これは絶対にヤクザが乗っているような黒光りの、前方に触覚をつければ家庭内害虫のように見えなくも無い移動手段に接近している。

（どっしりよっ……）

いっその事、彼女の温かい手を振り払って、一気に逃げてしまおうか。

いや、その瞬間に背中を撃たれるかもしれない。そして海にでも

捨てられてしまうのか。

そんなありもしないような想像を脳内でやっている少年だったが、天然少女の声で我に返る。

「鏡夜くん、大丈夫？　なんだか顔色悪いよ〜？　今日は止めて、明日にしようか？」

「あつ、いや、大丈夫だ。少し考えをしていただけだから」

こんな心配をしてくれる優しい女の子が、あんな恐ろしい事をするはずがない。

鏡夜はいままで妄想してきたものを頭を振って脳から弾き出す。

「こつちこつち」

東川に手を引かれて近づいたのは、やはりあの黒い車だった。

「え？　あ？　マジで？」

先ほど頭から追い出した考えがジェット機に乗って帰還してきた。

鏡夜は困惑しながら、東川は人のいい笑みを浮かべながら車の前に到着する。

すると、ガチャリ、と後部座席の扉が機械的に口を開けた。

「鏡夜くん？　ぼーっとしてるけど、大丈夫？」

顔をのぞき込みながらの問いかけに、少年は返答しなかった。いや、出来なかった。

その理由は運転席に座っている男が原因だ。

黒いサングラスにスーツ。オールバックにした金髪。それは、鏡夜が近付きたくないと思う人間像にピッタリだったのだ。

思考停止状態のくせつ毛少年を不思議そうに首を傾げながら見て

いた東川は、その視線の先にいる人物を知り、少しだけ息を吐いた。

「お兄ちゃん。やっぱりその格好止めたほうがいいよ？　鏡夜くんが怖がつてる」

お兄ちゃん。この言葉が放心状態に陥っている鏡夜の耳に届き、脳内で何回も繰り返される。

そして、オニイチャンと呼ばれた金髪サングラス男は、メガネを顔から外すと、

「はっはっはっ！ いやぁー悪い悪い。第一印象で舐められたら困ると思つてな」

意外にもサングラスを外した目は、とても穏やかで優しげな光を放っていた。

東川の兄という事も納得させられてしまつ。

東川兄は、おもむろに髪の毛に手をやり、ゆっくりとそれをずらす。

（禿げてるのか!?!）

鏡夜は大変失礼な事を考えながら、その行動を見守っていたのだが偽りの髪の下から出てきたのは、サラサラした栗色の髪。

髪を左から右に流し、前髪で右目を隠している。さっきまでの厳しい雰囲気はどこにいったのか、今では口元に微笑を携えていた。

（イケメンだ……）

東川が可愛いのだから、その肉親も顔立ちが整っているのは確率から考えても不思議な事ではないのだが、それでもやっぱりこの顔はズルいと思う。

同性の少年から見ても、この人はハンサムだったのだ。

イケメン兄は前髪を手でいじりながら、

「キミが新藤鏡夜だね。俺は璃子の兄で、東川 光輝<sup>コウキ</sup> よろしくね」  
妹同様、人懐っこい笑みを浮かべる。

「よ、よろしくお願いします」

新藤鏡夜はなぜか緊張してしまう。これほどの整った顔立ちには今まで出会った事はない。もしもと都会に住んでいたのなら芸能界にでもスカウトされていただろう。

「うーん？ まだ緊張しているみたいだね。俺のどこがいけないのかな？ 璃子、分かるか？」

光輝は前を向いていた体を座席にのしかかるようにして振り向き、後部座席の扉付近で固まっている鏡夜の顔と妹の顔を交互に見ている。

「うーんとね。たぶん、お兄ちゃんがナレナレしすぎるんじゃない

かな。初対面なんだから、もうちょっと距離を置いてもいいんじゃないかな？」

実際、ナレナレしくても全く問題ではない鏡夜だったが、本当の理由を言うのもなんだかおかしい気がするので、ここは東川の意見に同意を示すべく軽く頷いた。

そんな少年の行動を見ていた光輝は、少しだけ残念そうな表情を作り、また前を向いてしまう。

「そっかあ。俺はナレナレしいか。ごめんな、新藤くん。今度からは自粛するよ」

「あ、いや。なにもそこまで落ち込まなくても。……俺はそのくらいの態度でも、全然大丈夫ですから！」

さすがにここまで顔と声を聞いてしまっただけは、もうこう言うしかないだろう。

光輝の顔が夜空に浮かぶ満月のように輝きだした。

「本当か？ はっはっは。それは良かった。じゃあ、これからもこういう風に接していくよ！」

さっきまでの表情はどこにいったのだろうか。元氣瀉刺。この言葉が似合う笑顔を顔面に貼り付けていた。

「鏡夜くん。お兄ちゃんはどういう人だから、面倒だったら相手しなくてもいいよ？」

東川が横でボソツと呟く。

鏡夜が東川の言葉について本気で脳内会議をしていると、にこやかな笑顔を崩さずに光輝の、

「とりあえず移動しよう」

という言葉に同意した二人は、車に乗り込んだ。

鏡夜が運転席側の後部座席で、東川は助手席の後ろに座った。

二人が乗り、ドアが閉まった事を確認したハンサム青年は静かに発車させる。

鏡夜はやることもないのでバックミラー越しに小さくなっていく校舎を意味もなく眺めていたが、角を曲がってそれが見えなくなる

少し前に東川が口を開いた。

「そうだ。これから行く場所を鏡夜さんに教えてなかったよね？」

「うん？ あ、ああ。まだ聞いてないけど」

彼女の声に、ほとんど無意識で横を見た鏡夜は、少しだけでもった。

その理由というのも、

(うわぁ……可愛い笑顔だな)

というものだ。これは敵さえイチコロにできるんじゃないだろうか。

あの生意気な少女　この前、家を好き放題にボロボロにしていた美紀とかいう奴に、爪の垢を煎じて飲ませた方がいいのではないだろうか。

そうすれば、もうちょつとおしとやかになるはずだ。

鏡夜がそんな事を真剣に考えているせいで、返答がなかったことを気にしたのか東川の顔が若干曇る。

「大丈夫？ やっぱり、今日は止めた方がいいんじゃないかな。無理しなくてもいいよ」

東川の言葉に我に返った鏡夜は、短く大丈夫と返答してからさっきの話題に戻す。

「それで？ 俺をどこに連れて行くつもりなんだ？」

鏡夜がそう言うと、東川は軽く握った拳を手のひらにポンと落としながら、

「そうそう。えつとね、今から鏡夜くんには、私達が所属しているダウト東北支部と一緒に来てもらうんだ」

「だうと？ それって、英語のダウトか？ doubt。日本語で疑い、とかそんな感じの単語だよな？」

「うん、そうだよ。いや、鏡夜くんは物分りが早くて助かるよ」

「いや……褒めてくれるのはありがたいが、なんで……その、東北支部とかいうやつに、そんな意味の単語が使われてるんだ？」

「うん？ そんなの簡単だよ。鏡夜くんはさ、この前、襲撃された

時の事を覚えてるよね？」

「ああ、もちろんだ」

あんな衝撃が強いものを簡単に忘れられるほど、自分の脳みそ腐っていないと思う。

そんな事を考えている鏡夜の言葉に満足そうに頷いた東川は、人差し指だけを立てると少しだけ首を傾げて少年を見つめてくる。

「じゃあさ、その人は人間に見えたかな？」

「は？」

なんだこの質問は。あいつが人間に見えなくては、一体、なにを人間だと言えいいのか分からなくなってしまう。

「当たり前だろう。あれは俺達と同じ人間に見えた。少し頭が狂ってる事以外はな」

鏡夜はあの日の事を鮮明に思い出す事が出来る。

金髪に黒のメッシュが入っているオールバックの髪に、同色のロングコート。背が高く、眉毛が異様に太い変な奴。

東川はうんうんと頷くと、

「そういう事なんだよ、鏡夜くん」

「なにが？」

なんだか自己完結をしていた。これ以上説明する気はないのか、彼女は前の方を向いてしまった。

「あははは。仕方ないな璃子は。ちゃんと説明しないと、新藤くんだって分からないじゃないか」

そんな妹の発言を見かねたのか、光輝が運転をしながら補足説明をしてくれる。

「言ってしまうとね、新藤くんが出会った敵は、人間じゃない。人間の形をしているが、全く異なる存在。LV・3のキラーだ」

「LV・3？ キラー？ なんですか、それ」

この世界を知ってからだが、知らない単語が多すぎる。キラーとはそのままの意味でいいのだろうか。

「なに、簡単なことだよ。キラーはそのままの意味で、殺し屋。俺

達みたいな能力者を殺す事を生きがいに行っている、最低最悪なやつらだ」

光輝は俺達みたいな能力者と言った。ならば彼も、なんらかの能力があるのだろう。

「まあ、LV・3程度なら、よほど相性が悪くない限りは、一人でも勝てるよ」

LV3程度なら。

と、光輝は言った。つまりは、それ以上のレベルになってしまつと一人では太刀打ち出来ないという事だろう。

「そうだな」。レベルの事は後から詳しく教えるとして、今は本題に戻ろうか」

光輝は角を曲がるためにハンドルを捌きながら、

「新藤くんもさつき言つてたけど、あいつらは俺達、人間とは外見だけではなにも変わらない。だから、俺達　ダウトに所属している能力者は、護るべき一般人と、人外のやつらを判別出来ないんだ。だからこそ、ダウト。一般人を疑え。仲間さえ疑え。そういう意味を込めて、ダウトっていうんだ」

信用出来る者がいない。護っていたはずの民間人がいきなり攻撃を仕掛けてくることもある。

光輝はそう補足した。

「まあ、それでも俺達はさ、なにも知らない人達を護りたいんだよね。放つといたら、あいつらは人類を滅亡させるよ」

バックミラー越しに見えた光輝の顔は笑顔を保っていた。しかし、その微笑みにはどこか悲しげな色が浮かんでいる。

「そうなんですか……」

例えば、鏡夜が最初に襲われたあの路地裏での出来事。あれでさえ、無差別だったのだろう。

見境なしにあそこに誘い込まれて、ほとんどの人間が一度、命を落とした。

そこに現れたのが、自分の横でニコニコしながら鼻歌を口ずさん

でいる東川璃子なのだ。

(……ん?)

そこまで考えて、鏡夜の頭上に疑問符が浮かび上がった。

あの路地裏で襲われた時、確か敵は、実態の無い、影のようなものだったはず。

鏡夜はもう一度、東川の方を見る。すると、彼女は彼の視線に気付いたようで、こちらに顔だけを向けると、ニコツと向日葵のような笑みを浮かべた。

それはそれで、クラツとくるほど可愛いのだが、

(俺がなにを言いたいのか、全く理解出来てないんだろっな……)

彼女に目で訴えても無駄なのだろう。そう考えた鏡夜は、この場で一番説明してくれそうな、光輝に話しかける。

「光輝さん。俺が、その……最初にあいつらに襲われた時、なんか影のようなものだったと思うんですが。あいつらも、キラーとかいう奴と同種なんですか?」

話を振られた東川兄は、前方を見たまま、

「影? ……ああ、そいつはLV・1のシャドウだね。まあ、その辺も含めて、後から説明するよ」

「ああ、はい。分かりました」

今は運転に集中していたいのかも知れない。光輝はずっと前を向いたままだ。

(そう言えば)

運転席と助手席の間にある鏡越しに見える光輝の顔。彼はどうみても、鏡夜の一つ上か二つ上にしか見えない。

免許はもう既に取りっているのだろうか。いや、取っているに決まっている。そうでなければ運転などしないだろう。

鏡夜は「ふー」と息を吐いてから、座席に腰を沈めた。少しだけ眠くなってきた。

いつの間にか寝てしまっていたよう。新藤鏡夜が目を覚ますと、どこか薄暗い場所に車は停まっていた。

寝起き少年はボヤける視界の中、目を凝らして周りを見てみる。白線が等間隔に並んでおり、その間には一台ずつ車が納まっていた。

(地下駐車場か……)

確認して、今度は横を見てみる。後部座席に座っている東川が、幸せそうな顔をしながら寝ていた。

長いまつげが目を覆い隠すように伏せられ、形の良い唇からは吐息が漏れている。

その寝顔を見ていると、際限なく心拍数が上がっていきそうな気がしたので、鏡夜は慌てて視線を車外へと向ける。

すると、その先には光輝がいて、なぜか知らないが、いつもの人が良さそうな微笑みではなく、世話好きなおばさんが浮かべるような笑みを顔に貼り付けていた。

東川兄がコンコンと窓を軽く叩いてきたので、鏡夜はいつの間にか掛かっていた鍵を開けると、ゆっくりと扉を開いて外に出る。

一体、ここはどこで、その笑顔がなにを意味するのか。それを疑問に思っていた少年の耳元に、おばさん笑顔の青年は口を寄せてくると、

「男なら襲っちゃえよ」

「ぶっ!!!」

全く予想だにしていなかったその言葉に、鏡夜は思わず噴き出した。

会って間もない健全なる青少年になにを言い出すのだろうか、この人は。

「じよ、冗談言わないでください!!!」

これはあまりにも酷すぎる冗談だ。幼稚園児に、「このボタンを押すとお菓子が一杯出てくるよ」とか言いながら、核爆弾のスイッチを渡すくらい、笑えない冗談である。

鏡夜がさっきの言葉の意味をもう一度思い返してしまった。東川の方をまともに見る事が出来ない。体が火照ってきて、顔がかなり

熱くなってきた。

今、自分の顔を鏡でみたのなら、リンゴのように真っ赤なのは最早当然だろう。

しかし、そんな鏡夜の叫びに、少年を赤くした張本人は、「あれ？」などと言いながら首をかしげた。

「うーん。キミの反応とか見てると、妹の事を気にしてそんな感じだったから言ってみただけど……」

全く反省の色なしである。しかも、そんな態度を車の中ではそんなに見せた覚えが無い鏡夜の心情をサラツと見抜いた。

運転をしながら、そこまで自分を観察していたのだろうか。観察力が凄いのか、洞察力が長けているのか、それとも勘が鋭いのか。

そのどれにしても、彼の前ではよほど上手い嘘以外は通じそうに無い。安っぽい嘘なんて、すぐにバレそうだ。

兎にも角にもこの話題を避けたい鏡夜は、さつきから疑問に思っていた事を聞いてみる。

コホン、と軽く咳払いをした少年は周囲にせわしく視線を泳がしながら、

「ここはどこなんですか？ さつき言っていた、対抗支部とかの地下なんですか？」

鏡夜の疑問に、東川光輝はうんうんと頷くと、

「ああ、そうだよ。ようこそ、俺達の城へ。さあ、キミを王様の部屋に案内しようかな。……その前に。起きろ、璃子。着いたぞー」

光輝はにこやかな笑顔のまま車の中に入ると、後部座席で寝ている妹の頬をペシペシと叩く。

しかし東川は少しだけ顔をしかめたが、全く起きる気配がなかった。

だが、それから何秒もしつこく叩かれていたら流石に目を覚ます。彼女は寝ぼけ眼をうつすらと開けながら、兄の手をペシと払う。

「痛いからやめてよ〜」

若干姿勢を正し、東川はポーツとした表情で鏡夜の方を見ると、

カアアアツ。

急に大きな瞳を揺らし、目を大きく見開き、そして赤面する。

(なんだ、この反応……まさか……さっきの会話を聞かれたか?)  
もし聞かれたとしても、自分の本音を言っていたわけではないので別段焦る事はないのだが、それにしてもこの反応は気になる。

訊ねるのはとても恥ずかしいが、それでも聞かなければ気になつて集中出来そうも無い。

なので、鏡夜は大きく息を吸い込むと、

「さっきの話、聞いてたのか!？」

「え? あゝ……えっと……なんの話？」

「そんな笑顔で誤魔化そうとしてもそうはいかないぞ! 本当はどうなんだよ!」

「えっと……えっと……あ、あはははは」

この後、なにを聞いても彼女はずっと笑っていた。

なにを聞いても答えない東川と、それをニコニコ顔で見ている光輝。鏡夜はそんな連中と一緒に、ライトで照らされている地下駐車場を歩いていった。

「さて、今から俺達が行くのはさっきも言った通り、ダウト対抗支部だ。そして、そこから移動法を使って対抗本部へと行く」

鏡夜の前を歩いている光輝がハンサムスマイルのまま鏡夜に伝える。

「えーと……聞きたい事はたくさんあるんですが、それも含めて後で説明してくれるんですよね?」

正直、対抗本部とか移動法とか言われてもさっぱり分からない。分かっているのは、今いるこの地下駐車場の上には対抗支部があるくらいか。

光輝は言葉の代わりに首肯する。それだけだ。今は余計な事を言いたくないのかもしれない。

(いや……だけどなあ……)

本当になにを考えているのか分からない人だ。さっきはいきなり

変な事を言ってきたし、今は多くを語らない。

(悪い人じゃないのは分かるけど)

鏡夜は璃子を見る。あつちもこちらのほうを見ていたのか、一瞬だけ目が合ったが、すぐに逸らされてしまう。

ふわふわな髪に若干隠れてる耳が、少しだけ赤くなっているように思える。

鏡夜は俯いて一回だけ溜め息を吐いたが、前方を歩いていた光輝の足が止まったのをきっかけに顔を上げた。

「さあ、ようこそ。ダウト対抗支部へ。ここがその入り口だよ」

なんの変哲も無い自動ドア。それを光輝は指差していた。

その透明な機械扉の奥には狭いロビーと二台のエレベーターがあり、20まで表示されている階表示のBの所にランプが灯っていた。

「さあ、案内するよ」

光輝は歩いて自動ドア前まで歩いていき、扉が開くのを待つてから中に入った。鏡夜達もその後が続いてエレベーターのボタンを押して待っている彼の元に行く。

丸い鉄の箱に入った鏡夜は扉意外ガラス張りの壁から、地下駐車場が上がどうなっているのかを確認する事が出来た。

このエレベーターを円の中心とするならば、半径二十メートルほど離れた円周部分にはカーブを描いている廊下と手すり、その奥にはガラスの壁を挟んでオフィスのようなものが繋がっている。

どこもかしこも人が忙しそうに動き回っており、時折、大量の書類を持った人同士が衝突していた。

この建物の構造を分かりやすくいうのなら、巨大な円錐の中に小さな円錐が入っているようなものだろうか。

その小さな円錐の中を、エレベーターが上っているのだ。

鏡夜はガラスに張り付いて、上の方を見てみた。かなり遠い位置に天井があり、そこまではなにも障害がない。あの上に最上階があるのだろうか。

「すごいだろう」

「ええ、凄いですね」

なぜか自分の手柄を自慢するかのように胸を張って言う光輝に、鏡夜は素直な感想を述べた

よく見れば、廊下が螺旋階段のようになっていて、これを上つていっても最上階には着きそうだ。

そのままエレベーターに乗っていると、最上階に着いたのかそれまで動いていた機械が動きを止めてチーンという音と共に扉が左右に開いた。

まずは光輝が歩いて丸い箱から出ると、東川も続く。しかし鏡夜は、目の前に広がる光景に啞然としているため動くことを忘れていた。

そこは、よくゲームとかに出てくる城の謁見室のようなものがあったのだ。

広い室内には赤い絨毯が敷きつめられており、等間隔に地面から天井へと突き立っている丸い柱、その通路を真っ直ぐ歩いていくと、なにかでかい机が置いてあった。

そしてそこには誰かが後ろ向きで座っている。

「鏡夜くん。早く動かないと、扉閉まっちゃうよ?」

東川に言われて、鏡夜はやっと正気に戻ると同時に足を進めてエレベーターの外へと出た。

「すげえ……」

思わず漏れた声。鏡夜は普通の男子高校生だ。そして、もちろんゲームだって幾つかはやっている。

そのゲームの世界が現時になっているかのように錯覚を覚えてしまう光景には、興奮して当たり前といえば当たり前だろう。

まるで子供のように目を輝かせる少年に、東川はおかしそうに、ふふっ、と笑みを投げかけた。

「この用事が終わったら、この建物の中を案内してあげようか?」

東川はいたずらっぽく言った。

「マジで!? 行く行く!!! 約束だからな!？」

嬉しさと興奮のあまり声を張り上げながらの鏡夜は、知らず知らずのうちに東川の手を取ってぶんぶん振っている事に気づいていない。

まるで子供のように目を輝かせている鏡夜に、東川は困惑気味の笑みを浮かべた。

彼女はさりげなく少年の手を離すと、ふわふわパーマの髪を翻しながらくりりと回転して先に歩いていく。

そして鏡夜の方を振り返ることなく、

「ほら、早く行こ？ 見学する時間なくなっちゃうよ？」

「それもそうだな。早く終わらせなきゃ」

東川の言葉に頷いた少年は、彼女の後を着いていく。

向かっているのは一番奥にあるでかい机のようだ。その近くにはもう光輝が立っていて、椅子に腰掛けている人となにやら話していた。

（しかし。凄いなあ……）

エレベーターから、あの人物の元に行くには結構な距離があるような感じがする。

非常事態になったらどうやって逃げるつもりなのだろうか。あそこから鏡夜たちがいる場所までは、普通に考えて十秒以上かかる気がする。

（まあ、なんとかするんだろうな……）

さっきのはあくまでも、『普通』ということを前提にしているが、果たしてこの世界に常識は通じるのだろうか。

ここにくる前の車の中でも、もうすでに普通じゃなかった。鏡夜がいた世界と、新たに知ったこの世界の常識はイコールではない。

東川の後ろをくつつき、鏡夜は奥にまで来ていた。

そこには光輝と白髪の男性がいて、厳つい顔をしながら少年をみつめている。

(……なんだ?)

その、外見だけで判断すれば初老の男。そいつからは尋常じゃないほどの威圧感のようなものが発せられていて、鏡夜は無意識の内に唾を飲み込んでいた。

服装はピシツとしたスーツで、少しも着崩れした跡がない。

そして、これが妙だ。白くなってしまった髪を伸ばしている。少しいではなく、かなり。今は机に隠れて大部分が見えないが、それでも、軽く腰の辺りにまでは到達しているだろう。

長髪白髪のおじさんは優雅に立ち上がると、老眼鏡の奥に覗かせる瞳を細めた。

しょぼくれた印象なんてどこにもない。まだまだ現役の兵士のように鋭いものだった。

視線で人を射抜く。鏡夜は初めてこの言葉の意味を悟った。

こんな目で睨まれたら、そう思うのも仕方が無いだろう。

男性が光輝を横にどけて前に進み出してくる。歩き方にも老いなんてものは感じない。一体、こいつは何者なのだろうか。

そいつは鏡夜の前に来ると、立ち止まる。そしてその鷹のような眼光で少年を真正面から見据えると、

「キミが新藤鏡夜くんかな? 初めまして。私はヴァン＝アルセードと言います。以後、お見知りおきを」

と、渋い声で言ってきた。

アルセードと名乗った男は、鏡夜の頭からつま先までジロジロと眺め回すと、いきなり「うーん」と唸り始めた。

(なんだ……?)

少年が不思議がつっていると、アルセードは光輝の方を向いた。

「こんな貧弱そうな男で大丈夫なのかね?」

「あ、あははは。そんな事、俺に言われましても……」  
話を振られた光輝は苦笑した。

貧弱という言葉に少なからず精神的ダメージを受けていた鏡夜は、東川兄の体を見て、彼と同じ表情をするしかなかった。

鏡夜よりは肉付きがいいが、それでも細い部類に入るだろう。そして、いつも携えているスマイルのせいで、優男という印象を人々に与えているのは、もはや当然の事。

どこの国出身なのか皆目見当もつかない初老の男性は、その厳つい目を少し細めると、

「うむ。まあいいだろう。それでは、君には今から本部に行ってもらう。他の二人も案内役として一緒に行ってくれ」

長髪白髪の男はそう言うと、手をパンパンと二回叩いた。すると、どこからともなく黒いコートを羽織った人物が現れた。

鏡夜はそのいきなりの事態に驚き、目を丸くしていたのだが、他の三人は全く動じていない。

「この子達を頼むよ」

アルセードの言葉に、男か女かも分からないそいつは無言でコクリと頷いた。

(似てるな……)

前に家を直してくれたあの男に。必要最低限の事しか喋らないその姿が少しだぶって見える。

「では、こちらに」

黒いコートの人物　声からしておそらくは少女　は、鏡夜達に手招きをした。

その手も黒の長い袖で隠れているので、地肌さえも見えない。

(こんなに着て、暑くないのかよ……)

季節は春だが、今年はなんだかんだで結構暑いのだ。それなのに、こんなに長いコートを着て大丈夫なのだろうか。

その羽織っているものを外せば汗だくの表情を窺えるかもしれないが、そんな事をする勇氣なんて少年には無い。

鏡夜を含めた三人は、そんな人物の近くに歩いていく。横ではアルセードは厳しい目でそれを見送っていた。

「私に掴まって」

少年は肩に手を置いた。

それは柔らかくて、男のように硬くはない。むしろ少女のような感触だ。

その感触に少しドキドキしてしまう。それを多少まぎらわす意味も込めて、鏡夜は横で背中 of 辺りに手を置いてある東川に話しかける。

「なあ、これからどうやって本部とかいう場所に行くんだ？ この子に掴まっているだけで、なにか起こるのか？」

「うーんとね。この子はテレポートを使えるんだよ。それで、今からその能力を使って、本部に行くの。今の加奈ちゃんには話しかけないほうがいいよ。頭の中で場所を想像しにくくなっちゃうから」

(かな……？ この子の事かな)

鏡夜は黒衣を身に纏っている、自分の鼻の高さくらいの人間を見る。

(やっぱり、女の子だったんだ)

「準備完了。行きます」

加奈と呼ばれた少女の掛け声が聞こえたと思った瞬間には、周りの空間がグニヤリと歪む。

「おわっ！？ なんだこれ」

次に襲ってきたのは浮遊感だった。地面に足は着いているはずなのに、下にはなにもない感覚。

(ヤバイ。……吐きそう)

ぐるぐると世界が回転し、色んな景色が高速で横を通り過ぎて行く。

遊園地にあるコーヒーカープの乗り物を、超高速で回しているような感じだ。

もう、立っているのか座っているのか、どっちが右で左なのか、上下さえも分からなくなってきた。

(もう……駄目だ)

口を押さえ込み、胃の内容物を吐き出す準備をした所、高速で回転していた周囲が元の姿に戻ってきた。

全てが治まると、鏡夜はガクツと地面に膝を着く。

「はあ……はあ……」

「きよ、鏡夜くん、大丈夫？」

「あ、ああ」

汗が普通からは信じられないほどの勢いで頬を濡らしていた。

「あー、やっぱり初めての人にはキツイよな。悪い。もつとちゃんと言っておくべきだった」

「いえ、別に光輝さんが謝る事ではないですよ」

鏡夜は額の汗を袖で拭いながらゆっくりと立ち上がった。

（なんで他の人は平気なんだよ。慣れるものなのか？）

新藤鏡夜のみがふらふらとした足取りで進んでいく。加奈と呼ばれた少女はいつの間にかいなくなっていた。

今、少年達がいる場所は、ドームみたいな形をしたなにもない空間。窓すらもないのだ。

この場所に唯一あるものは、近くにある木製の扉だけ。

鏡夜は未だに世界が回っているような感覚を味わいながらも、なんとか東川光輝の方を見る。

「ここって、どこなんですか？」

「ここは本部の訓練場だよ。新藤くんも、ここで訓練するときがあるかもね。……それよりも、大丈夫かい？　すぐくフラフラしてるけど」

「あはは、大丈夫ですよ。しかし光輝さんは凄いなー。四人に分身できるんですね」

「重症だ……」

光輝が重々しく言葉を吐き、東川璃子は「あはは」と苦笑い。

ようやく視界が定まった頃には、扉の外に出ていた。

そして頭も回転を始める。疑問はさっきのテレポートなのだが、どうやって壁などをすり抜けたかというものだ。

主観としては、世界がぐるぐる回っているだけのように感じているのだが、客観的に見ればなにか違うのかもしれない。

(……もういいや。俺なんかが頭を悩ませても、科学的に証明するなんて無理に決まってる。考えるのは止めよう)

そう思い、この話題を頭から切り離す。

扉の外は半円のような形をした一本道だった。天井や床にはなにか壁画みたいなものが彫つてある。

小さな子供が描いたようなお日様マークが鏡夜の足元にあり、そこから反対側まで様々な絵が刻まれているようだ。

鏡夜は足元の絵をつま先でこすりながら、

「東川、これはなんなんだ？」

「この絵の事かな？ これはね、『メモリアル』っていう名前で、私達のご先祖様が残してくれた戦いの記録なんだ。ほら、絵の上には小さくて変な文字があるでしょ？」

「ああ、確かに。なんだろ、これ。日本語じゃない事は分かるけど、ミミズがのたくっているような……汚い字だな」

「ふふ。それはね、私達、ダウトに所属している人間にしか分からないように暗号化されているんだ。その文字は、『ポセイドン』って読むんだよ？」

「ポセイドン？ それって、あの神話に出てくるやつか？」

「うん、そうだよ。ギリシア神話に出てきた海洋の神様。三叉の矛を持っていて、ヒッポカムポスっていう馬に乗ってるね」

「なんで、その神様の名前と絵がここに？ だって、これは戦いの記録なんだろ？ ここにあるって事は……」

「鏡夜くんの想像通りだと思うよ。私達のご先祖様は、むかしむかしに、この神様と戦った事がある」

昔、神様と戦った事がある。東川はこの言葉を軽々しく言い放つたが、それはとてつもなく恐ろしい事だと思わないのだろうか。

(だって……神様なんだろ？ 人間如きが勝てるわけないじゃないか)

そう考える鏡夜だが、東川はさらに衝撃的な言葉を言ったのける。「ほら、こっちには冥界の王、ハデスがいるよ」

「はです？」

鏡夜は東川が立っている足元を見てみた。そこには厳つい顔した人間　というにはあまりにも肌が青紫色な生命体が描かれていた。

（ハデスとも戦ってたのか？　いや、ポセイドンにしるハデスにする、神話上の生き物にすぎない。そんなやつら戦っているなんて嘘だろ）

「ふふ、鏡夜くん混乱してるね。大丈夫だよ、後から分かりやすいように別の人が説明してくれるから」

「……そうか」

正直、今ならなにを言われても信じれそうにない。あの変な影のような生き物　シャドウと呼ばれていたはずだが、あれの存在なら目の当たりにしたのだから信じる他無い。

しかしハデスやポセイドンなら話は別だ。

あんな奴らが本当にいたとすると、とてもじゃないが人間が太刀打ちできる相手じゃない。

いくら不思議な能力を持っている人たちでも同じだろう。

その後も神話上に出てくる生き物の絵が描かれているが、進行方向に行くにつれて段々と見覚えがある生物へと変わっていった。

ライオンや虎、人間、犬、猫。等々。

普通にこの世界にでもいる動物達になってきた。

（ていうか、なんで人間が。いや、光輝さんが車の中で言ってたな人間と見分けがつかない敵もいるって）

鏡夜はその時の会話を思い出し、そしてもう一度、足元を見てみる。

（うーん。絵だからあまり分からないけど、そんなに似てるものなのかな？）

そんな事を考えながら歩いていると、前を歩いていた光輝がいきなり立ち止まる。

「ぶっ！」

余所見をしていた鏡夜は当然の如く彼に衝突して、鼻にダメージ

を負った。

「どうしたんですか、光輝さん」

「ん、いや別に。ちょっと考えてた」

それだけ言うと、光輝は再び歩き出す。

「？」

なにかあつたのだろうかと思い、少年は周りを見てみるが、なにもいないように思える。

(やっぱり、光輝さんが考える事は分からん)

歩く事一分。三人は扉の前に到着していた。

「開けるよ、新藤くん。迷子にならないようにね」

「なにを言ってるんですか光輝さん。迷子になるほど、俺は子供じゃないですよ」

「気をつけてね、鏡夜くん……」

「東川はなんでそんなに悲しそうな目で俺を見てくるの！？俺なにかした！？」

意味不明な二人の言葉に鏡夜混乱してしまう。

なぜか二人からの憐れみにも似た心配そうな視線を頂戴した鏡夜は、釈然としないまま扉が開かれるのを待っていた。

(いや、この二人は心配し過ぎだろう。大体、この歳で迷子とか、俺が幸運になるくらい有り得ないことだよ。はぁ……)

自分で思い、そして勝手にネガティブになっている少年には惜しめない視線が注がれたままだ。

その事に気付き、鏡夜は若干覚えてしまった怒りを抑えつげながら扉のノブを掴んだままこちらを見ている光輝に言う。

「光輝さん。いつまでそんな視線を送ってきているんですか。早く扉を開けて下さいよ」

「心配だけど仕方ないな。それじゃあ、今から開けるからさ、心の準備だけでもしてくれ。じゃないと、面食らうから」

「……分かりました」

(心の準備って言われてもな。なにに対して構えとけばいいのか分

かんないし。)

これ以上、話を続けても意味がない事を悟った鏡夜は表面上だけは承諾し、内心ではなにもしていなかった。

だからだろうか。光輝が扉を押し開けた瞬間に彼が言った通り、面食らってしまった。

「うわぁ」

まず真っ先に届いたのは音だった。工事現場の近くなってもんじゃない。

ジェット機の発射音と言っても過言ではない。

条件反射的に耳を手で塞いだけど、それでも鼓膜を振動させ続けていた。

扉一枚を隔てた向こうが、こんな騒音状態だったとは、さすがに予想出来ない。

(防音対策が万全なのかな?)

そんな事を考える余裕しか鏡夜にはなかった。

そして次は視覚が刺激された。

通勤ラッシュ時の電車のように込み合っている室内は、それでもサッカーグラウンド五個分以上の広さを誇っている。

それなのに。離島のようにあちこちに置かれている机の集団や、その間を忙しそうに動き回っている様々な国籍の人々のせいで熱気が充満している。

鏡夜は額に滲んできた汗を袖で拭いながら、さっきの二人の言葉を思い出していた。

(迷子になるなって……こういう事だったのか。確かに、これだけなら迷っても全く恥ずかしくない)

それほどまでに人々が混雑し、パソコンやらデスクやらが乱雑に置かれているのだ。

鏡夜はこの騒音にも全く動じていない東川と光輝を見て、不思議に思う。

今でも平衡感覚が狂ってしまうのではないかという音が鼓膜を刺

激し続けているのに、二人の顔は至って冷静だ。

鏡夜はこの音にも負けなくらいの声を張り上げながら、

「光輝さん！！　なんでそんなに平気そうなんですか？　俺はもう倒れそうなんですけどー！！」

「うん？　理由かい？　これはね、能力を使って耳と空気の間で薄い膜を張ってあるんだ。それが殆どの雑音を遮断してから聞こえてくるから、俺達は平気なわけ。新藤くんもその内出来るようになるって」

（その内じゃなくて、今すぐ出来るようになりたいんだけど……）  
もちろん、こんな少年の心の内は誰にも聞こえるわけでもなく、鏡夜は深々と溜め息を吐くしかなかった。

やかましい音の中を鏡夜を含めた三人は歩いていく。

しかし、人の波は全く引くことは無く、むしろ満ちてきているような錯覚に陥る。

すれ違ふ自分とは異なる国籍の人々。手に持っている大量の書類には、英語らしき文字がひしめきあっていた。

（しかし、凄いな……）

これほど様々な人種がいるのに、言葉の疎通には誰も苦勞していない。

何ヶ国語も習得している人たちばかりなのだろうか。

そんな考えを巡らせていると、前を歩いている東川璃子が首だけで振り返ってきた。

「この人達はね、私達のサポートをしてくれているの。色んな場所に出てきた敵の位置を正確に教えてくれたり、何体いるかとか、強さはどのくらいか、とかね」

なぜかこの喧騒の中でも、彼女は透き通るようにはっきりと聞こえる。これもなんらかの能力なのだろうか。

「へー、そうなんだ。じゃあ、この人たちには感謝しなくちゃいけないんだな」

「うん、そうだよ。なんてっ言ったって、私たちは皆の想いを受け

取ってるんだから」

「想い？ どういうことだ？」

「あっ、そっか。知らないもんね。えっとね、この人たちは『追跡者』って言うってね、シャドウとかに家族を殺された遺族の集まりなんだ」

「殺された……」

だからこんなにも一生懸命に動いていて、そんな人たちから東川は想いを受け取ってると言ったのか。

忙しそうに狭い道を走っていく人たちの邪魔にならないように歩き、鏡夜たちは出口らしき場所にたどり着いた。

「鏡夜くん。この先が会議室だよ。そこで偉い人の話を聞いてもらうから」

東川がどこか緊張した面持ちで、話しかけてくる。

偉い人に会うのだから緊張するのは当たり前だが、彼女のはそういった感情からくるものではないことが少年にはなんとなく分かった。

（なんとなく、だけどな）

「じゃあ、開けるよ」

光輝は鉄製の扉に手をかけ、軽く深呼吸を始める。

なんで開ける前なのにそんな準備みたいな事をしなくてはいけなのだろうか。

なにも事情を知らない鏡夜は首を傾げて事態が進むのを待つばかりである。

ギーー、と。錆び付いた音を出しながら扉は口を開ける。

中はさっきまでの場所とは違い、綺麗に整頓されている場所だった。

机が『口』のように並べられており、一辺にはいくつものパイプ椅子が納まっている。

そんな机と椅子だけの空間に、小さな液晶テレビが置かれていた。その脇には、これまた小さな女の子が立っていて、秘書のように

スーツに身を包んでいた。

「よかったー」

「ん？ なにがよかったんだ？」

「うっん、なんでもないよ。私の独り言」

「ふうん」

鏡夜と東川との会話が終わると、秘書っぽい子は一步踏み出してきた。

その、鏡夜の肩ぐらいまでしか身長がない女の子は、ツカツカと生意気にもハイヒールの音を鳴らしながらこちらに近付いてくる。

カツツとヒールの底を鳴らし、小さな少女は鏡夜の前に来る。

その、低い場所から見下ろされているような視線に、小心者である少年は萎縮させられた。

(こいつ……本当にお子様かよ。威圧感が半端ないぞ)

などと、その場の雰囲気の流れに流されそうな思考を抱き、なんだか冷や汗すら流れてきてしまった。

鏡夜は額に浮かぶ冷たい汗を指で弾きながら、見下してきている少女を見下ろす。

「ハッ」

「鼻で笑われた！？ どんだけ俺を下に見てるんだよー！！」

「冴えない顔してますですね、新藤様」

「言葉遣いが丁寧なだけに、余計に傷付くんですけどー！！」

「ハッ」

「だから、鼻で笑うなー！！」

なんなんだこの少女……と、鏡夜は頭を抱えて隣で傍観している東川兄妹に助けを求める。

そんな少年が出した助け舟に乗ってくれたのは、妹の東川璃子だった。

「あはは。その子はあどけない顔してるのに、毒舌だから気をつけた方がいいよ？」

「言うのが遅い」

なんかもう、ハートブレイクだ。この傷はちょっとやそつとじゃ治りそうにない。

「はいはい。おふぎはここまで。さつさと、本部長に合わせてくださいかな」

光輝はどこか苛ついていた。物事がさつさと進まない、腹が立つ性格なのだろうか。

「そうでございますね。それでは、東川光輝様と東川璃子様。それと犬さんはこちらに」

「俺は犬扱いなの？ ねえ、ちょっと泣きそうなんだけど」

手で顔を覆っている鏡夜と、他三名はこの空間に唯一ある小さな液晶テレビの前に来ていた。

少年は袖を少しだけ濡らしながらも、指と指の隙間からそれを見た。

（ここに偉い人が映るのか……？）

こういう状況では大体あそこに映るのだから、いきなり起動してもなんらおかしくはないし、驚きもしない。

だからその液晶画面をジッと見つめていた。ここで驚いたりしたら、さつきの少女に鼻で笑われてしまうから。

そのせいだろうか。

次の瞬間に起こった事は限りなく予想外だった。

「うおっ!?!」

ブウン、と。

机の中心にある空間。つまり、『口』のようになっている部分にいきなり映像が映し出されたからだ。

それはどうしようもなく立体映像で、今、流行りの3Dのように見える。

そして。

「ハッ」

「やっぱ鼻で笑われた！ というより、この小さな液晶テレビ意味ねーじゃん!?!」

ぬぐうおおー！ と、鏡夜は再び頭を抱える。小さな女の子にここまで腹が立ったのは初めてだった。  
（なんなの！？ なんなのこの子！？ なんでこんなに人を苛つかせるの事に長けてるの！！）  
くねくねくねくねー。少年がやり場のない怒りに身を捻らせる音だ。

その立体映像の人物は、ニット帽を目深にかぶっており顔はよく分からない。

服装は黒いパンツにワイシャツというものだ。

実態のない映像はその場でなぜか一回転する。そして軽く頷いた。

『へー。今日は新しい人がいるツスね。初めまして、新人くん』

「はあ……。初めまして」

声の質から考えるに、鏡夜とはそんなに年齢が離れてないようだ。偉い人にしては、喋り方が碎けている気がする。

（昔どこかで聴いた感じの声だな）

どこでかは分からないが。

『元気ないツスねー。まあ、いいや。それで？ 新人くんはここに

呼ばれた理由は聞いているのかな？』

「えーと、なんか非日常的な世界の説明みたいなことをしてくれると聞いてましたけど」

『そうそう。そんな感じツスよ。それとき、新人くんにはその後にある選択をもらうツス』

「選択？」

『そのへんは後で説明するツス。それじゃあ、早速説明するけど、いいツスカ？』

「お願いします」

映像だけの人物は手をパンパンと二回叩いた。すると部屋の電気が消え、光源は空間に映し出されているものだけになった。

カチツ、と。

なにかのスイッチが入るような音が微かにした。

そして、今度こそ、あの小さなテレビが起動する。

(ここで使うものだったんだ)

黒い液晶画面が一瞬だけ砂嵐のようなものを映し、背景が全て真っ白になる。

『あ、そうだ。新人くんは、どこまでの説明を聞いてるツスか?』

「えーと、シャドウとかいうやつらがいて、そいつらが人間を殺しているとか。後は身に着けている道具のこととかですかね」

『シャドウが人を殺している理由は? そいつらが作り出している異空間は? 身に着けている道具の効果は? シャドウの階級は? 能力については?』

「え? あ、いや、その。その辺はまだ聞いてないです」

そんなに一辺に言われても分からないことだらけで脳が混乱してくる。

鏡夜は頬をポリポリと掻きながら、

「その辺を教えてくださいませんか?」

『そうツス。ううん。それにしても余り事情に詳しくないみたいツスね。まあ、そっちの方が教えがいがあるツスけどね』

立体映像人物が手を叩いた。小さな秘書みたいな少女が、これまで小さな液晶テレビをいじくり画面に絵を浮かばせる。

その画像は、黒い影のような人型をしていた。

鏡夜が路地裏で初めて見て、久し振りに死というものを体感させてくれた憎き『シャドウ』という物体だ。

『こいつの名前は知ってるツスよね』

「シャドウっていう名前でしたよね」

『そうツス。まあ、こいつは大して強くないんで、特徴だけを説明するツスね。あまり頭はよくない種類ツス。こいつらの特徴はそれだけツス。さて、こいつらだけではなく、全部の敵に共通する特徴なんすけど、戦う時には「サーチレス」という異空間を作り出す事ツスね』

「サーチレス? どういう意味ですか?」

その英単語っぽいものから大体の想像はつく。しかし、間違っている場合もゼロではないので一応訊いてみる。

ニット帽を被ったその男は、帽子のふちを左手で軽く掴んで更に目深にした。

『サーチレスっていうのはツスね、こつち側からの索敵を困難にするためと、人間をその場所から逃げ出させないようにするための異空間ツス』

「……ああ」

そう言われて、鏡夜には思い当たる節がある。

初めてこの世界には自分が住んでいる場所とは違う世界が存在すると、否応なく、強制的に理解させられたあの日。

シャドウとかいう化け物に初遭遇した時に、なぜか路地裏から逃げ出せなくなっていた。

それは見えない壁のようなものが逃走を阻んでいたためなのだが、もしかしたらあれが『サーチレス』という異空間の壁だったのかもしれない。

一人で納得した表情を浮かべていた少年を見た偉い人 名前を聞いてない は、口元だけを緩ませた。

『どうやら分かったようツスね。まあ、新人くんもこの本部に来た時点で、一度は体験しているのは確定してるツスからね』

(この本部に来た時点で、あんな体験をしている事は確定している……？ どういうことだ。まさか、ここにいる全員が俺と似たようなもんなのか?)

思考はそこだけに留めておき、鏡夜は話を先に促す。

「それで？ その……サーチレスっていう異空間？ には索敵しにくくしたり、人間を逃走させないようすとかの他に、なにか効果あるんですか？」

自分で言ってもなにがなんだが分からない単語ばかりだが、そこは後回しにして話を聞いたほうがいいだろう。

ニット帽の人物は、ふむふむと何度か頷いた後、再び口を開く。

『いやー、なかなか物分かりが速くて助かるツス。ええ、ええ、他にも効果はあるツスよ。例えば、我々や連中はあの中じゃなきゃ能力を使えないとか、サーチレスの中にいると、その人物たちの存在感が限りなくゼロになるとか』

「存在感がなくなる？」

それは以前どこかで聞いたことがある。

（そうだ。あの変な男と生意気女が俺の家をボロボロに破壊していったあの日に、東川から説明されたっけ）

あの時の騒ぎが公にならない理由は、自分たちの存在感が草一本や石と同じになっっているから。

彼女からはそんな説明を聞かされた。

（あの時はなんらかの能力だと思ったけど、そうか。サーチレスとかいうものが関係していたのか。……ん？）

そこまで考えて、不思議な疑問に突き当たる。

あの時もサーチレスが展開されていたのなら、鏡夜自身も異空間の中にいたはずだ。

（でも、俺は家から逃げ出せたし……。あの中にいたら逃げられないんじゃないのか？）

さすがにこの疑問を野放しになどしておけない。鏡夜はここで質問をする。

「あの……俺は、変な男に襲撃された時、家から百メートル以上離れた場所にまで逃げたんですけど、そのサーチレスとかいう異空間って、効果範囲はどのくらいなんですか？」

『効果範囲はそんなにでかくないツスよ。最大でも三十メートルがいいとこツス。でも……そうツスカ。新人くんが言うとおりならば、無意識の内にサーチレスから脱出していったって事になるツスね』

「そんな事が可能なんですか？」

『可能性はあるツスね。サーチレスには、小さい穴が空いてるツス。この本部にいる「追跡者」のメンバーは、そこからわずかに漏れ出す気配を感じ取って、我々、能力者に教えてくれるツスが……』

「そこから、外に出られる場合もある、ていう事ですか？」

『そうツス』

さつきから説明してくれているニット帽の人は、微かに口元を歪めた。

顔全体が見えないので、どういった表情をしているのか分からないが、腑に落ちないという感じだろうか。

それに対して鏡夜は不審に思ったが、訊いてもいいのかどうか分からないので、とりあえず黙っておいた。

『まあ、この話はまた後で。さて、次はあいつらがなぜ人を襲うのか、ということの説明するツス』

「……はあ、お願いします」

立体映像がジジツと微かに揺れた。偉い人は更に話を続ける。

『なぜあいつらが人を襲うのか。それは感情が欲しいからツス』

「感情……ですか？」

『そうツス。あいつらは人が持っている喜怒哀楽、その他諸々の感情に反応して人間を襲撃し、命と一緒にそれらを奪っていくツス』

「……喜怒哀楽」

初めて敵に襲われた時、あの路地裏には不安や焦燥が溢れていた。そして化け物が現れた瞬間に戸惑いや悲しみ、恐怖へと移り変わっていた。

自分達である路地裏にまで誘導して、巻き込まれた人々の感情に反応して襲いかかった。

そう考えると、確かに納得がいく。

「……でも、なんであいつらは感情が欲しいんですか？ そんなもの集めてなんの意味があるんです？」

『それが分からないツス。なんで欲しいんですかね？ 集めてなんの意味があるんですかね？』

立体映像だけの人物は何度も首を傾げた。今の言葉には嘘がないようだ。

（そこが一番大事な場所なのに、なんで調べておかないんだよ。敵

を倒す前に聞き出せばいいじゃないか)

そんな不満は思っただけで、口には出さない。ここでこんな発言をしてしまったら、どんな言葉が返ってくるのか、少しは興味があるが、どうせ上手くはぐらかされるのがオチだ。

『……まあ、分からないなら分からないなりに、自分達はちゃんとして調べたツスよ?』

「え?」

『新人くんが思っているみたいに、自分たちはちゃんと調べたツス。敵を倒す前に、なるべく情報を集めたツスよ』

決して声には出していない。なのに、この人物は鏡夜が思っていた事そのものをズバリ言い当てた。

(なんで心が読まれているんだ? まさか、読心術でも使えるのか?)

映像人物は、さっきまで放っていた馴れ馴れしい雰囲気を相手を威嚇する時に使いそうなものへと変化させる。

鏡夜のなんにも考えずに思ったことが、彼のプライドを傷つけてしまったのかもしれない。

『で、ちゃんと情報収集していたわけなんすが、どうも連中が言っている事が統一されていなんす。ある敵は、衝動的に襲った。ある敵は、美味しそうだったから。ある敵は、完全な存在になりたかったから。どうツスカ? これだけバラバラだったら、纏めてもなんら意味がないツスよね?』

「そう……ですね」

その雰囲気に少年は圧倒され、萎縮させられる。

(なんだ、この人。何者なんだよ。つーか、まだ心が読めるかどうかの正否を聞いてないし! ……いや、言ってないけどさ。心が読めるんなら解答してくれてもよくね?)

そんなどうでもいい事をわりと真剣に考え込んでいた鏡夜だったが、あの人物の雰囲気が以前のような親しみやすいものへと変わったのを敏感に感じ取った。

「まあ、この辺はまだ分かっていない事だらけツス。だから、これから判明させるように頑張るツス！」

「は、はあ……」

こんな感じなのに、さっきの雰囲気のせいで未だに萎縮しているような感じの少年。

しかしニット帽の人は、そんな事を気にも留めず話を続けた。

「んーと、これで異空間の説明となぜ人を殺すの説明が終わったツスね。それじゃあ次は、シャドウの階級を教えていくツス。今、新人くんの目の前にある小型テレビに映っている黒い影のようなもの。そいつはLV・1の「シャドウ」ツス」

「ああ、はい。それは知ってます」

鏡夜は画面中を所狭しと動き回る奇妙な物体を目で追いながら、以前、東川から聞かされていたことを思い出していた。

「そうツスか。それじゃ」

映像の人物が手をパンと叩く。すると、シャドウと呼ばれていた物体がクネクネとダンスを踊るように回転し、初めはゆっくりだったのが目で追えなくなる位に高速回転する。

回転の速度が上がると共にシャドウは細い糸のようになっていき、画面上部へと伸びていく。

「こいつはどうツスか？」

次に画面上に出てきたのは、シャドウと呼ばれていた化け物よりも顔などのパーツが鮮明になっているものだった。

影ではなく、良く見れば身体的特徴も分かる。シャドウのようにクネクネはしていなく、普通の人間のように真っ直ぐ歩いていた。

「こいつはLV・2の「ネオ」と呼ばれているツス。シャドウの進化版って言ったところツスカね」

「へー……」

シャドウよりは鮮明になっているが、それでも普通の人間とは見分けがつく。このくらいなら、敵と味方を間違える心配はなさそうなのだが。

『こいつは大した問題じゃないツス。シャドウよりも能力的には弱くなっているし、身体能力も我々とそんなに変わらないツス』  
「なるほどなるほど」

と、適当に相槌を打ちつつ、熱心に液晶画面を見つめる鏡夜。

『ただ、一つだけ問題を上げるとしたら、この段階になるには、軽く百人の人間の殺し、その感情や魂を奪っている、という場所ツスカね』

「百人!？」

それは確かに大問題だ。この人物のように気軽に言うのは憚れるというもの。

一般人にはそんなにたくさん人間が殺されていると分かれれば、例え全員と関わりがなくとも驚くだろう。

本部だがなんだか知らないが、こんな世界に足を突っ込んでいる時点で人の生死に関心が薄くなっているのかもしれない。

そうでもしなければ、精神が持たないのだろうか。

鏡夜はもう一度、ディスプレイに映っている『ネオ』と呼ばれていた物体を凝視する。

『シャドウ』は影が動いていると錯覚するほど真っ黒だが、ネオは顔のパーツなどが少し判別出来るぐらいになっている。

画面上で見える限りは動きもしっかりしているようだし、服などを着て、顔を包帯で覆ったら重体患者のように見える可能性もある。

(……こんな奴が百人もの命を奪ったってのか)

体の底からなにか、黒い感情がふつふつと沸き上がってくるのを感じるが、それを抑える事はしない。

この感情が、なぜかとても大切なものだと感じられたらからだ。もちろん、世間一般的に考えれば、これがとても非常識な事だと分かっている。

分かっただけでも、抑える事はしない。

『? 新人くん。どうしたツスカ』

「いえ、なんでもないです」

変な顔にでもなっていたのだろうか。相手が怪訝な顔をしながら、こちらを見てきていた。

鏡夜は急いで愛想笑いを浮かべ、話を続けるように促した。向こうはそれ以上に言及してこなかった。そこまで聞きたい事ではないと思われたのか、それとも疑惑の読心術を使ったのか。

どちらにしても、少年は安堵の息を吐いた。

『それじゃあ、LV・3の説明に移るッス』

映像人物は再び手をパンと叩いた。先ほどのシャドウのように、ネオが高速回転を始めどんどん細かい糸のようになって画面上部へと消えていく。

変わりに出てきたのは、太い眉に小さな目。とてもアンバランスな顔立ちになっている男だった。

(……こいつ。俺の部屋に乱入してきた奴とそっくりじゃないか)

LV・3というものは、全員こんな顔なのだろうか。そもそも、今までのレベルとは比べ物にならないくらい、人間にそっくりだ。

実際、あいつが部屋で暴れまわっていた時には、変な能力はあるがただの人間だと思っていた。

それが、シャドウの進化系みたいなものだったな。

『ちなみに、この顔は、最近この街に現れた奴ッス。LV・3にしては結構有名な奴で、通り名みたいなものもついてるッスよ』

『通り名?』

『そうッス。それを持っているやつは敵から畏怖され、味方からは尊敬される。言わば勲章のようなものッスカね』

『そいつのそれはなんていうんですか?』

『黒炎の破壊者。黒い炎を撒き散らし、あらゆるものを破壊する。』

それが名の由来ッスね。いやあ、LV・3のキラーにしては、中々どうして強いッス。でも、そのレベルにしてはなんで、君の近くに  
いる東川璃子や東川光輝なら倒せるはずッス』

相性の問題もあるッスからね、と最後にそう付け足した。

相性の問題もある。それが引つかかった。

このディスプレイに表示されている男は、あの美紀とかいう少女と戦っていた。

その時、外にいた鏡夜にはなにが起こっていたのかさっぱり分からないが、男の方が撤退したように見えたのだ。

しかし中に入ってみれば、美紀は倒れていた。なにが起こったのだろうか。

相性の問題。それが悪くてなんとか撤退させる事に成功したのか、それとも、圧倒しようとしてフルパワーで戦い力尽きたのか。

(今、考える事じゃないか……)

頭を振って考えを中断させる。

「それで？ そのLV3とかいう奴にはなにかレベル低い化け物との相違点でもあるんですか？」

鏡夜がそう聞くと、目の前の人物は両手をパンと合わせた。

『その通りッス。やっぱり話が早くて助かるッス！！ こいつと今までの奴らで違う場所は、異空間 サーチレス以外の場所にも、三十分だけ出没する事が出来るッスよ。ただし、能力は使用出来ないッスよ。まあ、いつでもサーチレスを作り出せるのだから、あまり安心出来ないッスけどね』

「はぁー……と深い溜め息を吐く。

「なるほど。能力も強力になっているんですか？」

『そうッスね。大体、五段階評価で三くらいっすかね。例えば、炎系の能力の場合は、家を一瞬で灰にするくらいは出来るッス』

その言葉を聞いて、背筋を寒いものが通り過ぎて行った。

寒気を覚えた新藤鏡夜とは対照的に、そのほかの人物は顔色を崩さない。やはり慣れてしまっているのだろうか。

『この化け物には、他にLV・4、LV・5といるんですが、こいつらはそんなに出現率が高くないので大丈夫ッス。一年に一回、遭うか遭わないかって感じすね。あつ、ちなみに、LV・3はキラートと呼ばれてるッス』

「はぁ、なるほど」

いまいち分かっている感じがの声をだし、それでもなんとか理解しようとして今まで聞いた全てのものを頭の中で転がし、整理する。

異空間、シャドウ、ネオ、キラ、人間殺し、その理由。

よくもまあ、ここまでの情報を一般人に教えたものだ。

(……いや、ここまでの情報を教えたなら、どうなる？ もう引き返せないのは聞かなくても一緒だった。だけど、ここまで教えてどうする。俺はまだ一般人だぞ？)

そこまで考えて、このファンタジーな話を聞く前に、ニット帽の男が言っていたことを思い出す。

『ある選択をしてもらう』

(その選択って……まさか)

映画やアニメなどの世界では、こうだった場合はどうなるか。

もしかしたら、仲間にならないか？ ならないのだったら死んでもらう。

(いや……まさか、そんな最悪な事になるんだったら、東川が俺をここまで連れてくるとは思えないし)

そう考え、彼女の方をチロツと少し脅えた瞳で見つめる。

その視線に気付いた東川は、にへらへら、と頬をほころばせた。

(なにが言いたいのかさっぱり理解してないんだろっな……)

『それじゃ、新人くんには選択してもらおうッス』

「……どんな内容ですか？」

さっき想像していた通りだったらどうしようとか思っていたのだが、それは、こんな人の目がある場所でそんな凶行に及ぶはずかないかという考えに消された。

ニット帽をかぶった映像人物は頬を緩め、和やかな、口調で言う。『簡単な事ッス。今から言う二つの選択肢から選んでもらえばいいッスよ。まず一つ目は、我々の仲間になり、命を賭けてまで一般市民を守る。二つ目は、今ここで起きた事、聞いた事を全て忘れて、また平凡な日常に戻るか。あっ、もちろん、二番目を選んだ場合は、こっちの方で記憶を全て消去させてもらおうッス』

「……」

鏡夜はしばしの間、悩んでいた。

普通に考えたら、ここは二番を選ぶだろう。

新藤鏡夜は只の一般人だ。名前も知らない赤の他人のために自らの命を賭けるだなんて、あまりにも馬鹿げている。

見ず知らずの人を、自分を死地に追いやつても助けようという、熱血漢的な性格など生憎、持ち合わせていない。

それは当たり前だ。だって、彼は、漫画や小説に出てくるようなヒーローではない。

普通に怖がりで、普通に臆病で、普通に自分を大事にしている。

誰だって二番を選択する。それは普通であり当たり前だ。

しかし、鏡夜には

「俺は一つ目を選びます」

そんな当たり前前の感情に逆らつても、一番を選ぶ理由が存在する。

鏡夜の答えは、その場にいた殆どの人間を驚かせた。

自分たちは鏡夜よりも先に、この道を歩む事を決めたというのに、なにをそんなに驚くことがあるのだろうか。

殆ど、ということとは、もちろん全員ではない。

少なくとも、さっきまで少年に説明をしていたニット帽の人物は驚いた様子もなく、ウンウンと一人で頷いていた。

「やっぱりこの道を選んだツスねえ」

などと小さな声で呟いていた偉い人は、

「じゃあ、後任せるツス」

と言つて、消えてしまった。

立体映像が消失し、この会議室に静かな時が流れた。

(なんで、みんな黙ってるんだ?)

この静寂の意味が分からない。

誰でもいいから言葉を発してくれー！ という鏡夜の心の叫びが伝わったのかは全くの謎だが、東川璃子が真剣な面もちで一歩前に

進み、靴の底を鳴らす事によって静けさを破った。

「ここまで連れてきた私が言うのもなんだけど、鏡夜くんは本当にいいの？ 死んじゃうかもしれないんだよ？」

いつもの笑みはなく、いつもの間延びした声でもない。

心の底から自分の事を心配してくれている。

それはとても嬉しいことだし、喜ばしいことだ。

しかし、鏡夜は決めてしまった。なにも、今、決断したわけじゃない。

何年か昔にも、そしてつい最近も。逃げないと誓っていた。あいつの情報が得られるのならば、自分の命を危機に晒すことも厭わない。

だから、

「本当にこれでいいんだ」

少年はもう迷わない。

さっきまで空気だった秘書のような少女は、カツッとヒールの底を鳴らしながら一歩前に踏み出した。

「さてさて、それではこれからの対応について話していきますね、

お猿さん」

「俺の事がー！」

せっかくカツコつけたのが、今の言葉のせいで台無しになってしまった。その事に対する憤りは大して感じていないが。

(それでも、猿はないんじゃないの)

と、目の前にいる毒舌生意気ハイヒール少女には言わない。言ったら、どこまで精神的に追いつめられるか分かったもんじゃないからだ。

「さて、なにか言いたい事があるような顔をしていますか……なに  
か？」

「いや、なにも」

「そうですね。それでは説明に入りますです。まず、あなたが一番大切にしている道具……または御守り、いえ、やっぱり一番大事に

しているものを今は持っていますか？」

「？ いや、自宅にあるけど。あまり壊したくないからね」

「そうですか。やはり使えない男なのですね。大事な物なんだから、肌身離さず持っておきなさいなのですよー。ああ、その大事な物は、明日にでもここに持ってきて下さい。今後、今までよりも更に大切になるでしょうね」

「分かったけど……それになにかするの？」

「いえ、大丈夫ですよ。壊すような事はしないのです。ちょっとこちらで手を加えるだけです」

「ちょっと手を加える……？ あの、そういった事は止めてくれな  
いかな」

「なぜなのですか？」

「それはやっぱり大切なものだから」

「ぐだぐだ言っていないで、ちゃんと持って来るのです、ばーか」

「殴ってもいい？」

「殴ってもいいと思わず言ってしまったが、ここでその通りにしてはどうしても大人げない。」

だからここは我慢して、湧き上がってくる怒りを呑み込む。

「……ふう。いや、分かった。持ってくるよ。持ってくればいいんだろ。持ってきてやるよ。持って来させれば？」

「はい、それでは明日お願いしますです。それで、次なんですが…

…」

そこまで言いかけると、少女はスーツの内ポケットから震えている携帯を取り出した。

「それでは今日はここまでで。私も少し用事が入ってしまいましたので。帰ってもらって結構なのです。また明日、東川様と一緒に、ここにお越しください。それでは」

少女はそれだけ言うと、カツカツと歩いてこの部屋から出て行ってしまった。

「……」

いまいち状況が呑み込めないが、それでももう帰ってもいいと言  
うのなら、今すぐにも帰宅して寝たい。今日は色んな事があり  
過ぎて、疲れてしまった。

「じゃあ、鏡夜くん、行こうか」

東川がさっきまでの深刻な顔をどこにやったのか、いつも見せて  
いるだらしない緊張感が欠けている笑みを浮かべながら、さらに  
一歩、鏡夜に近づいてきた。

「行くってどこに？」

手を伸ばせば簡単に顔に触れられる距離。その事を意識してしま  
った思春期の少年は、身を強張らせる。

「もう、約束忘れちゃった？ 終わったら、さっきの支部を案内し  
てあげるって言ったよね？」

「……あー、確かに約束してたけど、今は疲れてそれどころか……」

「よーし、まずは支部に戻ろう！ それからゆっくり案内してあげ  
るからね？」

「え？ いや、ちょっと。俺はもう帰りたいんだ」

そんな事を言っている少年を清々しく東川は無視して、その細い  
腕で鏡夜を引きずっていった。

## 初めての実践

東川と支部探索という、鏡夜にしてはドツキドキな体験をした次の日。

その時の余韻を引きずりながら下校していると、目の前に例の黒塗りの車が斜めに突っ込んできた。

それはまるで少年の行く手を阻むかのように横たわり、鏡夜以外の通行人からも注目を浴びている。

「……光輝さんですか？」

なんとなくその名が浮かんだので、口に出してみた。すると、反対側にある運転席から昨日会ったばかりの人物が顔を出した。

「いやー、はははは。すまないな、新藤くん。ちよつとばかり眠たくて運転が乱暴になってしまった」

「……はあ」

これはどういった反応を示せばいいのだろうか。

一歩間違えれば殺人犯である東川兄をちよつとだけ責めてみるべきか、それとも睡眠不足になるまで働かせたダウトとかいう組織を責めるべきか。

「えーと、なんの用ですか？」

「うん？ キミを迎えに来たに決まってるじゃないか。さあ、行くぞ」

「え？ いや、ちよつと待って下さい。俺はこれから家に帰って宿題をやらなきゃいけない……」

「さあ、レッツゴーだ！！」

「人の話を聞いてください！！」

昨日、帰ろうとした鏡夜を強引に連れ回した東川妹と、この兄が少しだけ重なってきた。

ここは、少しだけ強引な所があるとても思っておこうか。

半強制的に車内の後部座席に詰め込まれた鏡夜は、目的地がなんとなく分かっていたので、ついでに用事も済ませようと思っていた。学校の中では東川を見つucker事が出来ずに、どうやってもう一度あの本部に行こうかと考えていたのだが、これで手間が省けた。

鏡夜は、運転をしながらもハンサムスマイルを崩さない光輝に話しかける。

「あの、すみません。今から行く場所は本部ですよね？ だったら、一度、俺の家に向かってもらってもいいですか？」

「ん？ なんで？」

「いえ、昨日言われたじゃないですか。大事なものを持って来いって。俺は今、その大事なものを持ってないんです。もし手ぶらであればそこに行ったら、あいつになんて言われるか……想像もしたくないです」

「あつはははは。そうだね、分かった。じゃあ、新藤くんの家を教えて貰ってもいいかな？」

「ええ」

後部座席から指示を出しつつ、自分の家への道のりを光輝に教えていく。

そんな状態が数分だけ続くと、鏡夜のボロアパートが見えてきた。アパートの駐車場に車を停めてもら、光輝を車に待たせたまま自分だけ部屋へと向かう。

（それにしても大事なもの、ねえ……）

出来れば家の中から持ち出したくはなかったのだが、持っていかなければなにをされるか分かったもんじゃない。

だから、仕方がなくあれを取りに行く。

置いといたはずの場所になく、何分かがかかってやっと見つけたものを懐にしまい、光輝が待っている車へと戻った。

「すみません、お待たせしました」

「遅い……」

「うおっ！？ なんでお前が……」

謝りながら後部座席に繋がる扉を開けた所、いつかの生意気大暴れ少女が反対側に座っているではないか。

しかも、いきなり怒鳴られた。

「たくつ、なんでそんなにトロイのよ」

「お前にそんな事言われたくないけどね」

お互いに憎まれ口を叩きながら、鏡夜は美紀とか呼ばれていた少女の横に座った。しかし、

「なんで横に座るのよ!! 前にいきなさい、前に」

「はあ? なんでそんな事しなくちゃいけないんだよ。やだよ、もう座っちまったし。……もしかして、照れてるのか?」

「気持ち悪い事を言うのはこの口かしら?」

なぜか、少女の胸元が光り、人差し指の先端に小さな炎が点っていた。

「あ、あつつれえええええ? 確か、サーチレスとかいう異空間の外じゃ、能力を使えなかつたはずじゃなかつたっけ?」

「あたしは特別に使えるのよ?」

にこにこ笑顔の少女、しかし東川のそれとは雲泥の差……いや、天国と地獄くらい違うものを顔に浮かべながら、その指を近づけてくる。

鏡夜は冷汗をだらだら流しながら、それでも目は迫ってくる炎に釘付けにされている。

「光輝さん……助けてください」

「ごめんね。今、俺、運転中だからさ」

「まだ動いてないじゃないですか!? いいから、早く助けて下さい!!!」

結局、いきなり現れて鏡夜を傷つけようとした少女は、運転席から宥めてくる光輝の声に耳を貸し、少年抹殺計画を中断してくれた。

車が動き出し、さっきまで流れて来ていた尋常ではない汗も収まってきた所で、鏡夜は光輝に尋ねてみた。

「なんで、この女がここにいますか？」

「うーん……さっき近くを通っていたのを見たからさ、声を掛けたんだ。どうせ、後から迎えに行く予定だったからね」

「なるほど、横の奴痛っ！！ 蹴るなや！！ この女も最初からあそこに行く予定だったんですね？」

「その通り。なんかさ、新藤くんと一緒に、前原くんも一緒に連れて来いってというのが、今日の任務なわけ。なんでだろうな」

「さあ？ 痛っ！！ だから蹴るな！！」

なぜかふくらはぎら辺を集中的に狙ってきている少女は、さっきの事をまだ根に持っているようだ。待たせたのはそんなに癪に障ったのだろうか。

(どうでもいいけどね)

車道の外を眺め、なるべく横にいる女の子を視界に入れないようにする。

東川とはまた違った意味でドキドキをくれる娘だな、となんとなく思ってしまった。

数十分車は走り続けた。

そしてようやく見えてきた昨日、東川と探索しまくった支部。昨日来る時は寝ていたもので、どこに入ったのかはさっぱり分からなかったが、今は地下駐車場の上面にあるものが見えた。

なんの変哲もないビルだった。

少しガツカリした。もつとファンタジ的な建物が一般人には見えないように加工されているとか勝手に予想していたからだ。

支部の中に入り、最上階へと行く。そこから瞬間移動能力者の少女によって本部へと運ばれた。

また、瞬間移動をする際のグルグルとした動きに目を回しながら到着した鏡夜は、酒に酔っているかのような足取りで前を歩く二人に付いて行く。

(やっぱ駄目だ、これ……。二回目で慣れるはずがないか)

喉の奥からこみ上げてくるなにかを必死に抑え込み、涙目になり

かけた時に、昨日の会議室に着いた。

扉を開け、机が並んでいる部屋に入ると、毒舌女は奥の机に腰掛けていた。

「みなさんお揃いようですね」

書類の束に目を通しながら、話しかけてきたのだが、この女には生体感知センサーでもついているのだろうか。

「私も時間がないので、さっさと終わらせますのです。それでは、新藤様。大事な物は持ってきましたですか？」

「ああ、一応は」

鏡夜は懐に入れていた物を取り出した。

「ネックレス……なのですか？」

「うーん、ちよつと違うな。これはさ、家に残されていた指輪にチェーンを通しただけだよ」

鏡夜が持っているのは、銀製の指輪みたいなものだ。そこにチェーンが通されていて、首にかけられるようになっていた。

その指輪の内側には、十字架のようなものが小さく描かれている。「なんでそれが大事なのよ」

話しかけてきたのは、今まで会話をしていた少女ではなく、会う度に喧嘩をしている印象しかない生意気少女の方だった。

車の中では、光輝から前原と呼ばれていたので、彼女の名前は前原美紀というらしい。

「なんでって言われてもな……」

ここで実際の事を話してしまったら、あんな性格の少女でも慰めの言葉や、憐れみの視線を送ってくるかもしれない。

鏡夜はそういった同情されるのが大嫌いだった。

自分はそこまで憐れみをつけるほど、可哀そうな人間ではない。そう思っているからだ。

「あー、あれだ。昔な、母さんが買ってくれた初めての誕生日プレゼントだったからな」

「へー。誕生日に指輪を贈るなんて、変わったお母さんね。しかも

結構、指のサイズがでかくないかしら」

「お、大きくなったら、付けろって意味だよ」  
「なるほどね」

なんだか釈然としない表情をしている美紀だったが、最後まで追及してくるような事はしなかった。

（まあ、実際には、あいつが唯一残していった手がかりなんだけどもね）

家族殺しの犯人である、あいつは。

なぜか、これだけを置いて行ったのだ。

「それで？ これをどうするんだ？」

鎖のチェーンの部分を持ち、振り子のようにそれを揺らす。

「一度、私に渡して欲しいのです。すぐにお返ししますですよ」

「そうか。じゃあ、ほい」

「はい、確かに」

返してくれるのなら、なにも言う事はない。鏡夜は簡単に手渡した。

ハイヒールの秘書は、少年から渡されたものをポケットにしまい、その場から立ち去ろうとする。

「では、私はちよつと用事があるので。一端、失礼します」

少年たちの横を通り過ぎ、軽く会釈をしてから会議室から出て行く。

「俺達はここにいていいのか？」

彼女がいなくなり、会議室の中が静かになってしまったので、鏡夜は口を開く。

それに答えてくれたのは、光輝だった。

「ああ、そうだね。どうせ、新藤くんのはすぐに戻ってくるんだから、それまでここでジツとしていようか」

「そうですね」

静寂が場を包み込む。

（なんか空気が重いんだけど）

そんな事を考えてしまったが、どうしようもない。話題を振ろうと思っても、この二人と共通している話題というものがなにか分からないのだ。

結局、このまま言葉を発す事無く時間は過ぎて行く。昨日の東川と一緒にいた時間がやけに遠く感じられた。

すぐにあの少女は帰ってきた。

右手には鏡夜の指輪ネックレスと、左手には大量の書類があった。「お待たせしましたです。では、新藤様にはこれを。そして、光輝様と前原様にはこちらを。すぐに直行していただければ、こちらとしても嬉しいのです」

まず始めに鏡夜の前に来た少女は、ネックレスを渡してくる。それから後の二人には書類を。直行してくれとか言っていたので、任務に係るものなのだろう。

東川光輝は渡されたハードカバーの書籍ほどもある書類を、一枚一枚流し読みしていく。

「ふうん……。よし、分かった。それじゃあ、二人とも行くこうか」書類を脇に挟み、一人先行するハンサム青年。

最初は光輝が言っている意味が分からなかった鏡夜だが、二人という言葉には反応した。

「二人って事は……俺も行くんですか？」

「ハハハ、当たり前じゃないか。なんのために、それを受け取ったんだい？」

「いや、これは元々俺の物だから受け取ったんですが……え？ これになにかしたんですか？」

「知らなかったのかい？ 今、神原さんカンバラがどっかに持って行った時に、それは神器になったって事をさ」

「神原……？ ああ、このハイヒール少女ですか。神器って言葉も今知りましたけど」

またもやここで、分からない単語が登場してきた。すべて一辺に

説明してくれればいいものを。

頭の上に疑問符を大量に浮かべている鏡夜を見た輝光は、「ああ」とボンと拳を掌に乗せる。

「まだ説明してなかったか。神器ってというのは、簡単にいつてしまえばシャドウを倒すために必要な武器のこと。ほら、璃子でいうならば指輪で、この美紀でいうのならネックレスだ」

輝光は横にいる前原美紀を指差し、彼女は制服の胸元から十字架のネックレスを取り出した。

「なるほど。分かりました。でも、勝手にこんな事をされましてもね……」

「なんだか納得できない。」

鏡夜が不満げに眉を寄せている事を気遣ったのか、輝光は相変わらずのスマイルでさらに説明をしてくる。

「しょうがないじゃないか。新藤くんはこの事を伝えたら、素直に渡してくれたか？」

「ちよつと悩みますね。大事なものなんで」

「そうだろ？ だから秘密にやる必要があつたんだ。それに大事なものだから、こつやつた武器になるんだから」

（どうしても大切なものじゃなければ駄目なんだろうか。だとしたら、なぜ……？）

疑問に思つた事を聞いてみようと思つて口を開きかけた時、今まで黙つていた神原と呼ばれていたハイヒール 毒舌少女が話しに割つて入ってくる。

「家畜様。それは本当にあなたのものなのですか？」

「家畜つて俺の事か！？ ……いや、厳密に言えば俺のものじゃない。だけど一番大切なものだ」

「厳密に言わなくても鏡夜のものではない。」

「そうなのですか……」

神原がハイヒールを底で床を叩きながら、なにか思考を開始してしまつた。

なにか不吉な事が起きるのを長年の勘で感じ取った鏡夜は、光輝に向き直る。

「光輝さん、早く行っちゃいましょう。俺、今日は早く帰りたい気分なんです」

「神原さん、行ってもいいか？」

鏡夜の発言をほぼ無視した青年は、神原の返事を待っていた。

しばしの無言状態が続き、やがて神原が話し出した。

「ええ、行ってくださいなのです。どうやら私の勘違いのようでしたので」

「そうか。じゃあ、俺達はここで」

光輝が歩き出し、先頭で会議室から出て行く。この部屋の扉が開いた瞬間、外のうるさい音が一気に雪崩れ込んできた。

「あたしたちも行くわよ」

「あ、ああ。そうだな」

ハイヒール少女だけを残して、三人は退散する。

鏡夜は初めての実戦に赴き、そこで経験を積むためにだ。

一人になった空間にて、神原が靴で床を叩きながら、小さく呟く。  
「なるほど……だからあの人はあんな事言ったのですね」

恐らく、あの癖っ毛頭の少年は、この先いつか、最強の敵に出会うのだろう。

「……それが運命なのですな」

狭く無感情な空間に、哀れみを帯びた声が響く。

やがて、神原は少しだけ頬を緩めると、自分もこの部屋から出て行った。

車に揺られる事、数十分。

新藤鏡夜を含めた三人は、廃ビルの前にいた。

ここは市街地から遠く離れ、山のふもとにある廃れた場所である。

辺りを見ても人気は全くなく、獣の気配もない。雑草も少ししか生えていないのだ。

地球に住むものたちから見放された土地、または、ゴーストタウンと呼ばれるている。

何十年か前までは、工場地帯で賑わっていたらしいが、バブル崩壊に合わせて一気に崩れ去ったらしい。

「……こんな場所にいるんですか？」

鏡夜は横に頬笑みながら立っている光輝に、疑惑の視線を投げかける。

「神原さんに渡された地図はここを指しているんだが。……まあ、あいつらは人間をどこからでも連れて来るから」

「朝の時間帯に肝試しにでも来たんじゃないの？ あたしが通っている高校で、ここはそういうスポットだって友達が言ってたわよ」

「お前に友達いたんだな」

「……なによ。殴るわよ」

「ごめんなさい」

無駄なやりとりを終え、三人は歩いて近くにあるビルの中に入っていく。

中は昼間だというのに薄暗く、パツと見ではなにも異常はないように思える。

壊れた扉のすぐ近くには上に行くための鉄製の階段があったが、そこも扉同様、サビていてとても昇れそうにない。

「この中にいるんですか？」

「ああ、いるいる」

軽い感じで答え、光輝はスタスタと先に行ってしまう。

今は光輝に従うしかシャドウを見つけ出す手段がないので、鏡夜は彼の後を追って行く。

「足元に気をつけるよ」

光輝がなにかを跳び越えながら、後続の二人に指示を出す。そこには薄暗くてよく見えないが、なにか物体が横たわっていた。

「……………」

前に立ち止まり、目を凝らしてそれを確認してみると。

「うっ……………」

思わず声が詰まった。

それは白骨化した遺体だった。

それも犬や猫などではなく、人間の形をした骨だった。

それは手を首の辺りに持っていき、なにかに苦しみながら死に至ったように骨がいびつに歪んでいた。

「なんだ、これ……………」

視覚では理解していても、脳がそれを許さない。目の前に倒れているなにかが、魂を無くした人間の姿だなんて、信じられない。

しかし、そんな鏡夜の混乱を見透かされているのか、横を歩いていた前原美紀が軽々と、躊躇なく、無表情に答えを口にする。

「シャドウに殺された人たちの死体に決まってるじゃない」

「……………お前、自分がなにを言っているのか分かってるのか？」

「分かっているつもりよ。ていうかさ、こんなの現場に行くたびにあのよ？ そのせいで、これを恐がる神経なんて、とっくの昔にイカれてるんだから。あんまり、目くじら立てないでくれる？」

彼女は呆れたように片目を瞑り、左手をヒラヒラと左右に振る。

（やっぱりこの世界にいる人たちって、そういう神経が麻痺してるんだ……………。俺も人の事を言えた義理じゃないけど）

新藤鏡夜も前原たちほどではないが、そういう神経は常人のそれとは違う。

それはもはや必然なのだろう。家族のあんな姿を見てしまったら、おかしくならないほうがおかしい。

しかし彼にはこういった遺体を見て、まだ少しだけ恐怖を感じる事はできる。

それが救いでもあり、絶望でもあった。

「ほら、分かったのなら、早くいくわよ。光輝さんに置いていかれちゃうじゃない」

今度は少しだけ不機嫌になっていた前原が、先を急ぐように促してくる。

少年はそれに逆らう事なく、目の前にある人間に手を合わせてから、その横を通っていく。

東川光輝は入口とは反対側にある扉に耳をくつつけて、なにかを聞きとつているように立っていた。

そこに近くへと歩いてきた鏡夜が話しかける。

「なにをしてるんですか？」

「ちよつと……な」

目をつぶり、耳に神経を集中させているようだ。

ここはなにかを話しかけてもいいのだろうか、いやでも邪魔になつたら嫌だしな……とか少年が考えていると、光輝が手招きをしてきた。

「？」

不思議に思いながらもそれに従つて光輝へとさらに近づく。

東川兄は指で扉を叩き、自分と同じ格好をするようにとジェスチャーらしきもので伝えてくる。

(普通に言葉で言ってくれた方が早いんじゃない……)

鏡夜は東川光輝の横に立ち、ヒンヤリと冷たい扉に耳をくつつけた。

(なんだ、これ……なんも聞こえない)

彼はなにか聞こえるから、自分にも同じ行動をするように促したのではないのか？

うーん？ と首を傾げていると、光輝が扉から離れた。

「そのままジツとしている事」

「え？ なんですか？」

「いいからいいから」

光輝はスマイルを崩さないまま鏡夜から離れた。そして、自分の指を噛み、流血させる。

「なっ!？」

いきなりの行動に目を点にして驚く少年。この人には、こんな状況で自傷行為に及ぶような趣味でもあったのだろうか。

「ああ、気にしない、気にしない。俺の能力はこうでもしなければ発動しないんだ」

光輝は壁に手で触れる。そして、青い光が耳の辺りから発せられる。

「新藤くん、よく見ておくんだ。これは能力とは少し違うんだが、これが出来なければ『サーチレス』の中には入れない。重要なものなんだ」

耳から出ていた青い光は、しだいに収束していく。

あたりを眩く照らしていたそれはが消え去ると同時に、パアアアアーン！！と、風船が破裂したような音が木霊する。

(この音……)

少年には聞き覚えがあった。

東川璃子が初めて鏡夜を助けにきてくれたあの日、彼女が出て来る直前にこの音が鳴ったのだ。

(……という事は、ここにサーチレスの壁があったのか!?)

この扉には異空間に繋がる壁があった。その事実を確認しただけで、体中から汗が噴き出してくる。

「うわー！！　なんだこいつら!?!」

「助けて!!!!」

この世界と異界を阻む壁がなくなった瞬間、今まで全く聞こえていなかった悲鳴が木霊する。

それを聞いた鏡夜の脳内に、初めてあいつらに襲われた時の光景がフラッシュバックし、頭の中が真っ白になってきた。

そんな、呆然と木偶の棒のように突っ立っている新藤鏡夜の背中を押したのは、前原美紀だった。

「はいはい、ボサツとしない。すぐ中に入らなきゃ、元に戻るんだから」

少年の背中をぐいぐいと押し、光輝が開けた扉の中へと入って行

く。

脳に直接響いているのかと錯覚するような大音量の叫び声。

そして今まで凄く近くにいなながらも、それを聞きとる事が出来なかった事実。

鏡夜は働かない頭を強制労働させ、これらの要素と、以前聞いた情報の欠片をパズルのピースのように、的確に当てはめる。

すると、一つの結論が出た。

(なるほど……これが、そこにあるけど気付かない。そこにいるのに気付けないっていう現象なんだ。すぐ近くで惨劇が起きているのに、路上に転がる石のように、生い茂る雑草の中の本のように存在感が希薄なもの。……これが、サーチレスの特性)

自分の考えが間違っていない事を確認し、唾を飲み込む。もしかしたら、こんな事がずっと前から自分たちの周りに起きていた可能性が高いのだ。

こんな事をする奴らは。

「化け物だ……」

外見だけは人間そっくりらしいが、その他は全くの別物。

扉の中は小さな倉庫のような場所だった。壁際には鉄製の棚が置かれ、そこには古びたダンボールが収められていた。

そして、地面にはおよその場所には似つかわしくないものが横たわっている。

「またか……!!」

冷たい地面に人形のように生氣なく倒れているのは、目を見開き、驚愕と恐怖に顔を歪めた人間だった。

若い男、女性、お年寄り。

この光景を見るのは、二回目だった。自分が襲われた時と、ここで。

そして。

今、この瞬間にも逃げ惑う人々がいる。その人達はいきなり現れた鏡夜達三人組に驚きながらも、救世主を見るかのような視線を投

げかけてきた。

しかし。

その中の一人が、例の黒い影に、肩を、触られた。

それだけで、その人物は糸の切れた操り人形のように、パタリと倒れてしまう。

それで、この狭い倉庫に混乱が再び訪れる。

絶叫が反響し、鼓膜を直接揺さぶる。立っている事すらもままならない。

「なにボサツとしてんのよ。ほら、早くあんたも戦いなさい」

そう言った美紀の胸元からは、赤い光が溢れ出ていた。あのペンダントが輝いているのだろう。

「戦うっていつても、どうすれば……」

「ああ、そうだったな。新藤くんにはまだ教えていなかった」

鏡夜の言葉に反応した光輝が、説明してくれるようだ。

「いいか？ まずは、こいつらに会って、その時感じた感情を思い出せばいい。初めて能力を出した時の感情だ。分かったか？」

あいつらに初めて襲われた時の感情。それは一体、なんだったか。それが分からずに、新藤鏡夜は首を傾げた。

あの時はなにもかもが無我夢中で、自分がなにをしていたのかは臆げにしか覚えていない。

ましてや、自分が死にそうになったあの時に抱いていた感情なんてものは、全くと言っていいほど記憶に残っていないのだ。

「どうした？ なにか問題でもあるのか？」

返事をしない鏡夜を不審に思ったのか、光輝が戦う準備をしながら横目で確かめてきた。

「いえ、その……あの時に感じていたものがなんだったか、少し覚えていなくて。こういった時はどうしたらいいんですか？」

「そうか……。まあ、命の危機に瀕していた時の事なんか、詳細に覚えてないよな。じゃあさ、その時と同じ状況になったら、また同じ感情を抱くかもしれないな」

「え？ それって……まさか」

「そのまさかだ」

光輝は鏡夜の首元を猫のようにガツシリと掴むと、その細腕からは信じられないような力で、彼を戦場の中心点に放り投げた。

「あだっ！！」

情けない声を上げながら、顔から地面にダイブした鏡夜は、急いで起き上がり周りを確認。

そして、自分を中心にして円のように広がっているシャドウがいる事を視認した。

（なんつー、荒療治を思いつくんだあの人は！！ これはもしかしたら死ぬかもしれないじゃないか！ なにを考えているんだ！）

抗議の視線を光輝に投げかけるも、奴はすでにシャドウの胸の辺りを、なんらかの能力で貫いている所だった。

鏡夜は鎖を通して胸にかけた指輪を、服越しに握りしめながら逃げ回っていた。

（あの時はどういった感情を抱いていたっけ……？ こんな方法で解決できたらいいんだけど）

そうは思うも、焦りが脳をふやけさせ、恐怖で足がすくむ。

明確な思考がなにも出来ず、上手く動かせない足を必死に動かす。いつのまにか目前に迫ってきていたシャドウの手らしきものを、

冷汗を流しながら横っ飛びする事で避ける。

「危ないって、これ！！」

下手したら死ぬ。下手をしなくても死にそうな気がする。

あの時、焦りや恐怖が脳内を支配している中、自分はこういう風に動いただろうか。どういうふうにも、こいつらを感じたのだろうか。

「うおっと！？」

あいつらの動きは遅い。だから、不意打ちをされてもなんとか避ける事は出来る。

だけど、それすらも許されない状況に追い込まれた。

薄暗く狭い倉庫の角に追いやられたのだ。こいつらにこいつら

を実行する知能があつたとは、驚きだった。

直角に曲がっている角に背中を押しつけ、後方だけは安全地帯だと確認する。しかし、そんな事はなにも意味がない。

目の前には、ネズミが逃げ出す隙間もないほど視界を埋め尽くしている化け物。

これは、どうしたらいいのだろうか。

じわじわ、と。鏡夜に恐怖を味わわせるように、ゆっくり近づいてくるシャドウ達。

（どうしたらいいんだ　　！！　あの時の感情なんて思いだせねえよ！！）

なにも思い出せなければ、これからどうするかも思いつかない。

八方塞がりに追い込まれていた鏡夜の耳に、美紀の音が響く。

「しゃがみなさい！！」

その鋭い声に、なにを考えるまでもなく反射的に少年は地面に伏せた。

それと同時に。

朱い炎の鞭のようなものが、進行方向とは逆に宙でしなり、シャドウ達の胴体と足を斬り離していく。

炎が空気を巻き込むような音が消え、さっきまで響いていた戦かいのメロディも消失する。

その事を認識した鏡夜が、地面に顔が着きそうなくらい低くしていた体勢から、少しだけ起きた。

目の前に広がっていたのは、これが人間ならば地獄絵図だという光景だ。

体が横真つ二つにされた影のような物体が、視界を埋め尽くす。

（人間も倒れているな……）

自分とは逆の角。そこには、折り重なるようにして倒れている年齢がバラバラな数人の人間。

しかし、そんな事を確認してやっと、実感が沸いてきた。

（生きてる）

死ぬかと思っていたのだが、生きている。通算で三回目なるが、これはとても嬉しい事だった。

カツツ、と靴の底を鳴らしながらシャドウの体を踏んでやってきた美紀は、フンツと鼻を鳴らす。

「情けないわね」

見下してきている前原美紀は、大きく息を吐いてからもう一度さっきの言葉を告げてくる。

「本っ当になっさけないわね。なにやってんのよ、あんた」

「……悪い」

地面から立ち上がりながら、なんとなく謝ってしまう。

（役立たずだな）

自嘲の笑みを浮かべながら、鏡夜は周りを見た。

いつもならすぐに消え去るシャドウの体だが、今は残っている。

それどころか、切り離された胴体と足が別々に蠢いていた。

「こいつら、まだ生きているのか？」

「生きているっていう解釈は駄目ね。それじゃあ、あたし達が殺し回っているみたいで、良い気分じゃないわ」

「知らねえよ、そんな事」

美紀の先ほどの言葉が、胸に突き刺さっている鏡夜は拗ねた調子で応答する。

「なんでこいつら、動いてんの？ いつもならすぐに消えるだろ」

「あー、あんた、そんな事も知らないんだ」

美紀は首を左右に振り、手を額に当てた。そして針のように鋭い視線を投げつけてくる。

「こいつらにはね、体のどこかに『核』って呼ばれている。あたし達でいうならば、心臓のようなものがあるわけ。それを破壊しない限り、こいつらは何度でも再生するわよ」

美紀がそう言っている間にも、切り離された胴体と足がお互いを求めるように動き回り、そして、結合していく。

「あんたにも一応、核がある場所を教えておこうと思ってね」

前原美紀は、くつつき始めたシャドウを再び斬り離れた。

その容赦のなさに、鏡夜は畏怖の念を抱く。こいつは本当に人間なのだろうか。

相手はシャドウなのだから今は別にいいが、この女なら普通に人間にも同じ事をしそつである。

美紀は人差し指を一本だけ立てる。

すると、指が伸びたような錯覚に陥ったのだが、それは指先から小さな炎の槍が飛び出しているだけだった。

「いい？ L.V.1とL.V.2の核は、あたし達、人間でいう心臓と同じ場所にあるの。つまり、中央寄りの左胸の辺りよ。」

美紀は指を一体のシャドウに向ける。その先に伸びていた炎が、さらに長くなる。

それは一気に伸び、一瞬の内に標的にされた化け物の胸を貫いた。炎の線で美紀の指先と繋がる事になったシャドウは、数秒ピクピクと痙攣を起こしていたが、やがて、空気に溶けるように徐々に薄くなっていく。

「分かったかしら？ これが、核を壊すつていうこと。これが一番早い倒し方なのよ。そして、シャドウを倒すと、そのシャドウに殺された人間の魂は元の体に戻るつてわけ。理解できたかしら？」

「……なんとなくは」

シャドウを倒したら殺された人間が元に戻るといふ事は知っていた。そんなのは巻き込まれた事件で、東川が言っていたのだから。

（核なんてあつたんだな。俺はなにも考えずに、あいつらの体の触れてただけだったけど。それでも倒す事は出来た。方法は一つじゃないつてことだよな）

「そう。分かったんなら、早く立ちなさい。さっきまでは焦つてたみたいだから思い出せなかつただろうけど、今は大丈夫でしょ。襲われた時の事を思い出して、能力を使つて、こいつらを消滅させるの手伝つて」

「そつだな」

美紀が言つとおり、さつきまではゴチャゴチャしていても考えられなかった頭の中が、だいぶスッキリしてきた。

これで思い出せそうだ。

（あの時、自分がなにを感じていたのか）

記憶を遡り、ゆっくりとあの日の自分と今の自分をリンクさせる。本屋からの帰り道、電灯だけが存在感を放っていたあの裏通り。変な足音に追いかけて回され、どんどん路地裏に追いやられていく。そしてたどりついたのは、ビルとビルに挟まれた、行き止まりの道だった。

そこにはたくさん人間がいて、シャドウに追いかけて回されている。自分もそれに倣うように、逃げ始めた。

見えない壁に阻まれ、そこから逃げ出す事が出来ない。そして、化け物の手が自分の方に触れたとき。いきなり、胸ポケットが輝き出したのだ。

（ここだ。この少し前、自分はなにを考えていた？ 思い出せ。ゆっくりでいい）

あの日の自分の眼に映る化け物。自分はいつらを憎んでいた。そう、殺してやりたいほど。

「 思い出した！ 」

あの日の自分が抱いていた感情は、『殺意』。あいつらに対する殺意だったはずだ。

感情は分かった。しかし、これからどうしたらいいのだろうか。

光輝はそれが分かればなんとかなる、とでも言つような口ぶりだったが、鏡夜の体にはなにも変化はない。

「 光輝さ 」

彼を呼ぼうとして、思い留まる。少しくらいは自分で考えたほうがいいだろう。なにもかも、聞いてばかりでは成長できないのだから。

鏡夜は指を頬に当てて、トントンと軽くリズムを刻むように叩く。そしてそれを止めた。

能力と聞いて、一番初めに思い浮かべるもの。それは、自分のポケットに入っている指輪のネックレスだ。

最初にあの不思議な力を使用した時、あれが光っていた。だからなにか関係あるのだろう。

鏡夜はズボンのポケットからそれを取り出した。

薄暗い、この狭い倉庫の中でも、それは輝きを放っている。

チャリ、という鎖が擦れる音が聞こえる。鏡夜はそれを首にかけてみた。

そうした方がいいと、直感的に悟ったのだ。

すると、首にかけた指輪から。なにか膨大な力が流れ込むのを感じる。しかし、不快ではない。春の風のようにさわやかなものだ。

その力は、血管の中を動き回る血のように、体の隅々まで行き渡る。体が熱くなり、汗が噴き出してくる。

無意識的に目を瞑った鏡夜の脳内に、ある光景が浮かび始める。

それは丸いボールのような物体が白い空間に浮かびあがり、小さく開いている穴から様々な色の光が吐き出されている。

ディスクなどにあるミラーボールの出来そこないのような感じのそれは、心臓のように鼓動を打つ。

一回、脈打つ度に、光は一瞬だけ強まり、無感情な白い空間を七色に染め上げる。

「なんだ、これ……？」

鏡夜は、そんな球の前にポツンと立っており、ポケットと眺めている。

球に開いている穴は、凄く小さく、針で突き刺したような感じだ。それが様々な場所にあり、そこから光が溢れ出ている。

「なんなんだろ」

そつと手を近づけさせ、触れようと思う。不思議と危ないという感情は浮かばなかった。

球に触れる前に、光に触れた。すると、ドクン、と強く心臓が鼓動する。

脈打ち、張り裂けそうなほど何度も収縮する。

「ゲホッ！！」

触れた光が、指と爪との間から侵入してくる。それは体の中を好きだけ暴れまわり、今の咳と一緒に体外へと吐き出された。

「なんなんだよ、これ」

なんで自分がここにいるのだろうか。これはなんなのだろうか。どうしたら元の場所に戻れるのだろうか。

意味が分からない。

どうしたらいいのか分からないまま、無益に時間が過ぎていく。

目の前にある球みたいななにかに触れたら、またさっきのような事態に陥るのは目に見えている。

痛みがあつたわけではない。体の中を暴れ回っていた時も、痛さよりも爽快感みたいなものの方が強かった。

だけど、これにはなぜか触れたいとは思えない。

光を吐きだすボールを眺めること数分。いや、あるいは数秒かもしれない。時間の感覚が狂ってしまうほど、鏡夜はただ立っていただけだった。

しかし、ここで事態に変化が訪れる。

球がゆっくりと、少年を目がけて移動してきたのだ。それはまるで、雪のように柔らかな動作で、敵意など微塵も感じない。

どうしたらいいのか分からなかった。これからなにが起こるか理解できなかった。

だからというわけではないが、鏡夜はそこから動かない。ただ、ジッと立ち、球を受け入れる準備をする。

不安がないわけではなかった。

(もう、どうとでもなれ……)

光輝は言っていた。感情を思い出せばどうにかなると。そして少年はその言葉通り、ちゃんと思いだした。

だったら、後は、道に従っていけばいい。無駄に寄り道などしないで、真っすぐと進むのが一番の近道だ。

(力をくれるのなら、俺はなんでも受け入れてやる)

このためなら、鏡夜はなに者をも拒まない。その結果、自分が死ぬ事になっても構わない。

そう、考えるようになっていた。

ボールは鏡夜の手前まで来て、思い出したかのようにいきなり光を消失させる。

白い空間を横切る光がなくなり、辺りは虚しくくらいに一色になる。

ボールが小さくなった。

ピンポン球のような大きさになったそれは、心臓の位置に軽くぶつかった。

いや、ぶつかったように見えた。

球はコンニャクに箸を突き刺すように、鏡夜の胸板などなんの障害物でもないというふうに、容易く体内に侵入してきた。

痛みはない。

それどころか、さっき光が残して行ったような爽快感が体中に溢れる。

明るい日差しのもと、広大な草原を走り回っているような錯覚に捉われるのも数秒。

羽根が生えたように、体が軽くなった。

次に感覚が体に戻って来た時には、鏡夜は元の狭い倉庫に戻ってきていた。

さっきまで居た場所と光量が違い過ぎて、ほぼ真っ暗に見える。

「あら、もう戻ってきたの」

近くにおいて鏡夜の顔を覗き込んでいた前原が、少し驚いたように目を見開く。

「……さっきまで俺がいた場所は、どこなんだ？」

「さあ？」

美紀は肩をすくめる。

「行く場所は人それぞれ違うから分からないわ。ちなみにあたしの

場合は、変なエイリアンと戦闘したわよ」

「そうか」

その変なエイリアンがどういった容姿をしていたのかは凄く気になるが、今はそれを問い詰めている場合じゃないだろう。

それにしても、さっきの球はどうなったのだろうか。体の中に入ったのは知っているが、異物がある感覚などどこにもない。

もちろん、球が入ったと思われる心臓付近にもなんら異常はない。触ってみたが、膨らんでいるはずもない。

「？」

鏡夜は頭の上にクエスチョンマークを浮かべて、首を傾げた。

「前原。お前もさ、変な球みたいなものが体の中に入ったのか？」

横でシャドウの胸を貫き、核とやらを破壊している美紀に聞いてみた。

彼女は面倒そうに横目だけ鏡夜を見つめ、そして溜息混じりに答えを口にする。

「あんたは球だったんだ。あたしのお姉ちゃんと一緒に。だけど、あたしの場合は変なエイリアンのドクロだったわ」

（さっきからエイリアンが出てくるたびにさ、どんな形をしているのかスツゴク気になるんですが）

しかし、気になる事はそれだけじゃない。それ以外にも聞かなければならない事はある。

「その、球とかドクロとかさ、能力を使うのに必要なものなのか？」

「そうね、必要だわ」

「……」

「……」

「……あの、説明をお願いしてもよろしいでしょうか」

「……チッ」

（舌打ちされた。なんなのこの子）

なんだか凄く精神的に疲れてきた鏡夜だった。

しかし、そんな彼の心境なんて全く興味のないであろう美紀は、

前髪を掻き上げて鋭い目つきを晒す。

美紀は獲物を見つけた猫のような視線を鏡夜に向けたまま、説明を始める。

「あなたの質問に答えると、あなたが見た物は、このシャドウでいう核みたいなもの。これがなければ、発動させるのに必要な媒体があっても、能力は出現しないのよ」

「核……ねえ」

「そう」

「でもさ、俺が初めて能力を使った時には、あんなものみた事も無かったぞ？　なんで能力を使えたんだ？」

「それには色々な諸説があるわ。その中で有力なものが、自分の寿命を、一時的に核に変換しているってやつかしら。もちろん、無意識の内によ。人間って、命が関わったらなににするか分からないわね」

「なるほど、分かった、ありがとな」

「別に。お礼なんて言われる筋合いなんてないわよ。新人教育も仕事のうちだし」

「だったら、さっきからの面倒臭そうな態度を止めてくれと言いたかったが、それを言葉にしてしまったら寿命が縮むかもしれない。

これが冗談にはならないのが、この世界の怖い所だ。

「さて、あなたにも能力を使ってもらって、こいつらを片づけるのを手伝ってもらおうかしら」

「どうやればいいんだ？」

「簡単な事よ。球が入った場所から、水を噴出させるようイメージして、能力の源を体の集めたい部位に流し込むような感じを想像すればいいわ」

イメージをする前に考える事がある。それはさっき、美紀が言っていたものだ。

鏡夜の体の中に入った球は、シャドウの核と似たようなものらしい。先ほどは軽く流してしまったが、これは結構重大な事なのではないだろうか。

(まさか、俺も化け物と同類になるんじゃないだろうな……)

「なにやってんのよ、早くしなさいよ」

「……悪い」

とりあえず、考え事は後にしよう。

そうしなければ、この恐い教官さんにどんな罰を与えられるか分かったもんじゃない。

(えーと、体中に流すような感覚って言ってたな)

目を瞑って、それに使っていた神経を全て感覚に回す。

胸の中にあると言っていた核のようなものを意識し、そこから水が流れるのをイメージする。

そうした所で、鏡夜はある疑問にぶつかる。

(集めたい部位って……どこだ?)

この前の記憶を探ると、自分はシャドウを言われている化け物を触って消滅させていた。

だったら、手、なのだろうか。確信はないが、やってみる価値はありそうだ。

(まずは……体の中を流れる水を手に集中させるよう想像すればいいのか)

心臓付近から、なにか熱いものが噴き出てくるのを感じた。

その溢れ出てきたものを、手に集めるように想像する。

腕の中を伝って、力の源が右手と左手に集中していく。

温度が上昇していく。

心臓が高鳴り、気分が高揚する。

今なら、なんでも出来るような錯覚に陥った。

目を開き、一気にシャドウに触れようとした。しかしそれは、途中で中断させられてしまう。

というのも。

「うおっ!?!」

なにを思ったのか、横にいた美紀が右の手刀を水平に振るってきたからだ。

鏡夜はそれを上体反らしをすることによって避けたが、風圧が鼻先を叩く。こいつ、本気で攻撃してきやがった。

「……なにか不満でもあるのか？」

腹の底から湧き上がってくる黒い感情を押し殺し、努めて平静を装いながら訊ねる。

そんな少年に、美紀は冷めた視線を投げかけた。

「あんた馬鹿？ 能力も発動していないのに、こいつらに触ったら死ぬって分かっているわよね？ ああ、それともあれ？ 死んでも、あたし達がこいつらを倒せば復活出来るから、適当にやってんの？」

「はあ？ いや、俺はちゃんと言われた通りに」

「出来てないからこんな事を言ってるでしょ。そんな事も分からないのなら、頭のネジを誰かに締めてもらいなさい」

「お前ひよつとして、俺の事が嫌いだろ」

「大っ嫌い」

「そうか、安心した。俺もだよ」

二人で視線をぶつけ合い、それだけで火花を発生させる。

我慢をしようと思っただが、もはや限界だった。いくら自分が悪いと言っても、あそこまで言わなくてもいいだろう。

完全に頭に血が上がっている二人を遠くから眺めているのは光輝だけだが、彼は我関せずのような雰囲気を作り出していた。

「大嫌いだけど、教育をしなければあたしが怒られるのよ。だから貴重な時間を割いてあんたなんかの面倒をみてあげてるわけ。あんたもあたしを嫌うのは勝手だけど、少しは感謝でもしたらどうなのよ」

「それはそれは、どうもありがとうございます。前原さん」

嫌み全開の美紀に対して、鏡夜も最大限の嫌みをこの言葉に入れる。

美紀はふんつ、と鼻を鳴らすと、鏡夜の方を見ないまま適当にシャドウを指差す。

「さっきも言った通り、今のあんたがこいつらに触ったら、一瞬で

死ぬわよ。あんたが胸にかけている指輪をみてみなさいよ。光をなにも放つてないわよね。それが能力発動してないっていう証拠。あたしが助けなかったら、あんたはもう昇天してるわね」

「……そうか。ありがとな」

「お礼を言わなくてもいいって言ってるでしょ。気持ち悪い。嫌いな奴にそんな事を言われても、鳥肌しか立たないわ」

「あっそ」

さっきまで頭の上っていた血が、今の言葉に呆れて下に降りてしまった。もう、性格悪い奴として接していくしかないのだろう。

かなり疲れる対応の仕方がだ、そっちの方がストレスも少ない気もする。

しかもこの少女、口ではなんだかんだ言っているが、性根は良い奴……だと思う。

「なにジロジロ見てんのよ。それよりも、早く能力を発動しない。これだからノロマな男は」

あくまでも、『だと思う』だ。断定しているわけではない。

（こいつにイライラしても、無駄なんだろうな。だから、今度からはアドバイスだけを耳に入れよう。他の言葉は極力、シャットダウンだ）

だからと言って、先ほどの言葉を撤回させるつもりはない。

少しは東川を見習って、女の子らしく振る舞ってもらいたいものだ。

しかし、そんな事を考えていても相手の性格が改善されるわけではない。

鏡夜は小さく息と一緒にイライラも吐き出しながら、本題に戻る。「能力が発動していないって、なんでだろうな。俺はちゃんと、あの時の感情を思い出したし、能力の源とやらを集めるのも成功したと思うぞ?」

「そうねえ……あたしから見ても、あんたは力の集め方は成功してると思うわ。となると残されている可能性は、感情ね。本当にそれ

で合ってるのかしら？」

「間違いないと思うけど」

「そう。ついでに訊くけど、あんたはどんな感情を抱いたの？」

そう言った美紀の声は、貧乏な人にお金を貸してくれと言う時くらい、期待に満ちていない声だった。本当についてとして訊いていくだけのだろう。

「ん……ああ、そうだなあ」

鏡夜はその問いに対する答えを言うかどうか戸惑った。本当の事を言ってしまうても大丈夫なのだろうか。

美紀達だつて、それなりの感情を抱いたのだろうであらう事は容易に想像できる。

しかし、自分のようなものを、あのような状態で感じる事はおかしくはないのだろうか。

鏡夜は不安だった。

もしこの世界で、目の前にいる女の子に『それ、おかしいわね』とか言われてしまったらどうしよう、と。

こんなふざけた世界の住人である彼女に、『普通』ではないと言われる。それが、なにをもたらすのか分からないが、なんとなく避けたいものだ。

「え、えーと。『恐怖』……かな。目の前で人がドンドン動かなくなつていったらから、化け物達に対する恐怖で一杯だったよ」

「そう。まあ、普通、そんなものよね」

美紀はなにも分かつていない。だけど、納得したような表情を一人で浮かべていた。

(……誤魔化せたんだから、これでもいっか)

適当にそう考え、鏡夜はあいまいに笑って、美紀の考えに同意しておく。

異常者扱いされるのは絶対に嫌だ。そう、過去の自分が告げていた。

(あー、思い出したくねえよ、あんなの)

だけど、忘れたくもない。

思い出したくないから、一刻も早く忘れたい。  
忘れたくないから、ずっと思い出し続ける。

鏡夜は、そんな矛盾した行為をこなしてきた。

「原因が分からないんじゃないじゃ、どうしようもないわね。もういいわ。  
こいつらはあたしと光輝さんで片付けておくから。役立たずはその  
辺で崇めてなさい」

「誰をだよ!? こんなやり取り、前もしたよな!!」

「あら、覚えてたのね。単細胞生物みたいにぶるぶる震えてたから、  
なんにも記憶してないと思ってたわ」

「……単細胞生物って、震えるのか?」

まともに相手をする事に疲れた。なので、適当なツッコミだけで  
終わらせておく。

宣言通りに、美紀は光輝と協力して、絨毯のように広がっている  
シャドウ達を一掃し始めた。

毛玉を取るような面倒臭さが、その表情に垣間見えた気がした。

彼女らにしては、こんな奴らは雑魚も同然なのだろう。全く手こ  
ずっているような印象がなかったのだから。

彼女からしては、砂浜に打ち上げられた鮫を触るような感じで、  
鏡夜からしては、海中を泳いでいる最中の人食いサメと追いかけっ  
こをしながら触るような難易度なのだ。

少年はそんな、絶対に越えられないような壁を感じ、悔しさを胸  
に仕舞いこむ。ただ見ているだけしか出来ないなんて、本当に情け  
ない。

歯を食いしばり、拳をギュッと握る。

「本当に、駄目だな……俺」

ポツリと呟いたその声は、この小さな空間にさえ響く事はなく、  
この世界はお前がいるべき場所ではないと、暗に伝えてきていた。  
鏡夜は自分の家に戻ってきていた。

あの後、光輝の「報告は俺がやっておくから、新藤くんは家に帰

っていいぞ」という言葉に甘えて、自分だけ先に帰ったのだ。

もう、あの廃墟にはシャドウはいない。あいつらに殺されて、肉体がまだ腐っていない人たちには、魂が戻って行った。

(俺はなにもしていないんだけどな)

結局、なにも出来なかった。

自分の無力さがここまで憎いと思えるのは初めてだ。なにかしらの異能の手に入れる事が出来ると思ったから、この世界に飛び込んだ。

もしかしたら、あいつの情報も手に入るかもしれない。などという気持ちもあった。

「畜生……」

電気も点けない薄暗い部屋で、地面に座っている鏡夜は唇を噛みしめる。口の中に血の味が広がった。

「畜生……!!」

どこまで自分は無力なのだ。なんで、美紀や光輝のように能力を使う事が出来ない。

地面を殴り、頭の中に発生しているモヤモヤを発散させたかった。

しかし、なにも変わらない。

知らず知らずの内に涙が溢れ、地面を優しく濡らす。

何度も何度も、濡れた後を打ち消すかのように、床に拳を叩きつける。

新藤鏡夜は少し変わっているが、どこにでもいるような感じの平凡な男子高校生。しかし、その平凡さゆえに、一度後悔し始めたらもう止まらない。

それを止める術を知らないから。

## 黒炎の破壊者

「それで、あいつの能力は発動しなかつたんです」

「分かりましたなのです」

次の日。前原美紀は、ダウトの本部にある会議室にて昨日の出来事を報告していた。

すでに昨日の時点で、光輝から報告を受けているはずの神原だったが、それでももう一度だけ聞きたい事があつたらしい。

「あの少年は、発動できない理由をなにか言っていたのですか？」

「全然。自分はちゃんと言われた通りにやっている、みたいな事を言っていました。ムカつきますよね。これだから男つて。なにか原因があるから、発動しないんだつーの」

グチグチと鏡夜について喋り始めた美紀だったが、神原が話についていきていない事に気付いて、口を閉ざした。

頬に手を当てて、なにかを考え込んでいるような仕草だ。

「なにか、気になる事でもあるんですか？」

「いえ、私の考えすぎだと思いますのです。ああ、それと、前原さんを呼んだのは、報告ついでに伝えたい情報があつたからなのですよ」

「情報」というと、あの人のですか？」

神妙な様子で、美紀は尋ねる。ついに尻尾を掴んだのだろうか。

「ええ。『独りぼっち（オンリー）』についての情報なのです。と言つても、未確認なので、どこまで本当か分からないのですが」

「それでもいいです。早く教えてください!!!」

詰め寄り、神原の肩を掴む。久し振りの情報だ。もし間違つていてもいい。あの人に近づけるのなら、どんな無駄足でも構わない。

「落ち着いてくださいなのです」

美紀とは全くの正反対に、神原は落ちつき払った態度で自分の肩を強く握っている美紀の手をどかす。

「独りぼっち（オンリー）の情報はとても少ないです。前原さんはどこまで言えますか？」

情報を伝えるのを先延ばしにするかのような質問。美紀はそれに煩わしさを感じながらも答えた。

「オンリーは歴史上の中でも、最強と言われている能力者。赤い髪に赤い瞳。任務を失敗した事はなく、どんなに難しくても独りでやり通す。だから、独りぼっち。彼女はどこまでも孤独」

「あと、いくつかの情報が抜けていますのですよ」

「……彼女が孤独になる理由は至って簡単。能力が強すぎて、守るべき仲間までも傷付けてしまうから」

「もう一つ」

まだ言うのか。これ以上はなるべく言いたくないのだが。

正面で意地悪そうに笑っているハイヒールの少女なら、こんな情報とはつくの昔に知っているはずである。

なのに、わざわざ言わせるなんて、性格が悪いにも程がある。

しかし、言わなければ、彼女は新しいものを教えてくれる気はないのだろう。

だから美紀は、一回だけ深く息を吐き出しながら、言葉を紡ぐ。

「何年か前の任務を執行している間に、忽然と姿を消した。そんな、オンリーはあたしの姉よ。文句あるかしら？」

「その通りなのです。良くできました。パチパチー」

軽く拍手をしてきた神原を無視して、美紀は前髪をかき上げた。

出来れば言いたくなかった事実。

任務の最中に姿を消したという事は、こちら側を裏切ったという風に捉える事も出来る。

ダウトに背を向けるなんて事は、絶対にしてはいけない禁忌だ。

逃げだせば、どこまでも追ってくる奴らがいる。そいつらからは逃げ切る事など出来ない。

捕まってしまうえば仲間に戻るか、そんな意志のないものは殺されてしまう。

姉はもう、殺されているのかもしれない。そう考える事はあった。だが、時折、発見したという情報が本部に来る事もある。そういった発信元に美紀は駆け付け、姉の姿を捜す。しかしどこにもいない、というものが、最早、常識になりつつある。それほどたくさんの情報が訪れても、オンリーを発見する事は出来ない。

どうやって隠れているのだろうか。

もし、見つける事が出来たのなら、すぐに連れて帰りたい。今の自分にとっては、かけがえのない、たった一人の身内なのだ。

殺されてお別れなんて、そんなの我慢がならない。

「……それで、届いた話はどういったものでしたか？」

「それがですね。彼女、この街に来ているそうなのです」

「……なんででしょうね」

「分からないのです。独りぼちの姿を確認したわけではないのですが、能力の情報がこの本部に届いただけなのです」

「なるほど……そうですか。ありがとうございます」

頭を下げ、美紀は会議室から出て行くこうとする。

そんな彼女の後ろから、声をかけられた。

「あの少年　新藤鏡夜様とは、仲良くしておいた方が得策だと思いますのです」

「はあ？　なんでですか……って、いないし」

変な事を言われたので、振り返ってみた。しかし神原は、敗北したRPGの敵みたいに一瞬にして姿を消していた。

「なんなのよ」

誰もいなくなった会議室で呟いた。

あの男と仲良くする気など毛頭ない。そんな事したら、胃に穴が空いてしまうではないか。

「あんな奴と良い仲になるくらいなら、蟻の観察を一日中してた方がよっぽど有意義よ」

誰もいない空間目がけて、美紀は言葉を吐き捨て、会議室を後に

した。

部屋の外に出ると、一気に喧騒が蘇ってくる。

PCのキーボードをブラインドタッチで休みなく叩き続ける音や、なにかのコンピュータが作動している音、なにかの指示を大声でしている人もいた。

（忘れてた）

美紀は耳に力を集中させて、その周辺に特定の音を遮断するホルのようなものを作り上げる。

こつする事でやかましい音は全てかき消えた。

すれ違う人たちに挨拶をしながら、出口に向かう。

（今日はさっさと家に帰る）

最後に神原から言われた事が腹の虫を起床させ、さらに増殖させた。

こんなに腹が立つ事は珍しい。あの男と話していた時も、ここまでの苛立ちは覚えなかった。

（なんでこんなに腹立つのかしらねえ……）

理由を探っても分かるはずがない。

出口に着き、扉を開けようと手を伸ばした瞬間、ポケットに入っていた携帯が震えだす。

動作を中断して、電話を取り出して、ディスプレイに表示されている名前を確認した。

『本部』

ここから電話がかかってくる。美紀は辺りを窺って、発信者を調べようとしたがそれは無駄な事だった。

人がたくさん過ぎて誰か分かるはずがない。なので、通話ボタンを押して相手を確認する。

「もしもし」

『前原さんですか？ えーと、LV・3のキラーが出ました。』

おそらくこの前、前原さんが戦闘した、黒炎の破壊者だと思われます。地図を携帯に転送しますので、至急向かってください。応援

も後から駆けつけますので』

「分かった。ありがとう」

美紀は通話を切り、急いで扉を開けて走り出した。

黒炎の破壊者には借りがある。それを、キツチリ耳を揃えて返してやらなければ気が済まない。

通路を走りながら、美紀は携帯に送られてきた地図に目を通す。

最初にあいつと戦った場所の近くだ。ここにはテレポーターが待機しているから、すぐに向かう事が出来そうだ。

走り続け、訓練場に到着する。なん部屋かある内の一つに、瞬間移動能力者が待機しているのだ。

美紀はその部屋に飛び込み、行き先を告げる。相手の手を取って、休む間もなく戦場へと飛び出した。

「着きました」

「ありがとう」

テレポーターによって連れて来られた場所は、あの少年と初めて出会った路地裏の近くだった。

美紀はあの時、LV・3の搜索をしていた。

なにか近くで、変な感覚がする時がある。心臓を針かなにかで、直接突かれるような、そんな異様な感覚だ。

そういった物を感じた時は、近くにサーチレスがある可能性が非常に高い。

しかし、どこにあるのか分からないという状況が多々ある。

本部に伝えればその周辺を搜索してくれるのだが、それが完了する時には相手は逃げている。

なので、自分の感覚を頼りにサーチレスを探す羽目になるのだが、結局、あの日は見つける事は出来なかった。

そして、その次の日に、あいつを見つけた。まさか黒炎の破壊者が来ているとは思わなかったので、少しだけ動揺していたと思う。

「今度こそ負けないわよ」

美紀は、先の戦闘で出来た唇のかさぶたを手で触り、苛立ちを声

に含ませる。

同じ相手に二度も負けるなんて事は、プライドが許さない。絶対に借りを返してやる。

そう決意し、サーチレスの確認を急いだ。

サーチレスを探すのは簡単だ。前述の感覚が大きくなれば、近い。小さくなれば、遠くなっていく。

それを頼りに大体の推測を立て、その周辺を凝視する。すると、微かに揺らぎのようなものが存在する。

後は、それに触れて侵入すればいい。外部からの侵入は拒まないが、内部からの逃走は拒む。それがサーチレスの特徴だ。

薄暗く、細い入り組んだ道。ビルとビルに挟まれ、陽光さえ届かない。そんな場所に存在する、異空間の中に美紀は足を踏み入れた。入った瞬間に、ゾワリと背筋を刺激してくる悪寒。別に、横たわっている人間が大量にいたからではない。そんなものは慣れている。黒いロングコートを身に纏い、眉毛が太く目と鼻が小さい。そんなアンバランスな顔立ちをした男が、こちらを観察するように眺めてきていたからだ。

「久し振りね」

「全くだ。どうした？ あの時の借りでも返しに来たのか？」

男は浮かべる。口を最大まで歪め、人を不快にしかしないその笑みを。右手は、小さな男の子の体を持ち上げていた。

「まあ、そんな所かしらね」

男が持っている者には無関心に、肩をグルグル回し、準備体操をする美紀。

「ふむ。なるほどなるほど。借りを返せるといいな、狂人の炎マイダーフレイム。場合によってはさらに増えるかもしれないぞ？」

その言葉に、鼻を鳴らす。

「そんな事、有り得ないわ。あんたも、頭のネジを締めたほうがいいみたいね」

「減らず口を叩くようになったじゃないか。その自信はなにで出来

ているのか、とても気になる。針金か？ ガラスか？ それとも紙一枚か？」

「そんなの知らないわ。でも、そうね……例えて言うならば、割れない鏡とか？」

「はーっはははは！ 面白い冗談をいうものだ！！ どれ、試してやろう。かかってこい、狂人の炎！！」

「言い忘れてたけど、それで呼ぶな！！」

拳を握りしめ、美紀は大男目がけてかけ出す。

美紀はその手に力を集めて、拳に炎を纏わりつかせる。轟！！

という音と共に発生したそれは、薄暗い路地裏を朱く照らし出す。

それを見た黒炎の破壊者は、余裕の笑みを浮かべ、持ち上げていた幼い男の子の体を横に放り投げた。

まだ、美紀と男の差は十メートル以上もある。それゆえの表情なのかもしれない。

そう感じた美紀は、足裏に溜めた力を爆発させる。靴の底と地面の間から炎が噴き出し、熱波を発生させながら文字通り爆発した。

爆風の後押しされ、美紀は宙を疾走する。それはとても早く、一瞬にして男の懐に侵入する事が出来た。

「……ほう」

「遅い！」

多少、驚いたように身を退かせた敵だが、もう遅い。

美紀は左足を相手の足と足の間に入れるように強く踏みこみ、朱炎を絶え間なく発生させているその左手で、脇腹を思い切りぶん殴った。

拳が当たった瞬間、オマケとでもいうかのように、そこが爆発する。

轟音が産声を上げ、ビルのコンクリートを震わせる。

余波で舞い上がった火の粉が吹雪のように視界を覆い尽くし、すぐ近くにいた相手さえ見えなくする。

暴風が髪をぐしゃぐしゃにかき乱すのが終わりを告げると、辺り

には静寂が立ち込めた。

いまだに視覚は使い物にならないが、それでも手応えはあった。これを喰らったら、絶対に

「ふむ。なかなか良いリバーブローだ。しかし、アレだ。女ゆえかな。重さが足りん。こんなものでは俺は倒れないぞ」

倒していると思った。のに、火の粉の奥から、不快しか纏わりつかないような声が聞こえる。

男は足を地面で叩いた。

力があらゆる方向に放出される。

それはあえて、言うならば、空気の塊を散弾させたかのように、美紀の体を余すところなく叩きつくす。

反射的に顔の前や胸の前を、腕で防御しようと試みる。

「は……あっ！」

当たった箇所のが骨が軋み、血が内部から込み上げてくる。

後方へと体を龜のように丸めたまま吹き飛ばされる最中、美紀は手を伸ばし、地面に着けた。

半円を描くように体をのけ反らせ、バク転の要領で地面に足を着地させる。

コンクリートの地面に二本のベルトを発生させながら、速度をゆるませた。

「……チッ」

舌打ちをしつつ、前方を確認。そこには男の姿はなかった。

そして、後方から空気を切り裂きながら襲いかかってくる上段蹴りを、彼女はあらかじめ予測していたかのように、地面に伏せてかわす。

「ほっ……」

この反応に、後ろからは面白そうな声があがる。避ける事が出来ないとも思っていたのだろうか。

「舐めんじやないわよ！」

片手だけで地面を掴み、それを支点にして体を一回転させ後方の

敵の足を払う。

両足が地面から離れた黒炎の破壊者は、ゆっくりと横に倒れる所だった。

そこで美紀は、右手を相手の顔近くに伸ばし、掌に力を溜める。

「はぁ！」

声と共に渦を巻いた炎が大男の顔を巻き込み、海中に発生した渦潮のようにそいつの体を回転させながら吹き飛ばし、コンクリートの壁に頭だけめり込ませた。

壁から生えた体は、痙攣しているのか時々、ピクンと震えていた。普通の人間相手だったら、確実に死亡しているであろうと思えるほど、そいつの頭は砂山に突っ込んでいるかのように深く根を張っていた。

「早く来なさいよ。どうせこの程度じゃ、駄目なんですよ？」

こいつらを徹底的にこの世から滅したいのならば、体のどこかに存在する核を破壊する必要がある。

レベルが低いシャドウやネオなら探す必要もないのだが、こいつはLV.3だ。それぞれで核のありかが違う。

それを探しながらの戦闘になるのだから、とても面倒だ。

やがて、浜に打ち上げられた魚のように微かに動いていた黒炎の破壊者は、腕を動かして頭を壁から抜き放とうと躍起になり始めた。ブチン！！ という嫌な音が灰色の塊に反響する。

それは、男が自分の頭を引きちぎった音だった。

腕をダラリと下げながら、胴体だけの化け物がこちらを振り向く。その背後には、埋め込まれたままの頭部が残っていた。

血等は垂れない。こいつらは化け物だから。

「相変わらず、気持ち悪い体の構造してるわね。頭部がなくても動くなんて、ゾンビみたいじゃない？」

「泥人形　ゴーレムの方がどつちかという合っている気がするな」

声はどこからか発せられている。

美紀は肩を竦め、額に手を当てる。

「核のある場所を教えてくれたりはしないかしら？」

「教えるわけがないだろう」

「そう。残念ね……」

右手に炎が揺らめく。

「だったら、あなたの体全部を調べるのは面倒だから、焼きつくすしか方法がないじゃないの」

「やれるものなら、やってみるがいいさ」

「ええ」

首から上がない化け物と、美紀が対峙する。

美紀の体から朱い火の粉が舞い、空气中を淡く照らし出す。

「今度はこっちからも行くからな」

肩を回し、ゴキゴキと音を鳴らす男。そいつは不敵に微笑み、薄暗い空間にお似合いの黒い火の粉を発散する。

風が吹き、横で力なく倒れている一般人の髪が揺れる。埃が舞い、上空へと逃げ出して行った。

それらの現象が突如として止まると、彼女達は一齐に動き始めた。足裏を爆発させて急接近してくる美紀に対して、男は右腕を軽く水平に振るう。

それだけで禍々しい黒い炎の壁が地面から生え、壁と壁の間を埋め、行く手を阻んで来た。

美紀は踵と地面を触れさせ、摩擦によって速度を殺す。火花が靴から散っていたが、これくらいでは壊れない。

壁が視界を遮り、相手の姿を確認する事が出来ない。

どこから攻撃が飛んでくるか分からないという恐怖に、額に汗が滲んできた。

神経を最大まで研ぎ澄まし、攻撃の予兆を聞き逃さない。

ひゅ、という風斬り音。

方角は上からだ。

視線を上げ、相手の姿を視認する。そいつは、壁の上を飛び越え

てくる所だった。

黒いコートを風に揺らめかし、重力の落下に逆らわう事はせずに足を下にしたまま落ちてくる。

一見すると、偉そうな格好をした銅像が、宙から降りかかってくるような感じだろうか。

相手の意図はいまいち掴めないが、それでも美紀はあいつの落下地点を予測して後ろに跳ぶ。

美紀の数歩前に、そいつは落下した。コンクリートの塊を巻き上げ、音をまき散らす。

「ッ！？」

背中に嫌な感覚を覚え、とっさに振り向く。

黒い蛇のような物が、大きな口を開けて襲いかかってきていた。

「ふっ！」

背中をエビのように反ると、それは鼻先を通過していく。

「隙だらけだぞ？」

近くから男の声がする。反った体勢のまま横目でそちらを確認すると、男が手をこちらに向けてきていた。

その先の宙には、黒い塊が浮いている。

「これで、死ぬかもな」

無慈悲に発射された塊。それは、不安定な姿勢の美紀には絶対にかわせないもののように思えたが、彼女は足で地面を蹴り、地面に寝転ぶように倒れこんだ。

「ほうほう、なるほど」

確かにこれで、一撃目を避ける事はできた。

受け身を取る暇がなかったので、後頭部を地面に強く打ち付けたがさっきの炎を食らうよりはマシだ。

しかし、地面に横たわったままの状態では、これからの行動に繋げる事が出来ない。

男の歪んだ顔が、自分を見下ろしてくる。

ヤバイ。

直感的にそう悟り、少しでも早く体勢を立て直そうと後転の要領で転がり、膝を屈めた状態で座るような恰好をとる。

顔を上げた先にきたものは、固い靴の爪先だった。

眉間の辺りにそれが突き刺さり、痛さを通り越して患部が熱くなる。

首だけ後ろに跳ね上がり、その勢いはなくならないまま体も跳ね飛ぶように吹き飛ぶ。

宙で無意識の内に一回転して、後頭部を強打した。

「か……はっ」

息をしようと思っても、上手く吸いとれない。吐きだすばかりで、脳が酸素不足を訴えかけてくる。

眉間を濡らす温かい液体。それが鼻という障害物を回り込み、口の中に侵入したり、顎先から服や地面に落ちる。

(こいつ……攻撃パターンが読み辛いわね)

働かない頭を必死に動かし、思考を繰り返す。

さっきの黒い壁の時もそうだった。せっかく、自分が相手から見えない位置にいるのに、なんでそれを有効活用しないのだろうか。

上から落下してくる意味も分からない。

能力に頼らず、肉弾戦を望んでいるわけもない。なぜか、違和感がある。

しかし、こんな思考なんて意味があるのだろうか。体に指示を送っても、全く動いてくれる気配はない。

さっき食らった一撃で、それほどまで体力を消耗してしまったのだろうか。

「今度こそ死ぬかもな」

声が、のぼせたような脳内に響く。

新藤鏡夜は昼間から家でゴロゴロしていた。

昨日の夜の感情を思い出す。

あそこまで悔しいと思ったのは、あの事件以来だった。あんなに自分に絶望して、涙すら流しそうになたのは。

「は……」

正常な呼吸の仕方を忘れてしまったかのように、さっきから溜息しか出ない。

ベッドの上で寝返りをうち、窓に顔を向ける。

大きな交差点があり、そこを忙しそうに車や人が走って視界の端に消えていく。

これが普通の世界の歯車。

人が大勢死に、それが当たり前になっている歯車もある。

そんな、異常な世界の歯車は、今もどこかで回っている。 クルクル 狂狂と。

机の上に載せていた携帯が、軽快な音楽を奏で始める。

(この着信音って……アドレス帳に登録してないやつからだよな)

ぼんやりとそんな事を考えながら、青色の光を灯して着信を知らせているそれを眺めた。

(面倒だから出なくてもいいか)

などと考えていても、いつまでも電話は鳴り続ける。留守電には繋がらないようになっていいるから、放っておけばいつまでも自己主張を続けるはずだ。

もう一度、溜息を吐き、もそもそとベッドから起き上がる。

机に歩み寄り、携帯を開いた。見た事のない番号が表示されている。

登録してないのだから、怪しい人からの可能性が高いかな……などと適当に思考してから通話ボタンを押した。

『もしもし、お猿さんなのですか?』

「その呼び方で誰か分かるなんて、凄く珍しいと思う。というか、どうやって俺の番号を調べた」

電話の相手は神原だった。

第一声に猿とか言われて頭に血が上りそうになったが、それを感じない振りをする。

「なんの用だ？」

『新ど……家畜様に伝えたい事がありますのです』

「うん、その前に一つ。なんで新藤って言いかけたのに、わざわざ最低な呼び方に言い換えた」

『小さい事を気にしてはいけないのです。それだから童貞なのです』  
『よ』

「関係ねえだろ!!」

なにしに電話してきたのこいつ!! と、鏡夜は携帯を強く握りしめる。今すぐにでも叩きつきたい衝動に駆られた。

『そうそう。本題入りますのです。前原様が、ちよつと危ないので。死にそうな感じなのです』

「は？」

『だからdieしそうなのです。この世とグッバイなのですよ』

「冗談か？ イタズラなら切るぞ」

『本気の本気なのです。死んだらミトコンドリア様のせいなのです』  
『ね』

「……だったら、もうちよつと緊張感を……って、マジなのか!？」

「だったら……」

「だったら、どうする気だ？」

「あいつらと違って、能力もないのに？」

（だったら……どうする？ 俺になにが出来る？）

「助けにでもいくつもりだろうか。能力を使えないくせに。」

「行ってもどうせ、足手まとい。あいつの死ぬ確率を増加させるだけかもしれない。」

「自分にはどうすることもできないのだ。」

（俺には、人を助けに行く資格がない）

唇を噛みしめ、手に力がこもる。握られている携帯がミシミシと悲鳴をあげた。

「だいたい、この神原とかいう女は、なぜ自分に電話をかけてきたのだろうか。」

東川兄妹にかけたほうが、よほどあいつのためになるだろう。

『どうかしましたのですか、アオミド口様』

「俺が助けに行けるわけないだろ。他の奴に頼んでくれ」

『そうですね……。残念です。もしやる気になったのなら、あなたに有益な情報を伝えるはずだったのですが』

「情報……？」

『赤い髪に赤い瞳。絶対零度のような笑みを携えた人間。ここまで言えば分かりますですか？』

「……そいつって」

思い出す。

家族を皆殺しにしたあいつの容姿を。

『行くか行かないかは、新藤様が決めることなのです。私は強要しないのですよ。それでも、一応、あなたの携帯に地図情報を送らせていただきます。そこに行けば、きっとわかりますのです』

通話が切れる。

少し後、握りしめていた電話にメールが届いた。

それを開いて、添付されていたものを見る。

この街の地図に、赤い点が表示されていた。

「ははっ」

鏡夜は暖かい昼の陽光が差す街の中を走っていた。

これから、なんの能力もなしに戦いの地に向かうというのに、その口元は緩んでいた。

嬉しい事があったから。

神原は、地図上に表示されている赤い点の場所に行けば、なにかが分かるかもしれないと言っていた。

やっと、あいつに近づく事が出来る。そう思うと自然に笑みがこぼれる。

（探し求めていた）

友達と他愛のない話をしながらも、頭の中は常に黒一色だった。どす黒い感情がずっと脳みそを駆け回り、あの日の光景が再生さ

れ続けていた。

携帯の画面に映し出される地図を眺めながら、大通りから少し外れた道に入る。

ビルとビルに挟まれた細く薄暗い道は、普通の人には絶望へと続くものしか見えないかもしれない。

しかし、鏡夜にとっては、希望への道のりだった。

ここをまっすぐ行って、少し左に曲がれば、目的地に着くはずだ。  
(もうちょっとだ)

左に曲がり、路地裏に入り込む。目の前にある真っ直ぐ伸びる道は、両端に電灯があり、それに沿うようにコンクリートの壁が存在している。

(絶対に見つけ出して)

胸の内に膨れ上がる感情を抑えきれない。心が爆発しそうだ。

(殺してやる！)

なにも考えずに走っていた鏡夜は、なにか変な感覚を全体で味わった。

そう思った瞬間、景色が一気に変わる。

確かにさっきまでは、周囲の路上になにもなかったはずだ。

しかし、今は。

地面に力なく横たわる無数の人間。横の壁には、なにかが激突したかのようにへこんでいる場所が散見された。

(なるほど……これがサーチレスの外と中の違いなんだ)

そう考えつつ、倒れている人間を見つめた。そこには小さな男の子などが含まれていて、ゾワツと背筋を寒気以外のものが通過していく。

(こんなにもたくさん人間を殺したのかよ)

人間をまたぎ、前方にいる首から上がらない男と目を合わせるように睨みつけた。

(駄目だよな。俺には怒る資格もないかもしれない。だけど)

拳は無意識の内に握られ、眉間にはシワを寄せた。

壁の横を通過した時、なにか頭部のようなものが埋め込まれているのを見つけた。

(やっぱり許せねえ……)

首なし男に掌を突きつけられたまま、自分を凝視してくる少女と目が合った。

彼女は口をパクパクさせて、なにかを伝えようとしてくる。しかし、読唇術を心得ていないのでなにも分からない。

だから、少年はそれを無視した。

「絶対に許せるはずがねえ！」

少し前にいる黒いロングコートを羽織っている大男が、ではない。こんな状況を、力が無いからと見て見ぬ振りをしようとした自分を、だ。

頭が無い男は、体だけこちらに向けてくる。

「ほほう。お前はこの前、アパートに住んでいた少年だな？　ここになにをしに来た？　もしかして、こいつを」

男は美紀の顎を踵で軽く蹴り上げる。

「助けに来たとか。そんな寝言をほざく気か？」

手足を放り投げ、悔しそうに目に力を入れる美紀を、鏡夜は一瞥し、肩を軽く竦める。

「別に。そいつを助けに来たわけじゃねえよ。これは俺の都合だ。その生意気女なんて、二の次に決まってるだろうが」

足は震えない。声も震えない。やるべき事が見つかったから、もう後先考えずに行動する。

「ほう……。ではなにをしに来た？」

鏡夜は一步、前に踏み出した。

「さつきも言ったよな？　これは一身上の都合だ。俺に利益があるから、ここに来た。それに今、殺したい奴を再確認できた。で、本命の前に、ちよつとした余興を行おうと思つてさ」

「なるほど。その余興とはなんだ？」

「ははっ。そんなの決まってるじゃないか。人を殺しまくつた犯人

に、ちよつとした罰を与えようかな、と思つてさ」

「面白い。では、なんの能力も持たない男が、どうやって勝つかを見せてもらおうか。では、始めようか。楽しい楽しい殺し合いを、な」

「上等だ。だけど、始めるのは殺し合いじゃねえよ」

鏡夜は、高ぶる精神を落ち着かせようと、軽く深呼吸をする。

先に動いたのは鏡夜だった。

足に出来る限りの力を溜め、膝を折り曲げる。バネをイメージして、極限まで縮んだ所で一気に力を解放させた。

「うおおお！！」

吠え、自分を鼓舞する。

鏡夜自身が出せる最大の速度で相手に近寄ろうとした。しかし、男はなにも動く気配がない。

数歩で相手の懐に入った鏡夜は、そこで止まる事はせず更に足へと力を込め、一瞬だけ最高速度以上を出して相手に突っ込んだ。しかし。

「遅い」

どこから来たか見えなかった。

それほどまでに速い衝撃が、右頬を襲う。

蹴られたと分かったのは、体ごと吹き飛ばされ、壁に激突してからしばらくした後のことだった。

右頬の感覚がなくなるほどの、凄まじい威力。奥歯の何本かが折れたのではないかと錯覚してしまう。

唾を吐き、口の中で粘つくものの正体を確認する。

真っ赤な唾液が灰色の地面に着色されただけだった。

「はっ」

鼻で笑い、歯が折れて無かっただけでも幸運かと、良い方向へ考える。

頭を打ち付けたせいでふらふらしながら、歪む視界でなんとか男を補足しようと思った。

「ッ!？」

あいつを補足する前に、黒い炎の球が唸りを上げて襲いかかってきていた。

空気を巻き込む音を立てながら接近してきたサッカーボールぐらいの大きさのそれを、横に転がる事によって回避する。

(よし、このま前に突っ込めば　!!！)

瞬時に起き上がり、相手を補足してから走り出す。

「弾ける」

その声が聞こえた途端、球体から様々な方向へ蛇のような頭が突出する。

そのまま放っておけば壁にぶつかるはずだったのに、その寸前で球が破裂したかのように分か、れ無数の蛇へと変貌し、宙を飛んで襲いかかってきた。

「ち、くしょ……!!！」

前に体重を傾けていたので、いきなり進路を変更する事は出来ない。

そのせいで、背中に黒い蛇が噛みつく。

「あ……ぐう！」

鋭い牙で噛まれた痛みと、灼熱を連想させる熱さが同時に襲いかかってきた。

走ることどころか、思考を継続させる事さえ不可能になるほどの悲鳴を体があげ、鏡夜はその場で崩れ落ちるように地面へと突っ伏した。

痛みが麻痺してきたのか、背中にはなにも感じなくなる。

「ははっ」

だが、笑みは自然と漏れた。ここまで一方的に攻撃されながらも、まだ戦意は失っていない。

「本当、情けねえよ」

震え始めた唇を酷使して、言葉を紡ぐ。

途切れ途切れだが、音は鮮明に空気を伝って男の方へと届いた。

「いやいや、情けなくないぞ。無能力者の少年が、まだ生きている事は素晴らしい事だ」

「お前に言われても、嬉しくねえな」

立ち上がろうとして、しかし足が命令を受け付けない。

足を力の限り殴り、無理やり命令を利かせ、なんとか立ち上がる。足もとに力が入らず、ふらふらしているが、それでも必死に、死に急ぐかのように体を起こした。

そんな鏡夜の姿を見て、黒炎の破壊者は愉快そうに目を細めた。

「ぎゃっはははは！！ いいぞ、いいぞ。この感じ！！ 何度やられても、立ち向かってくる敵。最高じゃないか！！ 俺はこういう戦いを望んでんだ！！ さあ、かかってこい、少年！！ そこから逆転できるものなら、してみやがれ！！」

「言われなくても、行ってやる」

いつのまにか、鏡夜の背中に噛みついていた炎の蛇が消えていた。焼けただれた肌や、焦げた服だけがあの技の脅威をものがたっている。

歯を食いしばり、気を失わないように思考を止めない。一瞬でも気を抜けば、その時点で死に繋がってしまう。

また走り出そうとした鏡夜の耳に、美紀の声が届く。

「止めなさい！ あたしでも手こずる相手なんだから、あんたがやつても無駄死にするだけよ。あたしの事はいいから、さつさと逃げなさいよ！！」

いつもの不機嫌な声とは違う。心底、鏡夜の事を心配しているような感じの声音。しかし少年は、冷たく言い放つ。

「『あたしの事はいいから、さつさと逃げなさい』？ ハッ、ふざけるな。さつきも言っただろうがよ。別にお前を助けに来たわけじゃねえんだよ。お前なんて二の次だ。ここには俺が望んで来て、望んで戦ってるんだ。お前なんて関係ねえんだよ」

もう、これ以上なにも言わない。言う事がない。だから鏡夜は、視界から美紀の姿を消すよう心がける。

霞む視界。だけど、思考はさつきよりも早く鋭く回転する。なにをすればいいのか、だいたい分かってきた。

心臓の辺りが熱くたぎる。

唾を吐き捨て、前方を見据える。頭のない化け物が、こつちを向いていた。

そうだ、この感情だ。

最初にあいつらに襲われた時の感情。それは確かに『殺意』だった。

しかしそれは、相手を殺すためのものではない。味方を守るために感じたものでもない。

鏡夜はただ単純に。

なにも出来ない自分に腹が立ち。

殺してやりたいと、自分に『殺意』を向けた。

自分を殺すために生まれた殺意。それは、最凶の感情。他者に向けるではなく、ただただ、自分に向ける。

(分かってきた。このせいで、能力が発動しなかったんだ)

他者に向ける殺意と、自分に向ける殺意は、感情は同じだがその矛先が違う。

その違いのせいで、能力が発動しなかった。じゃあ、今は？

服の胸元を引っ張り、そこにあるはずの鎖でネックレスのようになっっている指輪を確認する。

それは、白い空間でみたような、様々な色を発していた。

しかし、暗闇を照らすような明るい光ではない。ロウソクの光のように頼りなく、吹けば消えてしまいそうなもの。

だから、服の下で発光していても分からなかったのだ。

「なにをにやにや笑っている？」

男に言われて初めて気付いた。

自分の頬に手を当ててみると、頬は少しだけ吊りあがっていた。

「別に、なんでもねえよ」

「ふん、頭でもおかしくなったか？」

鏡夜はふらつく足に力を入れて走り出した。目指すは、首なし男。「ぎゃははは！ 策もなしに突っ込んでくるなんて、本当にイカレちまったのか？」

コンクリートの地面を足で掴むように踏ん張り、右拳を振りかぶる。

黒炎の破壊者は、その姿を見ても余裕の笑みを浮かべていた。またさっきのように、遅れて攻撃でもしてくる気なのだろう。

しかし。

それでは駄目だと、鏡夜は感じていた。

脳裏に蘇って来るのは、初めてこの能力を発動させた時の事。もし、あの通りならば……。

「あああああ！！」

踏みこみ、腰の回転を生かし、強く握った拳を突き出す。

「遅い！」

今度は、自分の拳を鏡夜の拳にぶつけてきた。宙で激突し、少年の手には少しだけ衝撃が返ってきた。

そして、

パアアアン！！ という、風船が割れるような音が細い道の間を通り過ぎる。

「なっ！？」

驚きの声を上げたのは鏡夜ではなく、黒炎の破壊者だった。

それもそのはず。力や速度ではこちらが圧倒的に上回っているのに、自分の右拳が『消滅』させられたからだ。

核を破壊されたわけではない。それほどの強力な力が、鏡夜の拳に宿っていたわけではない。

ただ、風船を針で突き刺して割るように、軽々と、自分の腕が破壊された。

こんな少年に、そんな力があるわけがないという驚きのせい、そ

の事実を認識するのに数瞬の時が必要だった。

そのわずかな時間の間に、鏡夜は次の行動に出た。相手の体の一部を破壊したその右手を後ろに引き、その回転を生かした左拳を下から上へと振り上げた。

「おっと」

しかし、それでも遅かったらしい。混乱からいち早く抜け出した首無し男は、数メートル後ろまで一気に跳んだ。

空振りした少年の攻撃が紙一枚分もない間を空けて、通り過ぎていくのを確認し、

「はあっ！」

破壊された右腕を再生させる。

「うわぁ……気持ち悪い」

その様子を見ていた鏡夜は、一時的に動きを止めてでかいクモを見るような目つきをしながら呟いた。

「気持ち悪いとはなんだ。せめてキモイと言え」

「どっちも一緒だろ」

「そうだ、な！」

会話の途中で、黒炎の破壊者は黒炎で作った、巨大な球を作り出し、轟！！という音を発生させる。

収縮しながら空気中の酸素を巻き込み、さらに巨大化していくそれを、鏡夜は冷めた目で見つめる。

なにをするべきか、頭の中にイメージが湧いてくる。

胸に下げた指輪が、黒い光を発する。

その瞬間、炎が鏡夜の体を荒々しく包み込む。すべてを焼き尽くすまでその揺らぎを止めないような、業火を連想させる。

しかし、それは唐突に終わりを迎える。

少年の体を余すところなく包んでいた黒炎が、上の方から空気に溶けるように消えて行ったのだ。

そしてその中心。そこに立っているのは所々、服を焦がし、髪もチリチリになり、肌には火傷を負っている、鏡夜だった。

外面的には特に重症という感じはしないが、炎を吸いこんでいたとするのならば、内面的にダメージはでかいだろう。

ゴホッ、と一回だけ咳のようなものをして、鏡夜は重たい足を引かずった。

さっきの攻撃はかわす事は出来た。しかし、そうしてはいけないという直感にも似たなにかが、そう告げたのだ。

だから、わざと喰らった。思ったよりはダメージは少なかったのだ、それは良しとする。

鏡夜はこいつと戦って、疑問に思っていたことが確信に変わるのを感じていた。

「お前さ、能力と物理攻撃を一緒に扱えないんだろ」

一歩踏み出した鏡夜は、自信に溢れた発言をする。

「なんの根拠がある」

「だって、さつきからおかしいじゃねえか。物理攻撃と能力を一緒に使ってねえ。俺が変な蛇みたいな炎から逃げている最中にも、お前は何回でも攻撃できるチャンスはあったんだ。なのに、してこなかった。なんでだろうな？」

「俺はな、人の苦しむ顔を見るのが好きなんだよ」

シラを切るつもり黒炎の破壊者から視線を外し、少し遠くの壁に寄りかかるようにして立ち上がっていた前原美紀を見る。

「お前もさ、そんな違和感を感じてたんじゃねえのか？」

鏡夜の言葉に、美紀は微かに考え込む仕草を見せる。そしてなにかに行き着いたのか、「あっ」という声を出して、傷を負っている場所が痛み始めたのか、苦痛に顔を歪めた。

片目をつぶり、痛みを堪えながらも美紀は言葉を紡ぐ。

「確かにそうね。それだったら、炎の壁を出して、わざわざ上から落下してきた理由も説明出来るわ。能力を発動させている間は、物理攻撃をできないから、跳び上がって落ちてくるのを攻撃に利用した、という所かしらね」

そこまで言って、悔しそうに歯を食いしばる。プライドだなんだ

と言って、頭に血が上っていたせいでこんな簡単な事にも気付けなかった自分自身に腹が立ったのだ。

鏡夜はそんな彼女から、黒炎の破壊者へと視線を移す。

「だってさ。俺の仮定は証明されたわけだ」

ついでに、もう一つ。と、鏡夜は人差し指を立てた。

「お前は、能力を使っている時に、動く事は出来ねえ。さつきそいつが『上から降ってきた』って言ってたけど、それって能力を発動させた直前に高く跳んで、落ちてきただけなんだろう？ ははっ、ないんだ。お前、欠点だらけじゃねえか」

能力を使っている間にも動けるのならば、鏡夜はとっくの昔に死んでいてもなんら不思議ではない。

鏡夜の言葉に耳を傾けて どこに耳があるのかは分からないが

いた男は、肩を竦めてみせた。

「それがどうした？ もし、その通りだとしてもだ、なんの能力も無い一般人にはどうする事も出来ないぞ？ ……いや、待て。なんでお前には、俺の攻撃が当たる？ お前は、能力者なのか？」

「どうも、そうらしいぞ」

鏡夜は、黒い光を放っている指輪を、服の中から出した。

それを見た男は、最初は感心したような声をだしていたが、やがて見下すかのような声を出してくる。

「だからか。だから、さつき、俺の腕が消滅させられたのか。なるほどなるほど。これで合点がいった。で？ お前の能力はなんだ？」

「さあな……」

もったいぶっている訳ではない。名前なんて分からないし、具体的に説明してみると言われても、なんと言っていいか判断できないものなのだ。

ただ、ここをこうすれば、こうなる。といった類のものが、脳内に映像として送り届けられるだけである。

「それじゃあ、駄目だろ。自分の能力ぐらい、自分で把握してるよ」「忠告ありがとう。で？ もうそろそろ、いいか？」

負ける気がしない。

こいつがこの程度の能力者ならば、絶対に勝てるはずである。そう、鏡夜は確信していた。

「ああ、いいぞ。さっさとかかってこい」

「上等だ」

首から上がない人物に走り寄る。

鏡夜の指輪が黒と赤の光を同時に発し、薄暗い路地裏を淡く照らし出す。

今度は男の方からも突っ込んできた。でかい図体のくせに、重量を全く感じさせないほど軽い足取りで、たったの三步で距離を詰めてきた。

「お前の能力がなにか分からないが、それでも俺には絶対に勝てん！」

身を屈めて繰り出してきた下段蹴り　というよりは足払いに近い攻撃を、鏡夜は全身する勢いを殺す事無く跳び上がって、そのまま相手に体当たりする事によってそれを避ける。

黒炎の破壊者の体は、鏡夜に触れた部分だけ、パアアアーン！　という悲鳴を上げて消滅していく。

「な、なんなんだ、その能力はあああ！！」

胴体から上が無くなってしまっても、男にはまたもや一瞬にして新しい体が生えた。

首から上だけは再生しないそのいつの肩に狙いを定めるかのように、立ち上がった鏡夜は掌を向けた。

「知らねえよ」

冷たく言い放った少年の手から、黒い炎が噴き出し、一直線上にあつた化け物の肩を焦がした。

「あぐっ！」

男の声に、初めて痛みに喘いだようなものが混ざった。

一応、こいつにも痛覚というものは存在しているらしい。だからといって、手を休める気はないが。

「なんでお前は、二種類の能力を使えるんだ！ 一つの人格に一つの能力というものが常識だろうが！！ お前は炎の他に、違う能力を持っている。なんでだ！？」

「だから、知らねえって」

氷のように冷たい声を放ち、鏡夜は足で黒炎の破壊者の腕を踏みつぶす。

例の音を立てて、腕が消滅した。しかし、すぐに再生する。それは、超高速で、トカゲの尻尾が元に戻るかのようだ。

「ははっ、キモいな」

「舐めるなああああ！！」

地面に寝転んだまま、首無し男は手刀で空気を切り裂くかのように、腕を上下に振った。

「うおっ！？」

その瞬間、鏡夜の体に、ドン！！ という重い衝撃と肌を焦がす熱が襲いかかってきた。

その場で足に力を込めて踏ん張ろうと頑張った鏡夜だったが、その努力も虚しく、枯れ葉のように宙を舞い、飛んで行く。

「……ガハッ」

冷たい地面に叩きつけられ、酸素を吐き出す。そのせいで目が眩み、頭がくらくらしてきた。

「くっそ……！！」

無理やりに体を起こし、酸素を急激に吸い込む。

必要な酸素を取り込むと、視界が鮮明になってくる。

一番最初に飛び込んできたのは、足の裏だった。

とっさに右手を動かして、その足を受け止め……ようとしたのだが、勢いを殺す事ができずに、自分の手ごと顔面にぶち当たる。

一拍遅れて、風船が破裂するかのような音が炸裂する。

顔に直撃したその衝撃に耐えきれず、鏡夜の体は地面と再開する。

「捕まえたぞ！！」

「あぐつ！」

その瞬間を狙われて、首をでかい手に捕まれた。ギリギリと力を込められ、息を吸い込むことさえ困難になる直前、男の腕が朱炎によって消し飛ぶ。

驚いたような顔をしている男の後頭部を、足を振り上げて蹴り飛ばし、体の上からどかした。

「ゲホツ！ ゲホツ！」

今回は能力が発動しなかった。なんでなのだろうか。なにか発動条件でもあるのだろうか。頭の中のイメージからは、なにも汲み取る事は出来ない。

鏡夜の横で、脇腹を蹴られた痛みにより少しの間だけうなっていた男は、怒りを露わにして美紀が倒れている方を見つめた。

「邪魔をするなあああー！」

再生された手から黒炎が噴き出し、一直線に美紀を狙おうとしたのだろうか。しかし、なにかの拍子にふらついたおかげで、それは美紀に直撃する事はなく、その背後にある壁を破壊する。

しかしそれでも、美紀の体の上には、無数の石の雨が降り注ぐ。降ってくる固い雨からの衝撃から頭を守るために、美紀は手で覆い隠す。

「前原！！！」

鏡夜のそんな声は届いたかどうかは分からない。しかし、美紀は雨で造られた海の中に沈んでしまった。

「くそっ！」

そっちの方に気を取られていた鏡夜の鼓膜を、男の声が揺らす。「人の心配をしている場合か！！！」

ドン！！ と、微かに感じる熱さと、衝撃が襲ってきた。

背中を反らしたまま、少年は少しの間だけ空中を飛ぶ。その速度が落ちてくると、体で地面を削った。

「は……あっ……！」

息を上手く吸い込む事が出来ず、涙が溢れ出て来る。体力をかな

り奪われてしまったのか、力が全く入らない。

地面を転がり、少しでも痛みを緩和しようと試みたが、まったく効果は上がらない。

「……畜生」

鏡夜の体内で燃えたぎる黒い感情だけが先走り、体に命令を送ってくる。しかしそれでも、動かない。

地面に手をつき、腕立て伏せのように上半身だけ持ち上げた。しかしそれも一瞬、すぐに潰れてしまう。

そんな少年の後ろから、足音が聞こえてきた。

それは、確実に破滅を導いてくる、敵のもの。

(……こんな場所で、死ぬわけにはいかねんだよ)

自分にはまだ、やらなければいけない事がある。

「ぎゃはははは！ どうした！！ もう、降参か！！」

「まだまだ……」

歯を食いしばる。

死ねない。死ねるわけがない。それに、こいつは倒さなければならぬ。

そうしなければ、情報が得られないのだから。

指令を送ってみる。

指先だけ反応した。それを見て、まだいけると感じる。

やられてやられて、またやられて。どんなに痛めつけられても立ち上がって。

全力を振り絞って、指一本動かさなくなつて、それでも勝てないのならば、仕方がない。諦めがつく。

だけど。

(まだ、動く)

指先だけ、なのだが。

(動く。だったら)

諦めちゃ、駄目だ。

諦めるのならば、ボロ雑巾以下になつてから。そうでもしなければ

ば、絶対に後悔するのだから。  
同じ死ぬにしても、後悔を残してはいけない。  
だから。

「あ……あああああ！！」  
血反吐を吐きながらも、再び、立ち上がる。起き上がったも、ど  
うせまたやられるだけなのに。

そんな簡単な未来くらい、誰でも予測できるのに。  
少しでも後悔が残りそうなのならば　　まだ抗う術があるのなら  
ば、新藤鏡夜は諦めない。

「おお……。いいぞ、いいぞ、少年！！」

目の前の男は、心底楽しそうに笑い声を上げる。  
しかし、鏡夜の心の中は、それとは正反対に凍てついていた。  
冷静に、今までの戦闘の間感じていた違和感を、頭の中で整理  
する。

そして、一つの結論にたどり着く事が出来た。

(動け……動け……)

足は痙攣し、立ちあがっただけでも奇跡だと訴えかけてくる。

(足なんて折れてもいいから……数秒だけでもいいから、動いてく  
れ！！)

引きずるようにして、足を動かす。一步、踏み出しただけで、体  
が揺らぎ、横に倒れそうになる。

(倒れちゃ、駄目だ)

目の前の男が拳を振り上げた。

(残った、ほとんどの力を足に込めて、体重を支えろ)

首無し男が、雰囲気だけで笑ったような気がした。

(もうちょっと……動け)

男が足を踏み込んで、拳に力を溜める。

(動いてくれ)

拳を振りぬいてきた。

「動けえええ！！」

叫びと同時に、足に力が戻ってくる。迫ってきた拳を寸前の所で身を屈めて避け、男の胴体に触れて、そいつを二つに分離させ、そのまま壁に　正確には、変な窪みがある場所目がけて走り出す。

「しまった!!」

男が慌てたような声を出す。

そのおかげで、鏡夜は自分の推測が間違っていない事を確信する。壁まで後、数メートル。

そこまで一気に走る。

足で踏ん張る事ができず、そのまま壁に激突してしまったが、それでも構わない。

「はあ……はあ」

息を切れさせながら、右手を壁に。その窪みに。そこに埋まっている、あいつの頭部の近くに置く。

ずっと、気になっていた。

なんで、腕とかはすぐに再生させるのに、頭部は無いままなのかと。

もしかしたら、なにかの理由があって再生できなかったのかもしれないと考えた事もあったが、さっきの慌てようでは、それはない。

だったら、答えは一つ。

わざと再生させなかった。

その方が戦闘を有利に進める事ができる可能性があるから。

「止める!!　それを破壊するな!!」

「ははっ。なんだよ、やっぱりこれに『核』っていうものが入っているのか?」

今頃、胴体が復活した黒炎の破壊者が走ってくる。

確かに速いが、それでも鏡夜が手で触れる方がずっと早いに決まっている。炎を出すと、なにかの拍子で自分の頭部さえ壊してしまう可能性があるから、あいつは能力を使えない。

だが、少年はその頭部を触らない。聞きたい事があったから。

「なあ、なんでお前は、人を殺すんだ?」

これが聞きたかった。この前、本部に行つた時に偉い人は言つていた。

こいつらが人を殺す理由は、ハッキリしないと。一匹一匹で、違つた解答をすると。

「はあ！？ そんなの決まってるだろ！！」

「……なんだ？」

「食糧だ！！ 腹が減るから食うんだよ！！」

「そうか」

その言葉を聞いて、鏡夜は裏拳のように左拳を振るつて、頭部を消滅させた。爆風が吹き荒れる。

「あ……がつ……」

男の勢いが途絶えた。その場で膝をつき、手で体を押さえる。

足の先が、空気と同化するように、徐々に薄くなつていき、後ろの背景が見えるようになってくる。

そんな黒炎の破壊者に、鏡夜は言葉を伝える。

「別に、人間を食料にしたつて構わねえよ。俺たちだって、別の生き物を食べて生きてるわけだし。この世は弱肉強食。だけど……いた、だつたら分かるよな」

消えていく。徐々に、しかし確実に。黒炎の破壊者が。

「弱かつたら、生き残れねえんだ」

「ぎゃはははは！！ 確かにその通りだ！！」

その言葉を最期に、男は完全に消え去つた。

「あ……」

生き残れたという安堵感から、鏡夜は地面に寝転がる。

と、そこで、今まで向こう側にいなかったはずの東川が、こつちに向かつて走つてきていた。

「鏡夜くん、大丈夫！？」

「あ、ああ、なんとか」

近くに寄つてきた彼女は、鏡夜の上半身を起こし、心配そうに顔をのぞき見てきた。

(照れる……)

東川はなにも思っていないのかも知れないが、顔の距離が結構近い。

「やあ」

「あつ、光輝さん」

東川妹の後ろから顔をのぞかせた東川光輝は、周りを窺って誰かを捜しているようだ。

「前原くんはどこ分かるか？」

「あいつなら、あつちの瓦礫の下に……」

「そう。じゃあ、俺が見に行くから、新藤くんはそこで幸せでも噛みしめてればいい」

「あ、あははは……」

変な事を言われた気もしたが、もう、なにも返す気にはならない。光輝が鏡夜の指し示した方向に行こうとした直前だった。

「あーあ、ぼくの邪魔しないでくれるかな」

鈴のように透き通る、綺麗な声が響いた。

今、この場にいる知り合いからではない。

第三者の声が、どこかから聞こえてきた。

「あ、あれって……」

素早く音の方向を見極めた東川が、近くにあるビルの屋上を見て、驚愕の表情を浮かべた。

鏡夜も、そつちの方に視線を向けて、口を大きく開け、数秒、息をすることも忘れてしまう。

屋上の端に座り、足を宙に投げ出しているそいつは。

赤く、紅く、朱く。

業火を連想させるように、風にたなびく長く赤い髪。

劫火を連想させる、深く、紅い瞳。

そして、太陽のように朱く明るい笑みを浮かべている。

「あの野郎……!!」

最後の場所だけ過去の記憶と関連させる事はできないが、それで

もあの容姿は忘れない。

父を、母を、弟の夕夜ユウヤを殺した人物。

ずっと捜し求めていた、もっとも殺してやりたい犯罪者。

自分の人生を大きく捻じ曲げたそいつが、頬笑みを携えてそこに座っていた。

「このLV・3なら、いいところまで行くと思ってたのになー。まったく、その少年！！ 君はちよつと邪魔だよ」

その声を聴き続けていると、憎しみが体を支配し、もうどうやっても力が入らないと思っていたのに自然と力が湧き上がり、動くようになった。

東川の腕をどかして立ち上がった鏡夜は、あの日の光景を思い出しながら歯を食いしばり、憎しみを最大にまで込めてそいつを睨みつけた。

「独りぼつち（オンリー）……？ おいおい、嘘だろ。なんでこんな時に出てくるんだ」

東川光輝が呟く。

しかし鏡夜の耳にはそんなもの、大音量で流れる街中の騒音のようになんかでもよかった。

ただ、見つめる。

と、いきなりそいつが消えた。

最初からあの屋上の端にいなかったかのように、忽然と姿を消し、しかし突然、シユン、という音を出しながら、甘い香りを漂わせて鏡夜の横に姿を現した。

「っ！？」

そのいきなりの行動に驚いた鏡夜は、思わず二、三步後ずさる。

そんな少年の胸元で光る指輪を見て、そいつは優しい目つきを細くした。

「あつれー？ それってぼくの指輪じゃないかな？ なんて少年が持っているのかな」

「……覚えてねえのか？」

「なにをかな？」

「三年前、俺の家族を殺した事を覚えてねえのかって聞いてんだよ！！！」

その言葉を聞いたオンリーの顔から、笑みが消えた。残っているのは、氷のように冷たい無表情。

そして、鏡夜に言うというよりも、独り事を呟くように、オンリーは口を開いた。

「ああ、そう。少年がああ時の生き残りなのかな。ふうん。で？

どうするのかな？　ここで復讐でも果たしてみるかな？　もちろん、  
ぼくも無抵抗じゃないけど」

「もちろん、そのつもりだ！！！」

三年もの間、捜し続けていた相手を前に、鏡夜の心は高揚していた。胸が熱くたぎり、暴走を抑えきれそうにない。

（こいつさえいなければ、俺は普通に生活しているんだ。母さんと父さんと、夕夜と一緒に。それを、こいつのせいで　！！）  
胸の前にある指輪が淡く発光し、能力の発動を知らせる。

「へー」

それを見たオンリーは、珍しい動物でも見るかのような視線を鏡夜に向けた。

一步踏み出し、赤づくしの人間に近づく。もう一步。相手は自分から視線を外さない。なにかを観察しているかのようなようだ。

そして、もう一步。

腕を振り回せば、当たる距離に来て、鏡夜はようやくやく行動に出た。左足を強く踏み込み、腰の回転を生かした拳を繰り出す。……つもりだった。

実際には、踏みこんだ瞬間に、後ろから羽交い絞めにされてしまったのだ。

「新藤くん、こいつと戦っちゃ駄目だ！！！」

後ろから聞こえてくるのは、初めて聞く、東川光輝の焦りが混じった声。

「なにするんですか、光輝さん！！ 離してください！！ 俺はこいつをどうしても殺してたいんです！！ そのためにこんな世界に足を踏み入れたんですよ！？」

背後から抱きつくようにして鏡夜の動きを止めてくる光輝に対して、鏡夜は暴れまわり拘束から抜け出そうと試みる。

「新藤くん、冷静になれ！！ こいつは絶対に君では敵わない相手なんだ！！」

「それでも俺は、命に代えてもこいつを殺すって誓ったんだ！！ 目的を果たせるなら、俺なんてどうなってもいいんだ！！ だから離せえ！！」

二人が攻防を繰り返しているのを見て、オンリーは退屈そうに欠伸をした。

そして肩を竦めながら、「飽きた。ぼくは帰ろうかな。その指輪はしばらくの間、少年に預けておこうかな。無くしちゃ、駄目だからね。それじゃ、またどこかで会えたら嬉しいかな」

小さく手を振ってから、しゅんという音を残し、オンリーは消え去った。

「じゃあね、少年」

その声は、先ほどと同じビルの屋上の方から聞こえてきた。反射的に顔を上げると、太陽を背にして、オンリーがふざけた調子でお辞儀をしているところだった。

「待て……待てよ」

声が掠れる。今までの自分の努力が無駄になってしまう。それが嫌だった。

「離せ、離せよ。離せええええええええ！！」

今まで以上に力を込め、腕を必死に振りほどこうとする。しかし、殺したい相手は、ビルの反対側に消えて行った。

美紀が倒れていた方からガツツと音がする。そっちに現れたのかと思いい、視線を巡らすと、少女が自力で瓦礫の山から這い出てくるだけだ。

「畜生……ちくしょおおおおお！！」

喉が張り裂けんばかりに、叫び、それに憎しみを最大限込めた。

その声は、ビルとビルの間にある峡谷の間を反射して、やがて宙に逃げ出していく。

## エピソード

「で、鏡夜くんが黒炎の破壊者を倒してくれたから、あそこにいた一般人はみんな助かったんだよ。お疲れ様」

「独りぼっち（オンリー）」と遭遇してから一日が過ぎた、ある日の正午。

新藤鏡夜はダウト協力機関である、国立病院の個室に入れられ、いつもの温かい笑みを浮かべている東川璃子から事後報告を受けていた。

「……そうか。それは良かった」

「うんうん、これで後処理もすごく簡単になるし、人も助かったし。言う事なし……うん、ありまくりだね」

「後処理つて、なにするんだ？」

「なにか説教を受けそうだったので、少年は慌てて話題を変えた。東川はその事に気付いているようで、ジト目で見てくるが、しかし、説明だけはしてくれた。」

「時間が過ぎて人を助ける事が出来なかったら、その人たちがやつても不自然じゃない範囲で、自然な死亡理由をつけられるんだよね。最近では……そう、バスの転落事故があったよね？ あの、ワイドショーとかで大きく取り扱われていたやつ」

「ああ……」

「そんなものを見た気がする。」

「まさか、あれが？」

「そう。私達が助ける事が出来なかったから、ああいう扱いになっちゃったんだ。あの会社の社長さんは、ダウトの協力者だから、事件のほとぼりが冷めた後に、多大な謝礼金が払われるはずなんだよね」

「へー」

「それはともかく」

東川の声が、真剣なものに変わったのに気づき、鏡夜は体を強張らせた。

彼女はベッドの横にある椅子から腰を浮かし、寝ている鏡夜を見下ろした。その瞳は微かに揺れているように見えた。

「鏡夜くん、なんで危ない事をしたの？もしかしたら、死んじやつてたかもしれないんだよ？」

「……あはは。どうでもいいだろ、そんな事。そういう事をしたいお年頃なんだ」

「ふざけないで答えてよ。自分の命以上に大切なものなんてあるの？」

「ある」

鏡夜はそれだけ言うと、東川に背を向けるように寝返りをうった。彼女に自分の考えを打ち明けても、おそらくは理解してくれないだろう。だから、これ以上の言葉は不要だった。

しばらくの間、沈黙が場を支配する。窓から入った風が白いカーテンを揺らして、部屋に新鮮な空気を届けてくる。

鏡夜との間に流れた微妙な雰囲気嫌ったのか、東川は病室を出ていく。

「はあ……」

溜息を吐き、体を仰向けにした。そこで、また、ガララツという病室の扉がスライドさせられる音が聞こえてくる。

「こんにちはなのです、ミドリムシ様」

「相変わらずだな、お前」

最悪な呼び名を吐き出しながら入ってきたのは、スーツ姿にハイヒールの神原だった。

「私の言った通りだったのです。良い情報が手に入りましたのですね」

「あいつが、この街に来ているっていうのが、お前が言っていた情報だったのか？」

「そうなのです」

神原はその毒舌からは想像出来ないほどの、無邪気な笑みを浮かべた。

死にかけたわりにはちょっと釣り合わない情報だな、とか思っていた鏡夜だったが、それを見てしまっただけにも言えなくなってしまう。

「ではでは、私はここで。ミドリムシ様ほど、暇じゃないですよ」「俺だって、好きで暇なわけじゃない」

怪我はしているが、入院するほどの大怪我ではない。それを無理やり、というか、半ば脅されてこんな場所に詰め込まれてしまったのだ。

神原も出ていき、静寂が訪れる。

独りになった鏡夜は、サイドテーブルに置いてある指輪を眺めた。『それはしばらく少年に預けておこうかな』

あいつはそう言っていた。

ならば、近いうちに、あっちから会いに来るのだろう。

その時が来るまで。

「もっと強くならなくちゃ」

あいつと戦って、勝てるぐらいに。あいつの正確な強さが分からないのが、難点だが、やる事ははっきりしている。

あとはそれを実行に移すだけだ。

ここから新藤鏡夜の物語は始まる。

どうしようもなく狂っていて、壊れていて、綺麗事なんて通じない世界で。

## あとがき

みなさん、初めまして。

新藤光太です。

王道物を書いてみたいと思って書き始めたこの作品。シリーズ一作目は完結です。

主人公の能力については、まだまだ秘密ということ。二巻目辺りから少しずつ明らかにしていこうと思います。

ですが、今現在、エブリスタでも二作目の更新は滞っているのですが、他の作品完結に持ち込んでから執筆しようか思っているのですが、なかなか完結までたどりつけない。なんか呪いのななにかが作用しているのではないかと密かに疑っています（そんなわけない）。

さて、楽しんでいただけましたでしょうか。

少しでも暇つぶしになっていたのなら、それだけでも僕は嬉しいです。

まだまだ文章力が未熟なので、これからも励んでいこうと思います。よろしかたつら応援よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5015u/>

---

最弱少年と最強少女

2011年7月26日14時51分発行